
断片の使徒 -2-

草野 瀬津璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

断片の使徒 - 2 -

【Nコード】

N1032Y

【作者名】

草野 瀬津璃

【あらすじ】

きっかけは、肝試しだった。ささいな偶然から異世界エレイスガイアに飛んでしまった塚原修太と幼馴染の春宮啓介は、創造主オルファールを助ける為に神の断片を集めることになる。無愛想な主人公修太と、完璧人間だが不思議現象大好きな啓介の異世界オカルトツアー。お次は、迷宮都市ビルクモールに眠る断片を探しに、セーレテュー精霊国へ。仲間も増えて、いつそう騒がしくも旅は続く。(ときどき気まぐれに亀更新でいくつもりですし、遊び心八割でノリで進行予定です。あまり期待しないで下さい。残酷描写

が多いので、念の為、R15に設定させて頂いております（

登場人物紹介

「主人公とその近辺を簡単に」

・塚原修太（１７）

短い黒髪と黒目をした、硬派な印象の少年。

高校一年で両親を亡くし、一人暮らしをしている。啓介とは幼稚園からの幼馴染にして親友。

無愛想で、基本的に無表情だが、啓介や春宮家の人間という時は自然と笑っていることもある。主に突っ込み役。大食いで、食い意地を張っている。グルメな分、料理の腕もそこそこだが、基本、食べる専門。

エレイスガイア ver

黒髪黒目の十二歳くらいの少年。

黒。体調を崩しやすい体質になった。

初期所持品：旅人の指輪、黒いポンチョなどの民族衣装

・春宮啓介（１７）

地毛であるが、茶色い髪と目をしている、格好良いというより綺麗な少年。

修太とは幼稚園からの幼馴染。明るく社交的で、クラスのムードメーカー。男女ともに人気がある。剣道道場に小さい頃から通っていて、県大会常連レベルの強さ。

不思議大好きなオカルトマニアで、何かあるとすぐに出かけていく。その割に部屋は普通。ネーミングセンスが壊滅的。

エレイスガイア ver

ホワイトグレーの髪と銀目の、十五歳くらいの少年。 白。
初期所持品：旅人の指輪、白いシンプルなコートなどの衣服、フリッサ（刺突にも斬撃にも適した片刃の大剣）

妹（16）：雪奈

・オルファール

エレイスガイアの創造主。 霊樹リヴァエルのある花畑に、幽霊のように存在している。

弱っていて、修太と啓介に「神の断片」を集めるように頼む。

姿は十五歳ほどの少女で、銀髪と淡い青の目をした恐ろしいほどに綺麗な顔をしている。 服も白一色。

・フランジェスカ・セディン（22）

肩までの青みがかった黒髪と、藍の目をしている。 青。 左頬に切り傷があるせいで、更にきつそうに見える。

王都の鍛冶屋の一人娘。

パスリル王国王立騎士団の第三師団の副団長。

ユーサレトのことを尊敬しているが、恋慕しているわけではない。 緑柱石の魔女に月光の呪いをかけられ、夜になるとポイズンキャットになってしまう。（ポイズンキャットになる時、何故裸にならないのかは、身に着けているものも一緒に変化するという設定だからとお答しておきます）

装備品：長剣（カットラスを想像してます）、騎士団紋章入りのマント、簡単な荷物が入った鞆など

・神竜クロイツェフ＝シャーリオン

影の化身。色々な姿に変身できるモンスター。

神竜の姿が本当の姿。

性別については秘密にしておこうかな。

茶目つけ溢れる、神様の側近みたいなお人です。

第三話より登場。

・グレイ（32）

海賊船に囚われていた修太を助けてくれた冒険者で、「賊狩りグレイ」の異名を持つ。感情をどこかに置き忘れてきたような、黒狼族の男。

黒髪琥珀色の目、高身長。犬か狼みたいな黒い尻尾あり。端正な顔立ちをしているが、表情がほとんど変わらないのでむしろ怖い。煙草と酒を嗜む以外、趣味らしい趣味なし。武器は斧槍のハルバート。

故郷から送られてくる成人したての子どもの面倒を見ることが多く、見た目と違って面倒見が良く、子どもには甘い。が、見合い目的で送られてくる同族女性には辟易している。

サマルとは商売相手で、コーラルとは旧知の仲。

第四話より登場。

・ピアス・アーレイル（16）

銀髪と董色の目をした美少女。セーセレティー精霊国の冒険者。将来はアイテムクリエートの店を開くのが夢で、その為にトレジャーハンターをして、アイテムクリエートの材料集めや、採集地の開拓をしている。

生活の為に冒険者をしているが、冒険者としての腕もなかなかのもの。だが、戦闘よりは補助の方が向いている。

第六話より登場。

・鋼コウ

鉄狼というモンスター。修太を親分と慕ってついてくる。

本来は二メートルはある狼だが、修太についていく為に、体のサイズを中型犬に縮めた。

灰色の毛皮と黄橙色の目をしてる。黄。吠えることで地の魔法を操り、襲われると体中の毛を鉄に変えて防御する。

・春宮雪奈（16）

啓介の妹。

見た目は天使のように綺麗だが、性格は悪魔じみている。ホラー映画が大好き。

話中、話題や回想のみに登場。

＜＜第七話登場

・フローライト

宝石姉妹の一人、蛍石の魔女。短い銀髪と紫の目をしたボーイッシュな女の子。

外見年齢は十四、五歳。一人称がボクなので、ますますボーイッシュである。

オルファールの加護が弱まった影響で力が弱まり、存在が希薄になっている。さすらいの湖という断片に寄りそうことで、なんとか存在が消えるのを防いでいたが、修太達が来たことで、封印の本の中に移る。

フランジェスカに、満月の夜だけ呪いを無効化する祝福を与える。

＜＜第十一話登場

・ガーネット

宝石姉妹の一人、石榴石の魔女。長女。

ウェーブのかかった長い赤茶色の髪と赤色の目をした、スタイル抜群の美女。外見年齢は二十歳くらい。貴婦人みたいに所作が綺麗。マイペースでお人好し。

寝ていないと存在を保つのが大変で、本体である宝石の姿になっていたところを、宝石と勘違いした人間がレステファルテ国の王様に献上してしまい、日祭りの賞品になっていた。

今は、封印の本の中で寝ている。

サブキャラについては、目次1でご確認下さい。

目次1にない分は、ある程度進むと、紹介ページを設けますので。

登場人物紹介2

*第十二話までの主なサブキャラを紹介。
いつものように簡単です。

<<第八話登場

・エンラ

短い黒髪に青目。 青。

黒狼族の女戦士。 武器はボーガン。

・リンレイ

黒髪を三つ編みにし、黄土色の目をしている。 黄。

黒狼族の女戦士。 武器は槍。

・イエリ（52）

黒狼族のおっさん。 武器はサクス。

灰色の短髪と黒目をしている。 身長は170cm程度とやや小さめだが、細マツチヨ。

薬屋を生業にしている為に屋内にすることが多く、肌は白め。
やや目が悪く、眼鏡をかけている。 しかし嗅覚に優れる為、ろくに見ないでも薬草の仕分けを出来る。

黒狼族の男にしては珍しく学者肌であり、同族の男からは軽んじ

られることも多い。

本人自体は飄々とした食えないオッサンだが、綺麗な顔立ちをしている為にちやほやされていたとか。皮肉げな笑みがたまに目につく程度で、優しそうに見えなくもない。

白い麻の服の上に、黒い長衣を着ている。紋様入り。
魔法を使えないが、魔法陣の知識はある。

・アリテ（１３）

イエリが拾って育てている人間の少女。

黒髪に青目をしているが、右目は傷があって潰れている為、常に包帯をしている。

イエリをお父さんと呼び、薬屋の手伝いをしている。歳は若いが、調合の才能があり、治療魔法の使える 青 として治療師をしている。ときどき近所の治療師（６０代の婆で、ニケナイ）の所に見習いに行く。

線が細くて弱々しい為、イエリが鍛える名目で武術の基礎をさせているが、戦士に育てる気はないらしい。

<<第十話登場

・ジャック・ハーヴェ（２７）

金髪金目、褐色の肌をした見た目が派手な青年。

飄々とした食えない感じだが、人の良い笑みを浮かべる商人。
珍品蒐集家で、豆占いと称して当たりが良さそうな人間を選別していて、修太達に目を付けた。旅人の指輪を奪うのに成功するも、アジトを突きとめられてボコボコにされる。

衛兵に突き出さない代わりに、変わった話を披露し、さらには連

絡先を渡して、買ってくれと言い出す始末。
色々と図太い、ある意味商人らしい商人。

第十二話 迷宮都市ビルクモーレ：1 価値観の違い

常に踊りや歌とともにあるという民が住むセーセレティー精霊国は、緑鮮やかな土地だ。

レステファアルテ国が砂漠の国なら、セーセレティーは亜熱帯の国といったところだ。市場には色とりどりの果物が並んでいて、野菜や肉よりも多く見られた。主食はポルケと呼ばれる蒸した芋らしいが、果物メインで過ごす者も多いのだそうだ。

蒸し暑く、レステファアルテとはまた違う暑さの国である。

修太はこの国に入ってから、カルチャーショックでくらくらしていた。

（まさか、啓介を不細工呼ばわりする奴に会うことがあるとは……）
セーセレティー精霊国では、ぽっちゃりした容姿——ぶっちゃけ肥満体形の方が“美人”なんだそうだ。

恐ろしいことに、痩せ型で素晴らしい美少女にしか見えないピアスは、ここでは“不細工”になってしまう。痩せ型が揃っている修太達のパーティーは全員揃って“不細工”扱ってわけ。

（なんて恐ろしくて、腹の立つ国だ……）

フランジェスカ曰く、この国は熱帯雨林が荒れ地しかない上、果物の方が多く実る為、消化に良いから自然と痩せ型が多い。だから太っている者は、たくさん食べる余裕のある金持ちということを示し、それ故に、そういう体型の者が美人と考えられているのだそうである。

その講釈を聞いたピアスは、董色の目をまん丸にした。

「ええ！？ うちの国の“美人”は世界標準じゃないの！？」

「残念だが、極少数例だ。はっきり言おう。私の価値観では、ピアス殿は、最上級格の美少女だ。他国では気を付けるのだな」

フランジェスカの重々しい言葉に、ピアスはよろめいた。白い肌がカッと赤く染まる。

「び、びび、美少女お！？ なにそれ。そんなこと、言われたことなんかないわよ！ きゃああ、かゆい！」

頬に手を当て、ぶんぶん頭を振りだす。

「ピアスから見て、フランや啓介、 그레이はどう見えるんだ？」

修太はこの土地の人間の目で見たらどうなるのだろうと、単純な疑問を覚えた。自分のことは混ぜない。答えを聞いたら褒められても褒められなくてもどっちでも泣きそうだ。

「シューター君からだ、どう見えるの？」

先に訊かれた。

「まず、俺は普通だな。自分の国じゃ、だけど。で、啓介は美形な方だ。とりあえず、俺はこいつが女にもてる余波で色々面倒事に巻き込まれてた。それくらいには容姿は良い。フランは、性格さえ目をつぶっておけば、美人だと思う。 그레이はどう見ても格好良い大人だろ。俳優でも食えると思う」

修太の率直な意見に、褒められた三人の空気がぎこちなくなる。啓介とフランジェスカは言われ慣れているのかもしれないが、 그레이はやや動揺したようだ。

「……格好良い大人？ 俳優？ お前、目がおかしいんじゃないか？ 俺は怖いとしか言われたことはない」

心から疑うように問われた。

「なまじ顔が良いから、無表情なせいで怖いんだよ。あとは空気？ それで愛想良かったらもててるんじゃない？」

「シュウ、もうちょっとオブラートに包もうよ」

横からやんわりと啓介が口を出す。

流石にずばずば言いすぎたか。

「う、わりい。別に馬鹿にしてるんじゃないからね？」

だいぶ上にある 그레이の顔を見上げ、謝っておく。くそう、首が痛い。

「いや、俺が訊いたんだから、それは構わんが……」

苦々しい声だ。信じられないらしい。

ピアスはぼかんと全員の顔を見て、難しい顔をする。

「そうねえ。あたしから見ると、 그레이は格好良い男の人で、フラ
ンさんは格好良い女の人、ケイは面白い雰囲気の人で、シュ
ーター君は目付きの悪い子どもで、今のサーシャちゃんは可愛い！
そして、ピアスは、未だ十五歳程度の少女姿をとっているサーシ
ヤリオンに笑顔を向ける。

「おい、待て。何で俺だけその評価！？」

修太は思わず声を荒げる。

予想よりひどい結果だったんだけど。

ピアスはからから笑いつつ、右手をひらひらさせる。

「実際に目付き悪いじゃない。ぶっきらぼうだけど、意外に親切で
優しいところもあるのも知ってるわよ？ ケイがフェミニストな態度な
ら、シューター君は、近所のお兄さんみたい！」

「……さいですか」

近所の兄ちゃん扱いだよ。

「分かりにくく気遣いするでしょー？ 花の石鹸買ってきてって頼
んだら、あたしのだけじゃなくてフランさんのも買ってきてたし」
うりうりと、ピアスが左肘で修太の肩当たりを小突いてくる。

「女子ってそういう差別は気にするだろうが！ 伊達にこいつの面
倒事に巻き込まれてねえんだよ、俺は！」

照れもあつて、くわつと怒る。

「そんなに言わないでくれよ、へこむから……。気付いてなかった
んだよ……」

啓介がずどおんと影を背負いだした。修太は後ろ頭をかいて困る。
「ああ、悪かったって、落ち込むなよ。お前が気付かないのも無理
はねえんだ。雪奈の陰謀が八割で……いや、なんでもない！」

うおっ、なんだ、背筋がゾツとしたぞ！

その辺に啓介の妹・雪奈が隠れているのではないかと思い、修太

は腕を押さえて、きよろきよろと通りを見回した。いそいで怖い。

「雪奈がどうかしたの？」

「いや、なんでもない、なんでもないって！ あんま訊くな、俺が呪われる！」

「え？ あ、うん？ 分かった」

必死に言うつと、啓介は戸惑い一つも頷く。

奴ならやりかねん。自分の悪い点を大好きな兄に知られるくらいなら、世界が違かろうと呪ってくるだろう。出来そうで怖い。

修太は大急ぎで話を変える。

「ええと、そうだ。啓介が普通ってというのは分かるとして、なんでこの二人は格好良い？」

「簡単だよ。兵士職は格好良いになるの。だって、鍛えてるんだから太るわけないでしょ？ 筋肉ついてれば、それだけでも印象変わるんだから。ケイは見た目が優男って感じだから、人によつては不細工かもね？ シューター君は、そのまま成長したら完全に不細工かな！」

そんな快活な笑みで言わないでくれ。泣くぞ。

「ケイ殿が不細工……。それはない。どう見てもそれはない。なんという国だ、ここは」

何やらフレンジエス力がぶるぶる震えている。ショックを隠せないようだ。

「あはは、あたしだってびっくりしてるんだから、そんなにびびらないですよ。さて、と。じゃあ、話しておいた通り、あたしはここ、境町フェデクで一旦別れるわね？ 一度アリッジャの街にいるおばばに荷物を届けて来ないと。それに旅に出ることも伝えなきゃ、心配かけすぎて怒られるからさ」

そうなのだ。双子山脈の東側を抜ける街道を抜け、国境を越えてすぐの町、このフェデクで、ピアスは修太達と一度別れて、西の方にある街に行くと言っていた。後から迷宮都市ビルクモーレに来るから、冒険者ギルドで落ち合おうという話で纏まっていたのだ。

そして、ピアスだけ単独行動が心配という啓介や、モンスターを使えば移動が楽だからついていくというサーシャリオンの三人で、別行動をとることになった。

全員でアリッジャまで行っても良かったが、修太達は先に行って情報収集した方が便利が良いということになったのだ。流石は軍人だけあって、その辺の合理的な考えはフランジェスカは頼りになる。フランジェスカは アイアンウルフ 黒である修太の側にいないと夜になった時に困るし、鉄狼のコウは修太から離れないし、グレイも今のところ名を呼ぶまでに“認めて”いるのが修太だけなので、自然とこうなった。正直、不安なメンツだ。フランジェスカとグレイが喧嘩したらどうしよう。修太が止めようとしたら、きつと巻き添えくらって死にそうな気がする。

場のムードメーカーたる三人がいないのは不安でしかないが、仕方がない。先に行こう。

「じゃ、啓介、そっち任せた」

「おう。シユウも無茶しないでのんびり行けよ」

修太と啓介は、右の拳を軽く突き合わせて健闘を称え合う。

そして、ちょうど十字路になっている道で、啓介達は左に行き、修太達はまっすぐに北を進んだ。

「とりあえず、今日はここで一泊だ。宿を探すぞ」

「ああ」

「……………」

「オン！」

フランジェスカの言葉に、修太は返事し、グレイは相槌をして、コウは元気良く吠えた。

第十二話 迷宮都市ビルクモール：1 価値観の違い（後書き）

目次を新しくして、また自己満足小説、のんびり再開です。

通勤や登下校の暇潰し程度の気軽な気持ちで読んで頂ければ嬉しいです（＾＾）

2 円月亭

結論から言えば、喧嘩にはならなかった。

ただし、フランジエスカとグレイとコウとの迷宮都市ビルクモーレまでの旅は、ものすごく気まずかった。

修太が魔力欠乏症の影響ですぐにへばるので、ピアス達と別れた境町フェデクからは、徒歩ではなく“貸しグラスシープ”を利用した。グラスシープってというのは、緑色の毛をした羊で、毛が草みたに見えるからそんな名が付けられている。日本での牛かサラブレッドの馬くらいの大きさはある羊で、大人しい上に帰巢本能が強いから、セーセレティー精霊国では、よく旅人の移動手段になっているんだそうだ。ただし、逃げ足だけはとてつもなく速いので、元の場所に戻るまでにモンスターに襲われると、その逃げの本領を発揮して、すさまじい勢いで駆けだすらしい。

そんな羊が一般的に飼われているこの国では、足の速い人のことを「グラスシープの逃げ足のようだ」というらしい。褒めているのかけなしているのか、今一よく分からない言葉だ。

まあ、羊のことはいいのだ。問題は、貸し羊に乗っているのが修太だけということだ。

慣れている人は自在に操るそうであるが、フランジエスカは馬には乗れてもグラスシープには乗ったことがないから歩いた方がマシと言うし、グレイはそんなものに乗るより自分で走った方が早いという珍回答をくれたから、つまるところ修太は荷物扱いで羊に乗せられたわけである。

すれ違う旅人や行商人の微笑ましいものを見る視線の痛いことと
いったら……！

背中に布を敷いただけで、ふかふかしてかなり乗り心地が良い上、

揺れはあっても振動は羊毛に吸収されてほとんど届かないので、さまざまに快適であったが、とにかく居たたまれなかった。ここに啓介がいたら、あつという間に羊を乗り回して、きゃいきゃい一人で騒いで、微笑ましい視線を全部かつさらってくれただろうに……。

いつも啓介というから、視線は啓介に行き、舞台脇の椅子が机レベルの扱いの普段からしたら雲泥の差である。かといって、歩くのは遅いし体調を崩すから駄目だと言われるし。

ここに来て、これほど自分の体質が嫌になったことはない。

修太はコウがグラスシープの足元を駆けるのを羨ましい思いで見ながら、心の中ではうめいていた。

最初は魔動機のバイクに乗っていたのだ。だが、エルフしか持たない品だからどこで手に入れたとか、売ってくれないかと、通りすがりの商人がうるさかった。それさえなければ、羊なんかに乗らなくて済んだのに。

そして、更に修太をいたたまれなくするのが、家族での旅に見られている点である。詳細は簡単だ。 그레이が父親、フランジェスカが母親、修太が子どもで、コウがペットの犬。ふふふ。どうだ、分かりやすいだろう。

그레이はどうでも良さそうに流していたが、フランジェスカはこんなでかい子どもを生んだ覚えはないと不機嫌になった。確かに、二十代に見えるフランジェスカの年齢を考えると十二歳くらいに見た目の修太は子どもにしては不自然ではある。レステファルテでも姉弟と勘違いされたくらいの年齢差だ。

つい、何歳なのかと聞いたら、二十二歳だとの返事がきた。二十五くらいかと思っていたと内心で呟いたところ、顔から何を考えたのか分かったのか、拳骨を一つ貰った。女に年齢を問うておいてそれか、と、冷たい声で言われた。

どちらにせよ、修太が子どもとなるとフランジェスカは十歳かそこから子どもを産んだことになる。無理だろう、幾らなんでも。しかしここは地球ではない。念の為に結婚適齢期を聞いたら、早くて

十五歳だと言われた。ついでに、二十二歳はややいき遅れだ悪かったなと理不尽にもまた拳をもらった。

相変わらず嫌な奴である。

とにかく、すれ違った人で勘違いした人にフランジエスカがそう答えたら、連れ子ですかい？ と 그레이 を見て言った。なんてしづといんだ。だが、그레이 の年齢ならいてもおかしくはないので、そう思っても仕方がない。

ただの護衛だと 그레이 が答えたら、すれ違った人は、無愛想な感じが二人にそっくりなのにと失礼なことを言って去っていった。

お陰で、またフランジエスカが不機嫌になったわけであるが。

そんなこんなでビルクモーレまで一週間かけてやって来た三人と一匹は、町に入る際にも門番と似たようなやり取りを繰り返す羽目になった。

「だから、俺をにらむなつての」

「うるさい。貴様が悪いんだろ。まったく、これだから 黒 は

……」

フランジエスカは苛立ち紛れについてというように零して、ハッと口を押さえた。パスリル王国での差別用語が、無意識に出てしまっただけらしい。

ちらつと 그레이 がフランジエスカを琥珀色の目で一瞥する。

「お前、もしかやパスリル王国の出か？」

「……………」

「別に、そうだと分かったからといって、レステファルテに突き出したりはせん。だが、この国にはそういう差別は存在しないし、この都市では特に差別は禁止されている。ダンジョンで稼いでいる町だ。冒険者なら身分も種族も問わん。だから気を付ける、町を追われたくなければな」

淡々とした注意に、フランジエスカは僅かに眉間に皺を寄せる。

「……………すまん。今のは、ただの言葉の綾だ。私は認識を改めている。以後、気を付ける」

どうやら修太に向けても謝っただけ。一瞬、フランジェスカの視線がこつちを捉えた。

喧嘩にならなくてほっとした修太は、迷宮都市ビルクモールの町並みを眺める。グラスシープは町の前で解放したので、今は歩きだ。遠くから見た町は防壁に囲まれていて、中に入ると道の両側にびっしりと家が建ち並んでいた。まっすぐに伸びた大通りは、白い石で舗装されている。この辺りでは白い石が採れやすいのかもしれない、防壁も白い石製だった。

「すごいな。全部商店なのか？」

まっすぐに続く道の両側が全て商店のように見えるので、修太は感心して声を漏らす。ここだけショッピングモールみたいだ。

「通りに面している家だけだ。あっちの方は、牛や羊などの放牧地と畑と、ずっと奥に住宅地がある」

グレイが低くかすれ気味の声で、ぼそぼそと言った。その指先が左を示す。

商店の向こうは、放牧地と畑ということか。それは見てみたい。

「じゃあ、こつちも？」

右——方角で言うなら東を示すと、グレイはすぐに答えた。

「門の側が倉庫街になっていて、それ以外は住居区だ。ただ、この道をまっすぐ行った先にあるダンジョンの入口付近の右手側は、まるまる冒険者ギルドの区画だ。緊急時の治療師や薬師、^{ヒーラー}医師も常駐している」

「ほう、面白い造りの街だな」

フランジェスカがしきりに頷いている。

「宿ってどこにするんだ？ 冒険者ギルドの宿舎を使うのか？」

境町フェデクで宿泊する時はそうしていたのを思い出し、修太が問うと、グレイは首を振った。

「この町のギルドには、宿舎はない。町に金を落とせと、そういうことらしい」

端的だが分かりやすい理由だ。

そして、三人と一匹は、商店に入ることはなく、
円月亭^{えんげつてい} という名の宿に入った。

「十四年ぶりだが、まだあるとはな」

グレイが、どこか感慨深げに呟いた。

（十四年ぶりにこの町に来たってことか？ イエリが、グレイにとつてはタブー扱いしてた町だ。何かあったのかな？）

憶測をしてみる修太だが、必要なら話すだろうと思って、特に何も訊かないでいる。フランジェスカもだ。フランジェスカにも聞かれたくないことがあるからか、あら捜しをするような真似はしないみたいだ。無理に訊いて藪蛇になる方が面倒ということなんだろうと推測しておく。

宿の扉を開けて中に入ると、左手にカウンターがあった。

「いらつしやいませ」

カウンターの向こうに腰掛けた四十代くらいの女性が、愛想の良い笑みを浮かべて挨拶した。ぱっちり茶色い目をしたぱっちりした人で、セーセレティー人に多い銀髪をお団子に結っている。それに、あちこちにじゃらじゃらとアクセサリーをつけているから、やはりこの国の人間なんだろう。

茶色い目は、人間でいう魔力を持たない者、つまりノンカラーに分類されている。この人もそうらしい。

なにげなく客を見た女性は、目と口をぱかと開けた。信じられないというように、グレイの顔を凝視する。

「……もしか、グレイ……かい？」

「久しぶりだな、ヘレン」

グレイがあっさり返すと、ヘレンはがたと椅子を蹴立てて立ち上がる。そしてカウンターを回ってくるや、グレイに抱きついた。

「ああ、グレイ！ 生きてて良かった！ あんたの親父さんがあんな死に方した後、いきなり宿を出てくなんて言い出すんだもの、あ

たしはてつきり、荒野で自殺でもする気なんじゃないかと、ずっと気に病んでたんだ」

目から丸い水の粒が次々に零れていく。

グレイは無感動にそんなヘレンを見下ろす。

「ただの客を覚えているとは思わなかったが、気を使わせたのなら悪いことをした」

「そうだよ！ もっと甘えてくれて良かったのに。ほんとこの子は！」

グレイから身を離すと、ヘレンは太い手をグレイの頭に伸ばし、ごしやごしやと黒い髪をかき回した。

「図体もでかくなっちゃってさあ。何、家族の紹介にでも来たの？」

「違う」

グレイの声と、フランジエスカの不機嫌声が被った。

「俺はこの子どもの護衛だ。この女もそうだ。この犬はこいつの手下だ」

簡潔に説明するグレイ。

いや、コウが手下って何。せめてペットでとめてくれませんかね。

「ええ？ この子ども、貴族の子か何かなのかい？」

「違う。後から三人人数が増えるが、そいつの連れだ。俺がこいつらのパーティーにくつついている形になる」

「仕事かい？」

ヘレンは見定めるように、フランジエスカと修太を見る。

「そんな感じだが、迷宮に用がある」

「あんたが“認めてる”人はいるのかい？」

ヘレンはどこか心配そうだ。黒狼族の風習を知っているらしく、確かめるように訊いてきた。

「この子どもだな」

グレイが迷いなく答え、ヘレンは目をパチパチさせた。

「ええ？ この子？ そんなに強いのかい？」

「ふふ、まさか。弱いにも程があるぞ」

フランジエスカが辛抱たまらんとするように、笑い交じりに口を挟んだ。

「うるせえよ」

修太はフランジエスカをにらんでから、ポンチョのフードを外し、挨拶する。グレイが信用している人だから、危険はないと判断した。「初めまして。俺は塚原修太だ。修太と呼んでくれ」

「私はフランジエスカだ。どうぞよろしく」

苗字までは名乗らず、フランジエスカはそう言っで軽く会釈した。フランジエスカもフードを引き下ろしている。

「藍色に近い 青 に、漆黒の 黒 。なるほどねえ。あたしはこの店主の妻、ヘレン・ロブランだよ。旦那はルコッツで、息子はロディだ。——グレイ、勿論泊まっていくんたる？ 何泊だい？」

ヘレンは自分も名乗り返してから、グレイの方を見た。

「さてな、分かんが……。とりあえず一週間としておこう。その頃には連れが増えるかもしれんからな、部屋を移すかもしれん」

「その時は言っておくれ。部屋はどんな感じにするの？」

「三人部屋で、仕切りを一つ置いておいてくれ」

「男女で部屋を分けなくていいのかい？」

「護衛だから必要ない」

グレイの返答に、ヘレンは確認をとるようにフランジエスカを見た。フランジエスカが迷いなく頷くのを見て頷く。

「分かったよ。じゃあ三人部屋で一週間ね。朝と夕のご飯がついて、三人分で一泊900エナだから、6300エナだよ。前払いで宜しくね。途中で出る時は、最終日から三日前までは残りの代金は払い戻すけど、三日以内は返金しないから気を付けておくれね」

「引き落としでいいか？」

「もちろんいいとも」

カウンターの後ろに戻ったヘレンは、台の中から魔法陣が書かれた赤色の水晶みたいなものを取り出した。そして指先を当てると、

空中に赤色の文字が投影される。その文字にタッチパネルのように触れて、次々に画面を切り替えていき、やがて止まったところで、ヘレンはグレイに言った。

「じゃあ、この水晶にカードを当てておくれ」

グレイが冒険者ギルドの識別カードを取り出し、カードについている青色の水晶を赤色の水晶に当てる。魔法陣の色が青色に変わった。

「認証キーをよろしくね」

「ああ」

今度はグレイが魔法陣に触れる。すると、赤色の水晶が一瞬だけ光った。

「はい、引き落とし終わり。後でギルドで確認しておいてね」

「分かった」

「じゃあ、はい、これ、鍵。一応、部屋に簡単な利用説明書を置いてるけど、口頭での説明があるなら部屋に荷物置いてからまたおいで。あと、仕切りは後で持っていくよ」

「分かった」

部屋の鍵を受け取ると、グレイは行くぞとだけ言って、奥の階段を上り始めた。修太やフランジエスカも続き、コウも続こうとして、ヘレンが呼び止める。

「ちよーっと待った。犬連れなら、300エナ追加だよ。掃除が大変だからね」

「すまん、忘れていた」

戻ってきたグレイが、また引き落としをして支払った。

3 ダンジョンとは

部屋は結構広かった。もつと狭い部屋を想像していたので、修太には嬉しい誤算である。

ベッドが三台並び、間にはサイドテーブルが二つ置かれている。入口側には丸テーブルが一つあり、椅子が三つあって、そのテーブルの上には説明書が置いてあった。

他にも、クローゼットが一つと箆笥が二つ置いてあり、窓際には洗濯用なのか、ロープが壁に埋め込まれた金具に縛られていた。

「居心地良さそうだな」

部屋を見た印象を、修太は呟いた。

窓際にはフランジェスカ、扉から近い真ん中にグレイ、壁際に修太という陣取りをした。修太にはよく分からないのだが、出入り口に近い場所にいるのが護衛の位置なんだそうで、窓際は駄目だとよく壁際に追いやられるのだ。

ベッドはふかふかしていて、シーツからはハーブと日向のにおいがした。眠気を誘ってくる。

「値段にしてはいい宿だ。部屋の立地も悪くない。避難経路もまあまあだな。食事の時間と風呂場の位置を確認し、洗濯のことも訊かねばならんが……。ふむ、私はエタール語の文字は不得手なのだ、会話はドワーフに教わったから問題ないが……」

説明書をひらつかせ、フランジェスカは呟いた。

「は？ エタール語？」

修太は目を白黒させた。何の話か分からない。

「セーセレティーやミストレインは未だにエタール語を使う、別文化圏なのだ。レステファルテとは違う」

フランジェスカが何を言っているのか、修太にはさっぱり分から

ない。

「何か違うのか？ 俺には普通に聞こえるし、その文字も読めるぞ？」

「……貴様に文字や言語の違いが分からない理由は知らんが、エタール語というのは、永久青空地帯に浮かぶ^{エタール・ブル}霊樹^{れいじゅ}リヴァエルが、まだ地上にあつた頃から存在する言語らしい。人によつては古代語とも呼ぶ」

「ふうん」

霊樹リヴァエルの葉っぱ、すげえな。葉っぱ飲むだけで、読みと会話が出来るって、まるで神話みたいだ。

「ま、書けるかは知らねえけど」

「書けるのではないか？ ギルドに登録する際、ケイ殿はすらすら書いていたぞ？」

「へえ、後で試してみるか」

それに意識して聞き分け出来るようにしておこう。日本語を区別して話せたのだから、違いも分かると思うのだ。

そして、修太はフランジエスカがテーブルに置いた説明書を手に取ると、パラパラと捲る。

さつきフランジエスカが指摘した部分を、声に出して読む。

「食事の時間は、朝は二の鐘と三の鐘の間。夜は六の鐘半から八の鐘半まで。うわ、何言ってるのか意味が分からん」

「鐘で時間を示している。鐘と鐘の間は約二時間だ。たいてい、一の鐘は、日の出に鳴るものだ」

「なるほどね。時計はないのか？」

「時計？ そんな高価なもの、王侯貴族くらいしか持たぬぞ」

「そうなのか……。えーと、続けるぞ？ 風呂場は、男女別に離れにある。建物を挟んで別々にあるので、看板を見て注意すること。使用料は宿代に込みなので別途にはとらない。共用なので、どうしても一人で使いたい時は、自室に盥意するので受付で言うこと。こちらは別料金で50エナかかる。洗濯を頼む際は、クローゼット

に入れている袋に入れて従業員に渡すこと。その際、手間賃を一袋100エナとる。洗うだけでなく干して畳んでおくので、四の鐘が鳴る前に出した分は、その日の夕方に受付に取りに来ること。それより後は翌日になる、だそうだ」

そこまで読んで、 그레이に宿代を出してもらったことを思い出した。こつちで出すのが筋だろうと思い、旅人の指輪から、財布や、宝石や天然石が詰まった石、岩塩を詰め込んだ袋を取り出す。

「そうだ。 그레이、ここの宿代、こつちが出すよ。えーと、6600エナだったよな。白金貨だっけ？ 面倒だな、金貨で出している？ 嫌だったらこつちの石でもいいけど」

黙々とトランクの荷を広げていた 그레이は、ちらつとこちらの方を見た。興味を覚えたのか、こつちにやって来る。

「見事なものだな。 宝石はともかく、媒介石ばいかいせきがこんなにあるのは初めて見た」

「媒介石？」

「この石のことだ」

「天然石のこと？」

修太からすると、綺麗だけれど宝石に比べればずっと価値の無い石だ。修太が眉を寄せると、無言で修太を見下ろした 그레이は、小さく息をついて、隣の椅子に座った。

「言っている意味が分らん。天然石？ 拾えばそんなもの、どの石も天然だろうが」

「……いや、そうだけど。俺の故郷じゃ、こういう、宝石より価値はないけど見た目が綺麗な石のことを、天然石って言って、その辺に落ちてる石ころと区別してたんだ」

フランジエスカも、残っている椅子に座った。

「待て。ということは、貴様の故郷では宝石の方が価値があるのか？」

「はあ？ 当たり前だろ。 こういう、透明度の高い綺麗な石は、アクセサリーとして価値が高いんだ」

なんか混乱してきた。

「う。なんでそんなじつとこっち見るんだよ。こえーんだけど」

どっちも無愛想なので、眼光が鋭くて怖い。修太は椅子の上で身を縮める。

「……どうも、お前の故郷の物と、ここの物とでは価値観がだいぶ異なるようだな。石鹸がこちらでは高級品なのに対し、お前の土地では10エナ程度で買えると言っていたし」

グレイが呟くように言うと、フランジエスカが信じられないというように目をむいた。

「そうなのか!？」

「高価な石鹸だと、500エナくらいするようなものもあるけど、庶民はもっぱら30から50エナ程度の石鹸を使うな。10エナくらいのはやつは、手を洗う用の安いやつが大半かな」

シャンプーやリンスの値段を思い浮かべながら、修太は答える。

「手を洗う用の石鹸？　なんだ、使用法に区別まであるのか？　信じられん。王侯貴族でもそんな区別はせんだろう」

フランジエスカの動揺したような声に、修太は落ち着かなくなる。

この冷静な女を動揺させる価値観って……。

「ええと？　じゃあ何、俺が言った価値観と違っつてことなら、こっちは天然石の方が高価なのか？」

グレイが静かに首肯する。

「宝石は、宝飾品としては価値がある。だが、こちらの媒介石は、アイテムクリエートに必ず必要になるから、高値で取引されているのだ。魔法の媒介にも使われるらしい。特定のモンスターを倒すことで手に入るからな、ダンジョンでなら多く入手しやすいが、それ以外では入手が困難だ。それに比べて、宝石は掘れば入手出来るから、危険度は少なく、価値が低めというわけだ」

宝石や媒介石を手にとって、比べてみせながら、グレイは言った。静かに元に戻し、指先ほどの媒介石を手にとって言う。

「簡単に言えば、こちらは魔力を多く具有している石で、宝石はそ

うではないというのが、一番大きな違いと言える。これくらいの大
きさで2000エナくらいが相場だな」

「はあ！？ なにそのボロイ商売！」

すつとんきような声が修太の口から飛び出た。だいたい日本円に
して二万円になるのだ。なんだこの石、こわっ。

レステファルテ国で、フランジエスカに宝石や天然石入りの箱を
見せて、そんな宝の山を見せびらかすなと叱られたことをふと思い
出した。あの時は、天然石が宝なんて大げさだと思ったただけだっ
たが、価値が分かれば恐ろしく思えた。

「それくらいでなくては、誰も危険なダンジョンに潜ろうなど思わ
ん。危険に見合った利益が手に入るから、潜るわけだ」

グレイは分かりやすく講釈してくれた。フランジエスカに比べて
なんて親切なんだろう。

「でもさ、幾らダンジョンでも、モンスターを狩ったら絶滅しま
うだろ？ 何でこんなに発展してるんだ？」

修太が根本的に不思議な点を問うと、グレイとフランジエスカが
また押し黙った。フランジエスカが頭が痛そうにしているので、ま
た怒られるのかもしれないと修太は内心で身構える。

しかし、疲れたような息を吐くだけで、フランジエスカはやや皮
肉気味に言った。

「無知というかなんというか……。貴様の世界にはダンジョンはな
いのか？」

「人間と動物、海の生き物とかそういうのしかない。モンスター
はいないし、ダンジョンなんてものもないし、魔法だって存在しな
い。そういうのは全部、架空の物語の中のものだ」

続けて言う。

「フランには言っただろ。俺やケイが違う世界から来たって。バイ
ト帰りに肝試しに行くっていう啓介に付き合う羽目になってトンネ
ル歩いてたら、たまたまこっちの世界に迷い込んだんだ。双子月が
重なる時って、ときどき異界からの迷子が来るんだってさ。オルフ

アーレンが言ってた」

ここまで言うと、なんだか愚痴りたくなって、修太はうだうだと続ける。

「次に繋がるのは三百年後だから、俺らはもう帰れない。その上、この世界は滅びかけてて、啓介は面白不思議現象が見たいって手伝い買ってた。お陰でこうして旅をしてるわけだけど。オルファールンには色々と物をもらって、言葉も通じるようにしてもらって、最終的には霊樹リヴァエルのうろに突き落とされて、あの森で目を覚ましたらあんたがいたわけだけど」

「そういえば、そんなことを言っていたな。というか、貴様、帰れないのか？ それは初耳だ」

フランジェス力が怪訝そうに問う。

「三百年も生きられる人種じゃないもんで。医療技術が発達してるから、平均寿命は百歳程度か？ 長いと百四十歳まで生きる奴もいるが、貴重な例だな」

「ほう。ここは七十まで生きたら長生きな方だな。モンスターに殺されるか事故死か疫病か、時には旱魃で餓死することもある。まあ、モンスターに殺害される確立の方が高いな。その次が盗賊で、次が疫病ってところか」

「うん、まあ、これだけ衛生面が悪いとな、そりゃ疫病で死ぬよ。往来に家畜の糞なんか落としくらいなら、掃除して、畑の肥やしにしちまえばいいのにな。汚物も一箇所にとめて焼却するとかさあ。石鹸で手を洗って、殺菌するのも大事だよな。やっぱ加熱殺菌しないと危ないよな……。つーか下水道くらい作れっつの」

ぶつぶつ呟いていると、また二人が黙っているのに気づいた。うるんな目を向ける。

「今度は何だよ？」

「疫病は呪いの一種だろう？」

「は？」

大真面目に 그레이 が言うので、修太はぼかんと口を開けた。

「そうだ。死者の魂が天に行く時、身体から魂が抜け出る苦痛が呪いになって、それが満ちて、病を起こすと聞くが」

「はあああ？」

フランジェスカまでもが言うので、あんぐりとする。

疫病が呪いつて、意味わかんねえ。

「なんだ、白教でもそういうのか？」

「その辺はどこも同じだろう。 白 崇拜が基本だ」

「なるほどな」

二人はしたり顔で言い合っているが、修太は頭を抱える。

「何だよその原始的な考えは。魔法とかあるくせに、意味わからねえ。いや、そういうのがあるからこそその弊害か？ いいか、疫病っていうのは、ウイルスが引き起こすんだ。人から人へ感染したり、ネズミや蚊から人へ感染したりする。俺はその辺は詳しくはないけど、ワクチンがあれば、たいていのものは治るようになった。そういうのが撲滅されたのは、最近だけだな」

「ふむ？」

「さっぱりだな」

「いいから聞け！ 疫病は、ある程度は予防出来るんだ。まず、衛生面を整える。通りに糞があるなんてのは駄目だ。不潔すぎる。汚水の水路も別に作るべきだ。そして、ゴミは一箇所に集めて、廃棄するようにする。生ゴミなんかを適当に積んでみる、におうしやっぱり不潔だ。そして、風呂には出来るだけ毎日入る。汚れを落とすってことだ。部屋の掃除や、洗濯もしなくちゃいけない」

「うむ」

フランジェスカは興味があるのか、真面目に頷く。

「それでも病気にはかかる。その時は、病人は病人で固めて、健康な人間は出来るだけ近寄らせないようにしなくちゃいけない。別に閉じ込めるわけじゃなくて、対処する人間を少なくして——出来れば、軽度の症状の人間が当たるといいんだが、そうして看病するんだ。窓を開けて換気して、衣服やシーツもこまめに洗う。滋養にい

いもの食わせておけば、それだけでも違うはずだ」

「しかし、家族なら病人を見舞うし、家族全員で看病に当たるものだろう？　でなくては冷たすぎやせんか？」

「そんなことしてみろ、一家全員、まとめて病にかかって全滅だ。健康な人間の役目は、病人のサポートで、病人が復帰した時に、生活できるように基盤を維持しておくことだ。ここで言うなら、せつかく治ったのに、畑が死んでましたじゃあ、今度は飢え死にしちまうだろ？　見舞いに来るのが悪いわけじゃないが、人から人へ感染する病の時は控えておくべきだ。でないと、移動時に他の町にも病を撒き散らすことになって被害が増す」

「なるほどな」

修太の言葉はフランジエスカには目からウロコのような話な上、今までの考えを打ち砕かれて衝撃を覚えたが、理屈としては通っているので、感心した。

ここまで喋った修太は、普段が寡黙なので疲労を覚え、ため息を吐く。

「で、なんでこんな話になったんだっけ？」

「確か、ダンジョン内のモンスターの絶滅を心配していたな」

「そうだよ、それぞれ」

ついついここに来た経緯の愚痴など始めてしまったので、だいぶ反れた。

「ダンジョンの内部にいるモンスターは、外のモンスターと性質が異なる。擬似生命体というやつで、いわばモンスターの皮を被った、核石といったものだ」

グレイが説明してくれたが、修太はよく分からなくて、眉を寄せた。

仕方ないなあというように、フランジエスカが付け足す。

「貴様、熊と熊の縫いぐるみでは違うものだというのは分かるな？」

「分かるに決まってるだろ。そこまで馬鹿じゃねえよ」

むすっとして返す。

「つまり、そういうことだ。熊の形をした縫いぐるみに、生命の代わりとなる石が入っている。熊の形をしているだけで、それは熊ではない」

「おお、なるほどな！」

それは分かりやすい。

「あのジャックとかいう商人が、ダンジョンは地の精霊が作ったと言っていただろう？ 世界の箱庭をどれだけ本物に似せて作れるかを競ったものだという話がある。地下にも関わらず、草原が広がっていたり、溶岩が流れる上の橋を通ることになったりと、色んな仕組みになっている。そして、モンスターは次から次に生まれる。どうも、一定量が減ると、その分が生み出される仕組みらしいな」

「このモンスターは、異物を襲うようだな、ここでは黒も役に立たん。そんな時に結界として使うのは、この、黒輝石だ」

グレイは天然石の詰まった箱の中、正方形に切られた黒い石を示す。

「正方形になるように置くことで、結界になるんだ」

「マエサマナにもあった？」

「ああ、あれもそうだ。あそこで採れる石の表面に、黒輝石を砕いた粉末を塗布している。それだけで、結界になる」

「何で正方形？」

「俺は詳しくは知らんが、前に、結界を意味する魔法記号が正方形だと聞いたことがあるな」

グレイはちらつとフランジェスを見た。

「その通りだ。子どもに持たせる魔除けのお守りにも、よく刺繍されている」

「へ」

それは面白い。

「結界に使ってメモがあっただけど、どう使うか分からなかったから助かるよ。じゃあ、これは迷宮で使えばいいわけだ？」

「ああ。ただし、お前は留守番だな」

「何でだよ！」

フランジエスカにくっつかかるが、鼻で笑って一蹴された。

「冒険者ギルドは十五歳から登録出来る。ダンジョンには冒険者でなければ入れない。つまり？」

「俺は冒険者じゃないから入れないってことか!？」

ずーんと落ち込んで、修太は肩を落とした。

「なんだよそれ、やることなくて暇すぎなんだけど。つか、完全にお荷物だろ、俺……」

「何を今更。最初からそう言っているだろうが」

悪びれなく肯定するフランジエスカを、どぎつい目でにらんでおく。少しは慰めるよ、大人げない奴！

「そもそも、体調を崩しやすい人間を連れて行けるほど、ダンジョンは甘い場所ではない。こればかりは諦める、シューター」

「グレイまで……」

なんか、フランジエスカよりグレイに言われる方がダメージがかい気がする。フランジエスカの悪態には慣れてきているようだ。

「とりあえず宿代を払っとくよ……」

「今回は俺が出ておく。次回からはそちらで持て。どうせ使わなくて貯まるばっかりの金だ」

グレイは平然と言い、支払いを退けた。

おお。やっぱり格好良い大人だ。

「その代わり、これを少し見させてくれ。あまり目にしないから、珍しくてな……」

グレイが媒介石や宝石を示すので、修太はどうぞご自由にと箱を手で押した。

4 父親

冒険者ギルドには明日行き、今日はゆっくりすることになったので、修太は書店を探すことにした。

本は高価だが、どこの町にも一軒はあるらしい。グラスシープという巨大な羊がいる分、羊皮紙は他の国よりは安い方で、自然と本の値段も下がっているのだそうだ。

ちなみに、今までは触れなかったが、ここにはトイレットペーパーは存在しない。

レステファルテ国では使い捨ての木ベラ——木を薄く削っただけの板——がその代わりで、熱帯雨林が多い為に植物が大きいセイセレイターでは、手の平より一回り大きめの葉っぱをトイレットペーパー代わりにし、そのまま捨てる形になっている。迷宮都市ビルクモーレは下水道があるので、そのまま便所とは名ばかりの穴に投げ捨てるだけだ。穴に便器を置いていただけなので、水の流れる音が絶えず聞こえる。下水道ではなくて川にそのまま流しているような感じが近いかもしれない。まあ、レステファルテみたいに、地面に埋めた甕かめを便器代わりにするよりマシかな。におわないし。

日本で遊びに行くみたいなさ感で外に出て行こうとしたら、ポンチヨをむんずと掴まれて止められた。

「護衛の意味を分かかってない奴だな。そもそも、見知らぬ土地を子どもが一人でうろろろするんじゃない」

ええ。もちろん、掴んだ人はフランジェスさんですよ。そうに決まってるじゃないすか。

「現地の子どもとならいいのか？」

うろんな目で返すと、意外にも肯定が返る。

「まあそうだな。どこが危険であるかないかの区別がつく者が側に

いるなら、私も止めん」

フランジェスカは少し考え、問う。

「なんだ、腹でも空いたのか？」

「フラン、お前、俺イコール食べ物とか思ってたんじゃないやねえだろうな？」

「思っているが？」

「ぐっ。まあいい、否定出来ないしな。書店があるなら行こうかと思ってる」

よく考えたら否定出来なかったので、それについては流し、用件を言う。

「ついでに買出しにも行くか」

「あと、文房具と紙も買いたい」

「見かけたら買えばいいだろう。仕方ないな。貴様には花の石鹸を買ってきてもらった借りがあるし、今回は喜んで付き合ってたやろう」

「……そりやどうも。よろしく」

だから何でそう上から目線なんだ？

少し不満に思いつつも、あのことを一応は借りと思う程には喜んでいたのでと遠回しに知り、まあいいかという気分になった。

「グレイ殿はどうする？」

「ああ、俺も行く。煙草が切れた」

ハルバートを手には、グレイが答える。紙煙草の箱を振って見せた。何の音もしない。

「ワフワフ」

コウがじーっと修太を見上げ、尻尾をパタパタ振っている。修太と目が合うと、床に伏せて、目の上に前足を置き、哀れっぽく「クウン」と鳴いた。賢いというか、芸達者というか……。

修太は呆れた。

コウは賢く、行儀良くしなかったら放り出すと言った修太の言葉を正確に理解して、普段は賢い犬のフリをしている。とはいえ修太はペットに興味がないから、ついてくるならついてくるでどうでも

よくて、放任主義を貫いていた。

が、こんな風に訴えかけられると少しは良心がとがめるというものである。

「そんな風に可愛い子ぶらなくても、ついてくればいいだよ」

「ワンッ！」

パツと身を起こしたコウは、修太の足元に纏わりついてきた。何でこんなに懐かれているのか、未だによく分からない。

（ついでに、犬用のブラシと毛を切るハサミも探してみるか）

砂埃のついたコウの毛を見ながら、修太は頭の隅でそう呟いた。

最初はただの気のせいかと思った。どうも視線を感じるのだ。伺うような、確かめるような、じろじろと見る眼差しだ。

でも、しばらく街中を歩くうちに、そうじゃないと気付いた。

確信に変わったのは、全員で雑貨屋に入った時だ。

「店主、紙煙草は置いてあるか？」

グレイが店主のおじさんに訊いた瞬間、何故か店主の肩がびくりとはねた。

「え、ええ。置いてます。……なあ旦那、以前、この町にいたりしたかい……？」

五十代くらいの親爺は、そわそわと問う。グレイが頷くと、手を叩いた。

「やつぱり！ 黒狼族なのといい、ハルバートを持つてるのといい、似てると思ったんだよ。フレイニールさんとこの倅せがれ だろ？」

そこで急にしかめ面をした。

「今頃になって戻ってくるなんて、黒狼族つてのは情に薄いのかね？ 墓参りくらい、来てやればいいもんを。あの後、すぐに町を出て行っちゃまし、ザーダの旦那達もあんたのこと探してたよ。戻ってきたら教えるって、十四年も経ってんのに、未だに言いに来る」

言いながらも、後ろの柵から紙煙草を取り出し、ポンとカウンタ

ーに置く店主。30エナだよと付け足した。特に銘柄などは無いらしい。グレイが1エナ銅貨を三十枚、じゃらじらとカウスターに置くと、それを素早く数えて回収する。

「……あいつら、元気にしてんのか」

買った煙草の箱をその場で開け、ジッポライターで火をつけて遠慮なく店内で吸いながら、グレイは少しの沈黙の後、そう問うた。店主が文句を言わないのを見ると、これが普通なんだろう。

（フレイニールって父親の名前か？ あの後って何なんだろ。それに“あいつら”に良い印象ないみたいだな……）

何となく声のトーンが下がった気がする。

そちらに視線を向けないように注意しつつ、修太は日用品の棚を見る。スポンジ代わりになりそうな、ヘチマを乾燥させたような物や、新調したいタオルなどを籠に放り込む。他にも下着を買いたいところだが、この下着は木綿や麻の肌着と、細長い布を巻くだけのなんちゃって相撲まわしなので困る。上はいいけど下が困る。修太はトランクス派なのだ。面倒だからいつそのこと、作ってみるのもいいかもしれない。そこまで裁縫は得意ではないが、欲しい物が存在しないのなら作るしかないのだ。裁縫箱や布も買っていく。布はないが、裁縫箱はセットで置いてあった。500エナか……。こんなもんかな？

「元気も元気だよ。まああの日から、100層より下には行かなくなっちゃったけど。今じゃ冒険者の間じゃ顔役みたいなもんかね。ザーダはよく一人で潜りに行くし、ヨーエは魔具屋のこの娘と結婚して、店やつてるよ。たまに迷宮に潜るくらいだな。エルザはギルドの治療師ヒーラーとして詰めながら、ときどき迷宮に潜ってる」

「ふうん……」

訊いておきながら、グレイの関心は薄そうだ。

「俺が来たら教えるというのは、ここだけに言ってるのか？」

「いや、親しくしてる店には言ってるみたいだが。会いに行ってみよう。心配してるんだ」

「……どうだかな」

小さな声で呟いて、グレイは修太達の方を見た。

「フランジェスカがいるからいいな？ 俺は少し抜ける」

「分かった」

「おう」

フランジェスカが頷き、修太が片手を軽く挙げるのを見てから、グレイは隙の無い足取りで店を出て行った。

店主の苦々しい顔が少し気になる。

「つたく、愛想の無さは進歩してないねえ」

「おじさん、グレイの知り合い？」

修太の問いに、店主は首を振る。

「知り合いつていうか、客の一人だよ。どっちかというと、あのガキの父親と知り合いだ」

「フレイニールという人か？」

フランジェスカが口を出す。

「そうだよ。人間でノンカラーだったが、武の才に秀でててねえ。しかも陽気な男だった。この町であいつを嫌ってた奴なんていないんじゃないかな」

「へえ……」

駄目だ。想像がつかない。

「息子だって紹介された日にはおつたまげたね。顔は似てたが、雰囲気全然似てなくてね。愛想が全然違うよ」

顔が似てるけど愛想がいい。無理。やっぱり想像がさっぱり出来ない。

「ハイレベルの冒険者だったけど、最後はダンジョンで死んじまつてね。ほんと冒険者ってやつは、どうしようもないよな。あんな死に方はしたくないね」

そこで喋りすぎたと思ったのか、店主はわざとらしく咳払いした。
「で、それ買うのかい？」

「うん。会計お願いします」

籠をカウンターに乗せ、修太は軽く会釈する。

そんな修太をじっと見つめた店主は、ここ最近でよく訊く台詞を口にした。

「ところで、坊主、あのガキの息子だったりするのかい？」

4 父親（後書き）

またもや汚いお話を書いてすみません。

ええ。冒頭の方の部分のことです。

以下は読まなくてもいいですけど、まあ、一応、豆知識みたいなものを書いておきます。毎度のことですが、興味がある場合はご自分でも調べてみて下さいね。鵜呑みはよくありませんから。

木ベラと埋め糞については、考古学の分野から持ってきました。葉っぱとかそういうのは私の創作です。

木ベラ、えーと、木簡というものが奈良時代以降あるのですね。文字を書いて、刀で削ってまた使い、薄っぺらくなったものを、糞ベラとして使ってたわけです。事実かは分かりませんが、トイレ遺構から見つかるので、そう考えられています。トイレットペーパーみたいなもんです。

で、埋め糞ですが。江戸時代にもあったのかな？

そのまんま、地面に糞埋めて、用を足してたんですね。

恐らく使用後は汲み取って捨てていたはずですが、詳しいことは私もよく分かりません。

川の上にトイレ作って、水洗便所もどきは、前に中国の山奥のドキュメンタリー番組で、そういうのが出てたから、書いてみただけです。

個人的に、世界の下着を調べたいです。うーん。せいぜい、ワイシャツが実は下着代わりだったことくらいしか男性下着の歴史は詳しくないです。いや、詳しくても何かどん引きですけど。

これについては、朝のニュースで話してたから知ってるだけで…。

すごい不思議なのが、イギリスの民族衣装って男性はスカートじゃないですか、下着どうしてたのかなーって。あああ、すみません。これ逆セクハラですね！ ただの疑問です；

5 識字率の問題

まじでねえわ。

何かというときグレイの息子と勘違いされて、修太は精神的に疲れていた。帰ってきたら、宿のおかみさんにまでこっそり訊かれたのである。

顔は似てないけど雰囲気こそつくりつて、何、俺に喧嘩売ってんの？ 顔は全然駄目だけど、無愛想だねって言いたいのか？ 悪かったな、平凡面で！

書店で、歴史書や薬草調合の基礎、アイテムクリエイトについて書かれた本を見つけ、部屋でベッドに座って、熱心に目を通しつつ、関係ないところで関係ないことを思い出して、息を吐く。

そうしながら、気になったことを、買い求めてきた羊皮紙にペンで書き付ける。いちいち羽ペンの先にインクを付けなくてはいいのが面倒臭い。

ちなみに、文字は書けた。エターナル語も常用語もどっちも。

そんな修太のベッドの側には、綺麗さっぱりしたコウが丸くなっている。井戸の水で洗った上で、毛をブラッシングして、一度切ったのだ。毛を切ったら素材になるとは聞いていたが、針金みたいな鉄の素材になるのかと思っていた。しかし丸い粒になって床にころころ落ちたので少し面白かった。ただ、それを集めて布袋に入れるのが面倒ではあったが。

そんな風に構ったのが良かったのか、満足げに丸まっている。鬱陶しくなくていい。

「面白いなあ。『はじめての薬草入門』。これなら俺でも傷薬程度なら作れそうだな。それにこっちの『カラースなら簡単に作れるアイテム作成』もさ、いいな。カラースなら血染めの系で簡単な防護

付加の品が出来るとはね。俺の血だったら、モンスター避けと簡単な魔法の無効果か。うわ、気持ちわりい」

ぶつぶつ言いつつ、そんなに簡単に出来るのなら、一度試してみようかと、なにげなく自分の手を見つめて、どこを切ったらそんなに痛くないかと考えていると、ベチンとポイズンキャット姿のフランジェスに強烈な猫パンチをくらい、本が跳ね飛ばされた。

「……何すんだよ」

「シャーッ！」

なんかすごい威嚇された。

「恐らく、そんなことを試すのなら本なんか捨てると言っているのではないか？ それとも、すぐ寝込む癖に馬鹿か！、か」

得物の手入れをしていたグレイが、横からぼそぼそ言った。

「それってグレイの意見？」

だいぶダメージを受け、へこみつっ問う。

「その女が言いそうなことを言っただけだ」

「確かに言いそうだな」

フランジェス力が満足げに頷いているところを見ると、そう遠い意見ではなさそうだ。

「まあ、俺としても、そんな馬鹿げたことを試す時間があるなら、子どもはとつと寝ると言いたい」

「俺は子どもじゃねえ！」

ぶんむくれ、床に落ちた本を拾う。まったく、どいつもこいつも俺を小さいだの子どもだのチビだの言いやがって。

不満たらたらで、口を引き結んだまま、本をめくる。

「シューター、お前、暇潰しだと言ってよく本を読んでいるが、元の世界でもそうだったのか？」

「まあな。読書するのは褒められることだったし。ほんと家事手伝いとかバイトとかで忙しく働いてる方が好きなんだけど、このなりだからな。甘んじて本を読むのでとめてる」

あとは身の回りの品の手入れとかな。ほつれた服の修繕とか、汚

れた靴を磨くとか、洗濯するとか。

「そうか。俺は文字は簡単なものしか読めないし、自分の名くらいしか書けないからな。面白いのか分からんが……」

「え？ そうなのか？」

修太は驚いた。

識字率がほぼ百パーセントの国で育っているのに、文字の読み書きが出来るのが普通だと思っていたが、そういう国の方が少ないのだと思い出す。

「ああ」

「お金使う時に不便じゃね？ 数字も読めないのか？」

「簡単な数字ならまだ分かるが、コインは種類が一目で分かるから、数字が読めなくても困らん」

「なるほど」

言われてみれば確かに。

「飲食所のメニュー程度なら困らんが、手紙を出す時や貰った時、冒険者ギルドで依頼表を読めないのはつらいな。まあ、手紙はギルドで仲介してもらった相手に、バイト代を出して代筆してもらえし、読む時も、バイトを雇えばいいからどうとでもなるが。依頼表を読めなくても、受付でこういうのがないかと口頭で質問すればいいしな。お前のように本を読める程の者は、そう多くはない」

「ふーん？ それってつまらないな。教えようか？」

「む？」

「グレイには何だかんだと世話になってるから、文字教えるくらいなら手を貸せるよ？」

修太が善意から言うのと、グレイはやや間を置いて、頷いた。

「それは、教えてくれるのなら教えて欲しいとは思うが……。読めれば便利そうだしな」

「うん。じゃあ、明日からな」

修太がにと口元を引き上げて言うと、グレイはぼそりと「よろしく」と言った。

どっかで恩返しをしておかないとバチが当たりそうなので、修太は機嫌良く頷き返した。

*

迷宮都市ビルクモールの冒険者ギルドは、外観からとても大きかった。白い石造りで、四角い。市役所みたいな見た目で、中もそんな感じだ。

スイングドアになっている出入り口を通過すると、真正面に受付が見え、右手は待合室のようになっていた。テーブルや机が整然と並び、壁にはB5くらいの羊皮紙やポスターが貼られている。依頼に関することや、町のイベント情報、商店のセールといった広告まで貼られているようだ。

ダンジョンに潜るには、冒険者であることと、この町の冒険者ギルドで迷宮探索登録をしなければいけない。登録することで通行証明書を買い、出入り口で入場料を払う仕組みだ。

ダンジョン内で得た物には税金はかからない代わりに、入場料を取っているらしい。200エナ、つまり日本円で約二千円だ。水族館の入場料みたいなもんだ。

更には、ダンジョン内で入手したアイテムの買取もしている。一回ごとに手数料を100エナ取るようだが、税金がかからないのを考えれば良心的な方だろう。

「このギルドは町役場みたいだな。アストラテのギルドみたいに、場末の酒場みたいな空気もないし」

「ここは飲酒禁止だからな。酒を飲みながら話し合いをしたい奴は、酒場に行くんだ」

修太の呟きを拾い、 그레이がそう教えてくれた。

ほとんど独り言だったので、聞いていたことに驚く修太。フランジェス力は完全にスルーしているのを見ると、見掛けのつつきにくさより、 그레이の方が面倒見が良い方なんだろう。

修太は登録出来ないが、宿で待っているのもつまらないので、一緒に来た。

「俺、あっち見てる」

「ああ。勝手に外に出るなよ」

壁際の広告を読もうと修太が壁に向かうと、すかさずフランジェス力が釘をさしてきた。どうも、目を放すとすぐに誘拐されると信じてるみたいで、目を隠せだの勝手にいなくなるなだの言われる。海賊の時もジャックの時も、どっちも側に人がいたんだけどな。

修太にコウがついてきて、修太が壁際に立つと、行儀良くお座りした。

「薬屋ハツカーで、傷薬が三割オフのセール中かあ。白葉の月の30日に祭り？ 収穫祭か。へええ。フリーマーケットはいいな。えーと？ 倉庫街にてガレージセール？ 倉庫だけにな」

面白い。フリマとかガレージセールとか、こつちでもあるのか。

「あら、ボク、文字読めるの？ すごいわね。ねえ、面白いのあったらお姉さんに教えてくれない？」

ぶつぶつ呟いてたら、冒険者らしき女性に声をかけられた。二十代後半くらいか？ 左目に黒い眼帯をした、薄桃色の髪と赤目をした華やかな印象の女性だ。ベルトにダガーを二本吊っていなかったら、ただの受付のお姉さんといわれても通用しただろう。

修太は首を傾げたが、 그레이があまり文字を読める人がいないと言っていたのを思い出し、暇つぶしも兼ねて、今読んだ分をもう一度声に出して読んだ。

「あらすごい。どれも正解ね。頭良いのね、ボク。常用語もエターナル語も完璧」

女性は文字が読めないのかと思ったら、読めるらしい。

「……どうも」

軽く会釈しておく。

「ここに用事？」

「連れが。俺は待つてるだけ」

「そうなの。ワンちゃんもお利口さんね」

女性はにつこりとコウを褒めた。コウはワンツと小さめの声で吠え、尻尾を振る。褒められて嬉しいらしい。

「お姉さんもダンジョンに潜るのか？」

修太が問うと、女性は首を傾げる。

「まあときどき？　でもお姉さん、ここで働いてるからあんまり潜れないのよね」

ギルドの職員らしい。

へえと思っていると、書類を持った青年が大腿に歩いてきた。

「マスター、こっちの書類を見て欲しいんだが」

二十代後半か三十代くらいの青年は、目付きが鋭くて猛者の迫力を持っていた。すらりとした体格といい、百八十センチはありそうな背といい、雑誌モデルみたいで格好良いが、見下ろされると気圧された。

「お姉さん、もしかしてギルドマスター？」

「ええ。私はベディカ・スース。桜火^{おうか}の二つ名を持ってる元冒険者よ」

「ふうん？」

すごいのかよく分からなくて、曖昧に頷く。

「こっちはレクシオン。こんな見た目だけど、非戦闘要員なのよ。治療師なの」

毛先だけ緑色であとは茶色いなんて不思議な髪だなど、レクシオンの髪に見とれていたら、思わぬ言葉をもらって驚いた。

「えっ」

思わず声を上げてしまう。

「すごく強そうに見えるのに」

「それはどうも。ま、非戦闘要員ではあるけど、冒険者としても治療師としても、どっちも青ランクは持つてる。……迷子？」

レクシオンの視線が、問うようにベディカに向く。

「人待ちだって」

「へえ？ 見かけない顔だけど、誰待ち？」

「今、受付にいる二人だよ。言っとくけど、子どもでも家族でもないからな」

先手を打っておく。

「あつちの黒狼族と知り合いなのか？ マスター、彼、賊狩りですよ。賊狩りグレイで名が通ってる、紫ランクの大物。昔、一時期ここにいた、フレイニールの息子とかいう」

「へえ。それは挨拶してこなきゃね。同じ紫ランクには久しぶりに会うつし。じゃあね、ボク」

ベディカは書類を片手に、グレイやフランジェスカのいる方に歩いていった。

「少年、本当に息子じゃないの？ 雰囲気そっくりだけど」
レクシオンが遠慮なく問うのに、頷く。

「どうせ無愛想なところがそっくり、なんだろう。違うつて」

「そりゃ失礼。あと、ここにいるのは構わないけど、悪戯はするなよ」

「広告を読んでもらうだけだ」

失礼な。広告はがして遊んだりしないぞ。
意外そうに片眉を跳ね上げるレクシオン。

「文字読めるの？ 書くのは？」

「どっちも出来るけど？」

「そりゃいいや。手紙の代筆のバイトがあるから、もし良かったら声かけてよ。小遣い稼ぎにいいだろう？」

レクシオンはにっと笑うと、軽く手を振って受付の方に戻っていた。

（ノリ軽いな、ここの奴）

子ども相手にバイト薦めて帰るとか。

それが普通なんだろうか？ よく分からない。

6 弟子シーク

登録をつつがなく終え、迷宮に潜る準備の為に商店を巡るという話になり、冒険者ギルドを出ようとしたところ、ちょうどギルドに入ってきた少年が、グレイを見て驚き、一瞬後にはぱあっと表情を明るくした。

白い髪に青い目をした、利発そうな少年で、肌は浅黒く、衣服は黒く、そして狼のそれに似た黒い尾を持っていた。黒狼族だ。背中に大きなバスタードソードを背負っている。

「師匠っ!？」

大声でそう叫ぶや、周りが驚いてこちらを見る中、少年はグレイに突撃をかました。

「シークか。変わらずうるさいな」

グレイに抱きつくこうとしたのか、だだどと駆けてきた少年を、グレイは一步横にずれてかわす。

勢いがついていたせいで転んだ少年は、ごろごろ回転して受付のカウンターにぶつかって止まった。

一瞬、ギルド内がしーんと静まり返る。

しばらく沈黙していた少年であるが、すぐに復活した。

「ひ、ひどいです……。二年ぶりの弟子との再会なのにい」

顔から激突して、鼻を赤くし、やや涙目で座り込むシーク少年。うなだれる様は子犬にしか見えない。

「その、再会時に誰にでも抱きつく癖をやめろと言っただろう。なにが挨拶はハグが普通だ。お前の親はおかしい」

グレイは冷たく言った。

「ちょっと！ お袋のこと悪く言わないで下さいよっ！」

「知るか。常識を教えん親など有害なだけだ」

グレイの返事はにべもない。

しかしまあ、シークも思い当たる節が色々あったのか、うつと黙りこんだ。だが、気を取り直したように立ち上がり、意気揚揚と近づいてくる。

「なんだ、師匠というのは？」

フランジェスカが怪訝そうに眉を寄せ、修太の気持ちも代弁して言った。

「二年前まで、四年程面倒を見ていた同胞の子どもだ。イエリが押し付けてきてな。——シーク、トリトラはどうした？ お前ら、一緒じゃなかったのか？」

「トリトラなら、三十階層をソロで潜ってるよ。師匠の言う通り、腕を磨く為にここで修行中だ。二年も潜ってるのに、まだ七十階層までしか行けてないんだけどさ」

「いいペースだな」

「全然だよっ！ だって師匠、俺らと同じ十八の時には、一人で百階層まで行ってたって言ってたじゃんか。俺らだって負けないんだ！」

ギルド内がざわついたところを鑑みるに、どうもそれはすごいことらしい。グレイの超人ぶりを見ている限り、すごい記録なんだろうなあという予想はついたが。てか、こいつ、一つ年上なのか。ガキっばいから下に見えた。

「師匠、せつかくだから一緒に昼飯行こう。それから、いつまでここに滞在するんだ？ また稽古つけてよ！」

がんがん距離を詰めてくるシークの頭を、グレイは片手で掴むと、自身から大きく引き剥がした。

「うるさい。寄るな。鬱陶しい」

本気で鬱陶しそうだ。親犬に纏わりついて、首の後ろをくわえて放り投げられる子犬の幻覚が見えた気がした。

「俺、てつきり黒狼族の男は、皆グレイみたいに無表情なのかと思つてた……」

修太が思わず呟くと、シークがこつちをぎらつとにらみつけた。

「誰だ、てめー！ 師匠に失礼だろ！ 師匠の顔面筋が死滅してるのは、師匠のせいじゃないんだぞ！」

「お前の方が失礼だ」

グレイの容赦ない肘落としがシークの頭に決まる。ぎゃんと悲鳴を上げ、床に潰れるシーク。

グレイはふんと鼻を鳴らすと、すたすたとギルドの出口に向かう。
「そのガキは放つといていい。行くぞ」

「あ、うん……」

もしかして気にしてたんだろうか。それにしても自然すぎる会話に、よくこんなやり取りをしていたんじゃないかという気がした。

「グレイ殿、大人げないぞ……」

やや引いた様子のフランジェスカが呟くが、修太に言わせてみれば、フランジェスカも普段から結構大人げないので、どっちもどっちだと思う。

「し、ししょ……。もう言わないから待つてえ……」

床でぴくぴくしながら、待つてくれと懇願する声が聞こえてくるが、“師匠”の言葉があるので無視しておいた。それに修太は騒がしいのは好きではない。

ギルド内にいる冒険者や職員が、皆、哀れなものを見る視線をシークに向けていたのは、言うまでもない。

*

「なんなんだよ、このチビ！ 俺の師匠に馴れ馴れしくすんな！」

商店巡りの最中、復活して追いかけてきたシークは、グレイの腕にしがみつき、犬歯を見せて修太を威嚇してきた。

馴れ馴れしくした覚えはないし、威嚇される覚えもない。

(うわ。面倒くせえ……)

修太がげんなりしたところで、 그레이が左腕を取り返し、シークの後ろ襟を掴んで道端に放り投げた。

「纏わりつくな。邪魔だ」

そうして放り投げられたシークは、綺麗に受身を取って着地した。そんなシークをちらりと一瞥し、 그레이は淡々と言う。

「シューターに喧嘩を売るな。護衛対象だ。弱いからすぐに死ぬ」

「……ハハハ」

그레이の言葉がぐっさぐっさと修太の心に突き刺さった。そういう正直さはいらぬです、旦那。

「ええっ、なんで“認めて” るんですか!? 弱い奴なんですよ!」

「強さにも色々ある。“認める” 判断基準はそれぞれだ」

「なんすか、師匠。分かりやすく言って下さいよ!」

「お前、馬鹿だ馬鹿だとは思っていたが、本当に馬鹿だな」

「ひでえ!」

ぎゃうんと吠え、シークは大げさに天を仰ぐ。

그레이の言葉には容赦が欠片もない上、毒がききまくっている。

無表情ぶりと合わさってもものすごく怖い。というか、「死んでくれ」みたいな目をしてるよ。こええええ。

内心でびくびく怯えつつ、 그레이を見ないように極力目を反らす。

「迷宮に入るには、何を揃えるのだ? 그레이殿」

殺伐した空気を一切無視して、 フランジエスが 그레이に問う。

本当に勇者だ、この女。

「野営の道具一式——これは普段から持っているな? 黒輝石を八個、四個は予備だ。ダンジョン内での休息時には絶対に必要になる。あとは食料や水だな。 フランジエスは魔力混合水を持っていった方がいいかもしれん」

そして、ふと思いついたように言う。

「そういえば、媒介石を水につけていると一時間くらいで魔力混合水になるんだっただな。シューター、気分が悪くなるのなら、そうす

るといい」

「そうなのか？」

「私も初耳だ」

修太とフランジェスカが驚くのに、グレイは言う。

「俺も今になつて思い出した。俺には必要ないが、父親がそんなことをしていたからな」

「へえ……」

どうやらフレイニールという人は魔法を使えたようだ。

「なんだよ。何でその強そうな姉ちゃんは“認めてない”のに、そのチビは“認めてる”わけ？」

何故かシークがぶんむくれている。

「名前を呼んでいるのに変わりはないのに、違いが分かるのか？」
修太はそつちに驚いた。

「“認めてる”奴とそうでない奴じゃ、名を呼ぶにしても、名の持つ力が違う！ そんなことも分からねえのかよ、チビ！」

いや、シークに比べたら確かに身長は低いが、どうしてそんなに当たられなくてはいけないのか分からない。

が、あいにくと、そういうのには啓介の側にいるせいで慣れていたので、流すのも上手い方だ。

「俺はこの風習をよく知らないから、知らないことがたくさんあるんだ。教えてくれてありがとう、シーク君」

しれつと返すと、尾を逆立てて怒り出した。

「君とか付けるな、気持ち悪い！　つか、俺の名前を呼ぶな！」

「……………じゃあ、グレイの弟子一号」

「四号だ！」

え、そつち？

怒らないのにびっくりした。

「弟子四号でいいの？」

「……………良くないけど、名前呼ばれるの嫌だし。うーん、うーん」

グレイが言つたように、馬鹿だこいつ。修太は、シークの馬鹿っ

ぶりを正確に理解した。

「シークでいい。俺が許可する」

グレイが言い、シークが頬を膨らませる。

「師匠のアホ！」

「目上に何だ、その口のきき方は」

グレイは容赦なくシークの額にデコピンをかました。

「ぶぎゃっ！」

すると、驚いたことに後ろに向けて吹っ飛んだ。そのまま勢いよく地面を転がるシーク。

修太も通行人も、どん引きだ。

「ちょ、やりすぎじゃ……」

「俺は弟子のしつけには手は抜かん」

怖い。怖いです、グレイさん！

「だが、もう少し手を抜いたらどうだ？ いちいち往来を転がって

いては、他の者に迷惑だろう」

それでいいのかよ、フラン！

何か突っ込みどころが違う気がしてならない。

ああ、頭痛い。

（ぐあー、啓介ー！ 頼むから早くこっちに戻ってきてくれー！）
自分一人じゃ手に負えん。

せめて役割を分散したいところである。

*

「へっくしゅ！」

啓介は思い切りくしゃみをした。

「あれ？ こんな暑い所なのに、風邪かあ？」

ぐずぐずと鼻をすすり、井戸の水を汲むのを再開する。なかなか腕力がある仕事だが、見た目と違って筋肉もあって力も強い啓介には楽な仕事だ。あつという間に桶おけを引き上げ、井戸の横に置いてい

た別の桶に水を汲む。

「噂でもされておるのではないか？」

「お、サーシャ」

上から聞こえた声に顔を上げると、赤い瓦屋根の上に、黒いワンピース姿の少女が座っていた。紛れもなくサーシャリオンだ。

「しかし、意外に時間を取られるな」

「まあ、仕方ないよ。一人きりの孫娘が長旅に出るっていうんだからさ」

啓介は若干の良心のうずきとともに、苦笑いをした。

修太達と別れてから、今日で一週間になる。そろそろ修太達も目的地に着いた頃だろう。

アリツジャの町にはモンスターで空を飛び、一日で着いたのだが、それから困ったことになっていた。

ピアスの祖母こと“おばば”が、長旅に出るなら、しばらく売る分のアイテムを作り置きしていけとピアスに命じ、更には、啓介やサーシャリオンにも、孫娘を連れていくのだからどんな奴か見極めてやると、家事手伝いさせられているのだ。体よくこき使われているだけな気がしないでもない。

啓介やサーシャリオンは料理をほとんどしたことがないので、それ以外の家事をしていた。

おばばは小柄で可愛い霧囀気のお婆ちゃんであるが、煙管きせるを片手ににやりと笑われると、どうも迫力があつた。石占いやアイテムクリエイトを生業にしている、アリツジャでは顔役の一人らしく、誰もが丁寧に対処する人だ。それに少々おっかない。怒鳴ったりはしないが、静かな声で、サボるんじゃないよと言って去っていく。気配がなくて怖い。

啓介が膨大な魔力を有しているので、ときどき充電器代わりをさせられたりする。アイテムクリエイトというのはよく分からないが見ているだけで何となく理解して、これはこうなっているのかと訊いたら、今度は助手までさせられた。うん、藪蛇だった。

元来の賢さと器用さと人懐こさを生かし、あつという間に馴染んでしまった啓介であるが、親友のことを思い出すと心配になる。無茶をしていないといいが。

「ケイ！ ちょっと遣いに行ってきたくれんかね？」

「はい、ただいま！」

条件反射で返事をし、桶を持って台所に向かって水甕に水を満たしてから、おばの元にすっ飛んでいく。

途中、ピアスが、ごめんうちのおばがと困ったような顔をす
るのに、いいっていいってと笑顔で返し、通り抜けていく。なんだ
かんだと忙しいが、ピアスとこうして顔を合わせられるだけで、な
んとなく幸せな気持ちになって、嫌な気分には絶対にならないのだ。
「ケイは人がいいのだな」

屋根の上に避難し、猫のように昼寝を決め込んだサーシャリオン
は、あくびを一つし、眠りにつく。

啓介ですら気付いていない気持ちには、モンスターであるサーシ
ヤリオンが気付くわけもなく、よくそんなに働けるなと感心するだ
けだった。

7 弟子トリトラ

「……………」

じいじい。

「……………」

もぐもぐもぐ。

「……………」

じいじいじいじい。

（なんなんだ、こいつ。うっぎ。どっか消えろっつーの）

何やら修太を目の敵にし始めたシークは、食事を修太達のいる宿の食堂で摂り始め、食事のたびに修太を睨みつけながら食べるようになった。

気にしないフリは得意であるが、三日目には大好きな食事の時間が憂鬱になり、修太はだんだん食欲を失くし始めていた。

修太とコウは宿で留守番している間、フランジェスカやグレイが下見を兼ねて昼間だけダンジョンに潜るようになった。フランジェスカは夜になるとポイズンキャットになってしまっから、夕方には戻ってくる。

が、今日は満月なので、ダンジョン内で一泊し、明日の夕方に戻ってくるようになっていた。

つまり、この馬鹿を追い払える奴がいない。

修太はいつものようにフードを目深に被って目を隠し、もそもそと食堂で食事をし、部屋に引っ込むつもりでいた。自分の手持ちの下着を元に、慣れない裁縫をしているのだ。トランクス作りに燃えているわけである。

「あ、いた！ 探したよ、シーク。って、何やってんの。年下の子どもにガンたれて。大人げないなあ」

食堂に入ってきた黒狼族の少年が、シークを見つけて声をかけ、異様な状況に目を丸くした。

猫っ毛の短い灰色の髪と、くりくりしたブルーグレーの目が印象的な、女みtainな顔の少年だ。白い肌は透きとおるようで、生まれてきた性別を間違えたとは思えない美貌の少年である。

どうも、黒狼族というのは美形揃いらしい。

目の前の馬鹿も、黙っていれば美形だ。今はただの残念な美形だ。ついでに付け足すと馬鹿。

黒色のフードがついた袖無しの上着と、黒いズボンに、茶色い革靴を身に着けた少年は、その白い腕に幾重にも包帯のような白い布を巻いており、手首から肘までを覆う、青に輝く不思議な鉄で出来た籠手こてをつけていた。華奢きゃしゃなので、やはり少女でも通用しそうだ。

年齢はシークと同じで十八歳だと思われる。腰のベルトには、皮製の小さなポシェットとダガーを一本、左側に装備し、腰の右側にサ―ベルを吊るしている。左利きなんだろうか。

「お帰り、トリトラ！ だってよあ、こいつ、師匠に認められてて

……」

「ええ！ 師匠に会ったの！？」

うお。瞬間移動したぞ、こいつ！

さっきまで戸口にいたはずなのに、店の奥側のテーブルまで一足飛びでやって来たトリトラは、テーブルに両手について身を乗り出した。シークも驚いたように身を反らす。

「はいはい、食べないんなら出ておいき。食べるんならそこに座る！」

宿のおかみであるヘレンが威圧をかけ、トリトラは慌てた様子で修太の隣の席に座った。

（あああ。逃げ場を塞がれた）

急いで食べて、部屋に逃げようと思ったのに。

「シークって馬鹿だね」

話を聞いたトリトラは、昼食を食べながら、一言そう断言した。

「なんつでだよ！ 俺の話、聞いてたか！？」

ダンとフォークを持った手でテーブルを叩くシーク。皿がガチャンと鳴った。

（友達にまで馬鹿呼ばわり……）

なんだか可哀相になるが、馬鹿だから仕方がない。

自分の話を、悪口を交えてしているのを横で聞きながら、修太は黙々とスープを飲む。

「だって馬鹿だろ。師匠が“認めた”相手なんだから、弟子も尊重しなきゃ駄目じゃん」

おお。確かに、言われてみればその通りだ。

トリトラは賢いらしい。

シークもそう思ったのか、ぐっと言葉に詰まった。

トリトラはシークを無視し、修太を見て、にっこりする。人当りの良い笑みだ。

「初めまして。僕はトリトラっていうんだ。良かったら名前を教えてくださいませんか？」

「塚原修太。修太でいい」

修太はぼそりと答える。

そのことに、なんだかトリトラは感動したようだった。

「うわあ！ なんだよ、この子。師匠に雰囲気そっくり！ なんかすごいぐわってくる。僕、無愛想なの好きだよ！」

「……………」

思わず椅子ごと身を横にずらした修太は悪くないと思う。

「違う違う違う！ 同性が好きとかじゃないから！ 尊敬してる人と雰囲気似てるから、気に入ったってだけだよ？」

慌てて言い直すトリトラ。

修太はほっとして、椅子の位置を戻した。

「きっと、見た目はとっつきにくいのに、良い人だよ、この子。師

匠もそうだから。うん、よろしくね！」

ほんと背中を叩かれたが、勢いがついていたのか、修太はテーブルに突っ伏す羽目になった。ぎりぎりで皿に当たらずに済んだが、派手な音がする。額を天板でぶつけた。痛い。

「うわっ、ごめんね！ わざとじゃなくて。ええと、ほんとごめん！」

「うわあ。弱い者苛めかよ、引くわー」

「そんなんじゃないよ、シーク！ほんとごめん。僕、力加減が下手でね」

「だったら叩こうとするなよ。迷惑な奴」

我慢出来ずに修太は悪態を返す。

つか、軽く叩いただけで相手を吹っ飛ばすとか。まじで黒狼族って規格外だな。

「ごめんごめん」

困った顔をして謝るトリトラ。良い人っぽいのが、知らずに迷惑をかける部類だな。気を付けよう。

「ごちそうさまでした。俺、先にかかるから」

手を合わせ、席を立とうとするが、トリトラに右腕を掴まれた。

「待つて待つて。ねえ、もうちょっとだけ話に付き合ってよ」

「……放せ」

腕を引っ張るが、うんともすんともいわない。くっ。ぴくりとも動かん！

無言での攻防に疲れた修太は、諦めて座った。給仕をしているヘレンを呼び止める。

「ヘレンさん、追加料金払うから、お茶ちょうだい」

「何が良い？」

「飲みやすそうなやつ。花の香りがしないやつを適当に選んでよ」

「分かったよ、ちよいとお待ちね」

ヘレンは笑顔で言い、去っていく。そして、ポポ茶を持ってきてくれた。味はほうじ茶に似ている。マグカップ一杯でエナだ。

「ほんと弱いんだな、お前。トリトラ、力は弱い方なのに」

落ち着いた修太に、シークが呆れたように言った。確かに、重そうなバスタードソードを背負っていたシークだ、ぶん回せるだけの力があるのを考えれば、トリトラより腕力があるのがよく分かる。

「瞬発的な力なら、僕の方が上だけだね。小石でウサギ仕留めたりは出来るよ？」

「それはすげえ」

当たるのがまずすごい。

トリトラはにこにこしながら、楽しそうに言う。

「でもほんと可愛いな、この無愛想な感じ！ 弟に欲しいよ」

無愛想が可愛くて弟にしたい、なんて初めて言われた。ていうか、弟にしたい発言が初めてだ。

「変な奴だな、お前」

心の底から感想を口にする、ますます楽しそうにする。ずいずい身を乗り出してくる。

「ねえねえ、なんでフード被ってんの？ ここって室内なのに」

「別に俺の勝手だろ」

物珍しいのかなんなのか分からないが、フードをはごうとしてくるので、それを手で押さえる。くっ、腕がぶるぶるしてきた。

ほんと何なのこいつら。

内心で苛立ちを覚える。

「トリトラ、流石にそれはやめとけ。こいつのことは氣にくわねえけど、そういうのはルール違反だ」

予想外のところから助け舟が出た。ちえーと言って、トリトラが手を離す。

「せっかくだから目を見て話したいなって思ったんだけどなあ」

「うん。じゃあ俺は戻るから」

「待つて待つて、ごめんってば！ もうしないから！」

今度こそ帰ろうかと思ったが、また引き止められた。ちっ。

「はゝ、ここの料理おいしいなあ。いっそのこと、こっちの宿に変

えちやおうかな」

「それいいな。師匠もこの宿みたいだぜ？」

「そういや、師匠は部屋にいるの？」

「いたら、こいつを一人にしてねえよ。それかもう一人の女のどっちかがついてる。護衛らしいし？」

トリトラとシークは話が盛り上がっている。

「二人とも、明日の夕方に戻ってくる。ダンジョンに潜っていていない」

修太の簡潔な言葉に、トリトラは驚いたようだ。

「護衛なのに、置いてったの？」

「宿から出るなって言われてる」

「それ、守るの？」

「守らなくて痛い目を見たくない。外がおつかないのは知ってるし、ますます驚いたように目を丸くする。

「随分聞き分けの良い子どもだね。六年前のシークに聞かせてやりたい……」

「本人の前で悪口言うんじゃねえよ！」

くわつと怒るシーク。

「グレイと会ったのも、海賊船でだ。とっ捕まってたところを助けてもらった」

シークとトリトラは目をパチパチと瞬いた。

「そりやまた、意外な出会い方だな」

「いや、分かりやすいよ。相変わらず盗賊嫌いなんだね、師匠ってば……」

そうすると、急にトリトラは修太の頭に手を伸ばした。フード越しに撫でてる。

「ごめんね、シークが色々うるさくて。僕は味方するから」

何やら同情したらしい。

手が鬱陶しいので跳ね除けつつ、茶を飲む。

「……同情買う為に嘘ついたとか思わないんだな」

あんまりあつさり信じるので、腹の当たりがむずがゆくなった。

「嘘のにおいがしないから。君の返答には、全然嘘が紛れてない」

「そ。俺らはおいで分かるんだ。俺らに嘘ついても無駄だから、嘘つくんじゃないぞ？」

「なんで脅すんだよ、シーク」

「いてえな！ 頭叩くんじゃねえよ、馬鹿になるだろ！」

「これ以上、どう馬鹿になるっていうんだよ。馬鹿じゃないの!？」

「うるせーよ！ 黙れよ！」

ぎゃいぎゃいとやかましく喧嘩する二人。

うるさいなあと思いつつ、嘘のにおいつていうのはどんなにいいのかなを考える修太である。さっぱり分かん。

8 押しかけ訪問

結局、シークとトリトラは宿を移してきた。

「ほんとに来たのか、お前ら」

夕飯時に食堂で会ったものだから、驚いてそう言うのと、トリトラは食事しながら幸せそうに言った。

「この料理がおいしかったからさ」

「ありがとね、お客さん。うちの人も喜ぶわ」

給仕をしていたヘレンは、それを聞いて嬉しそうに笑う。料理人は旦那さんらしい。

四人がけの机にトリトラとシークが対面して座っているのを見て、修太は二人から一番離れた席に座った。やっと静かに食べられそうだった。

しばらくして、ヘレンが今日の分の夕飯を運んできてくれたので、礼を言つて食べ始める。

カレー粉の味がする、炒めた鶏肉だ。美味い。付け合せの葱がまた味を引き立てている。

おいしさをかみ締めて夢中で食べていると、ふいにガタンという音がした。目の前を見ると、トリトラが前の席に座つてにこりと笑った。

「ひどいなあ。普通、ああいう場面だと一緒に食べるもんじゃない？ どうしてわざわざ一番遠い席に座るかなあ」

「何で？」

「何でって……」

「俺はお前らの友達じゃねえけど」

「……………」

うつうつように言葉を詰まらせるトリトラ。

「食事の時くらい静かに食べたい。うるさいのは迷惑だ」

きついことを言っている自覚はあるが、うるさいのは嫌なのだ。

また視線を食事に戻し、黙々と食事を再開すると、またガタンと音がした。トリトラの隣にシークが座っている。シークは大げさに肩をすくめてみせた。

「可愛くねえガキ。こんな相手にするだけ無駄だってトリトラ」

「俺もそう思う。つか、そう思うんならお前も俺に関わらないでくれるか」

一番うるさくてうざったいのはシークなのだ。じと目で言う。

「ほんと可愛くねー!」

「えー? とりあえずシークよりはずっと可愛いと思うけど」

「うっせえよ、トリトラ! 可愛いって思われても嬉しくねえけどな!」

うん。修太も同じ意見だ。

「食事終わったんなら、部屋に戻れば。ここ、風呂もあるから、風呂にも入ってくればいい」

「ちよっとはお喋りしようよ」

トリトラがめげずに催促する。

「食事中」

ぴしゃりと返す。

「嫌われちゃったね……。大部分がシークのせいな気がする」

「別にいいだろ、俺は気に入わねえもんよ」

また人の目の前で悪口を言ってる。

面倒くさい。

修太はもぐもぐ野菜を食べ、スープを飲み干すと、手を合わせて「ごちそうさまでした」と呟いてから、席を立つ。

「ヘレンさん、おいしかったです」

「ありがと! いつも残さず食べてくれて嬉しいわ。いい子ね!」

ヘレンはにこつとふくよかな笑みを浮かべ、テーブルの上を片付けていく。それを横目に、自分の部屋に帰ろうと階段を上る。

「ねえ、ちょっとくらい親交を深めようよ！　ほら、お酒あるよ！」
すかさず追ってきたトリトラがどこからか酒瓶を取り出して見せた。

「俺、酒は飲まないから」

きつぱり返し、自室の鍵を開ける。そもそも子どもというなら、子どもに酒をすすめるなっつーの。ドアを閉めようとしたところで、途中でドアが止まる。

くっ。びっくりもしない。

しかも隙間に足を入れられて、閉めるのを防がれた。性質の悪い訪問販売か、てめえっ。

「何なんだ、もう！　鬱陶しい！」

「師匠が“認めてる”人間なんて珍しいから、興味津々なんだよっ」
ドアノブを押す修太と、片手で止めているトリトラ。後ろでシークが呆れている。

「トリトラ、あんまりすぎると犯罪だ」

「全然話聞いてくれないんだもん、つまないよ」

あーもう。訳わかんねえ、黒狼族。

なんでこんなに気に入られてるんだ？

扉を押し返しながら、修太はちらつとコウを見た。

（狼に気に入られる要素でもあんのか、俺は……）

謎すぎる。

「グルルルル」

修太が困っているのを見て、すっ飛んできたコウが、トリトラに歯を見せてうなりだす。

急に色々と面倒になった修太は、コウを止め、扉を押さえる手を緩める。

「お前、俺らに何もしないか？　海賊とか奴隷商人の所に連れてつたりとか」

「するわけないでしょ、何言ってるの！」

華奢とはいえトリトラは百七十センチ越えくらいの身長だ。百三

十センチかそこらしか身長がない修太は、自然、見上げる形になる。そうして見上げた先で、トリトラはぎよつと狼狽した様子を見せた。

うるさいし迷惑だけど、扉の前で粘られる方が迷惑だ。近所迷惑もいいところである。

「言っておくけどね、同胞を金で売ったりするような馬鹿な真似するのは、人間くらいだよ。黒狼族や灰狼族^{かいろう}、エルフやドワーフだってそんな真似はしないんだから」

そして、なんだか泣きそうな目をして修太を見下ろした。

「あー、もう、なんだろ。君、人間を……、いや、他人を信じてないんだね？」

そんなの、エレイスガイアで色んな厄介事に遭いだしてからだ。他人が油断ならないことと、自分が 黒 として特異な存在であることを理解しているからだ。

「……別に」

ぽつりと答える。

別に、信じてないわけじゃない。

啓介のことは信じているし、サーシャリオンのことも信用出来ると思っている。モンスターは誰も修太を傷つけようとしないのも知っているし、フランジェス力は嫌いだけど信用はしてる。ピアスは啓介が惚れてるから信用してるし、グレイは助けてくれたから気を許してるところがある。信用しているのかは今一分からない。

「よく考えれば、お前らってグレイの弟子なんだもんな。うるさくて迷惑だけど、悪い奴じゃねえか」

ぽそりと呟いて、扉を開けた。

「適当に座れば」

そして、すたすたと部屋の奥に行く。

三人分の椅子が置いてある、丸テーブルに行き、座る。苦勞して火打ち石でランプに火を点け、裁縫の続きをすることにした。

「……お邪魔します」

トリトラは律儀に言い、シークは遠慮なくずかずかと入ってきた。扉を閉める。

「ここって部屋の間取りが広いよな。俺らの二人部屋も広かったぜ？ 値段にしちやいい宿だ」

「食事もおいしいしね」

部屋を見て感想を呟くシークと、にこやかに付け足すトリトラ。修太のいるテーブルにやって来て座り、勝手に酒の用意をし始めた。修太は媒介石で作った魔力混合水をグラスに注ぐ。

修太が必死に型紙から起こして作っているトランクスを見て、トリトラは変な顔をした。

「それ、何作ってるの？ 短パン？」

「トランクスっていう下着。俺の故郷のやつ。こっちにないから仕方なく作るうと頑張ってるよ」

ところどころ縫い目がおかしいのを見て、トリトラはますます呆れ顔になる。

「なんていうか、前衛的な縫い方だね？」

「下手って言えよ。うるせえな」

自分でも下手だと思っている。

ゴムは売ってなかったから、紐を入れるつもりだ。大丈夫、小学生の時に、ナップザックやエプロンを作る家庭科実習があったんだ。あれと同じことをすればいいだけだ。あれはミシンで手縫いではなかったが、同じ縫い方をすればいいだけのはずだ。

「ねえねえ、自分の部屋なのにやっぱフード外さないの？」

期待たっぷりに見てくるトリトラ。

「男の顔なんか見ても面白くねえだろ」

「君かどうかはおいで分かるけど、ほら、目を見て話す方が気楽じゃん？」

そっぴや昼間もそんなこと言ってたな。

一つ溜息を吐き、フードを外す。

「これでいいのか？」

やけっぱちな気分で問うと、シークとトリトラの両方が息を呑んだ。

「す、すごい……。こんな真っ黒な目の 黒、初めて会った」

トリトラが啞然と呟き、シークが首をひねる。

「なんだっけ、漆黒？ 弱い上に子どもで漆黒の 黒じゃ、そりや護衛いるわな」

急に何もかも納得したらしい。気に食わんという敵意オーラがシークから消えた。

「そりや他人を信用出来ないよね！ うわ、ごめんね。無理に聞き出したみたいで……」

あちゃあというように額に手を当てるトリトラ。

「別に。俺が 黒なのはあんたのせいじゃねえし。これはこれで別に良いんだけど、魔力欠乏症でな、すぐに体調を崩すんだ。そっちの方が面倒」

「魔力欠乏症って何だ？」

シークが問うので、軽く説明する。

「魔力が足りなくなつて調子崩したりする体質的欠陥の病名、らしい。魔力混合水を飲んでないと、気分悪くなるし、魔法を使えば数日寝込む羽目になる。面倒だろ？」

「そんなのあるんだね。僕ら、魔法は使えないから知らないや」

トリトラはあっけらかんと言う。

黒狼族の男は、カラーズと成り得る色の目を持って生まれても、絶対に魔法を使えないのだと、そういえば前にグレイが言っていた。黒狼族の女は使えるのだというから不思議な話だ。

「カラーズなら知っていて常識だつてエルフの医者が言ってたけど、知らない奴の方が多いみたいだな。まあ、話だと 黒がなりやすい病氣らしい」

「大変だね、 黒って……。パスリル王国じゃ迫害されるし、白教の色改めの連中に捕まったら処刑対象にされちゃうし。いや、ほんと白教徒は怖いよ。僕、一回捕まってさあ。命からがら逃げ出し

たけど、ほんとギリギリだった」

予想外の言葉に、修太はまじまじとトリトラを見る。

「俺も一回とっ捕まって、モンスターの餌にされかけたけど、逆に味方につけて難を回避したな」

そいつは今、足元で丸まっている犬なのであるが。

「僕はあれだよ、ナイフ投げの的にされて死ぬ運命だったらしいけど、枷をぶっ壊して、檻もぶち破って逃げてきたんだ。しかも毒塗りナイフラしくってさあ。えげつないよね」

そんな穏やかな笑みを交えて言う内容じゃないと思う。修太は白教徒の遣り口の酷さにびびりつつ、同時に、笑い話で片付けているトリトラの神経の図太さに戦慄した。

「たまーにこの町にも出没するから気を付けてね。たいていは門前払いなんだけど、忍び込む奴もいるからさ。ダンジョン内だと、モンスターのせいに出来るからもっと危険なんだ」

「中入ったら、自己責任だもんな。ま、モンスター以外の殺害や窃盗は、ばれたらギルドから罰がいくけど」

「そうなのか？」

「そ。だから、パーティーを組む時は信用ある人としか組まないんだ。どうしてもいないなら、ソロの方がよっぽど安全ってこと」

「結構殺伐としてんのな」

「そうでもないよ？ 幾ら倒してもモンスターは湧いてくるし、何故がある宝箱の中身も、時間を置くと復活していたりするしね。よっぽどのレアアイテムでもない限り、また来ればいいっていう発想になるから。でも、パーティーメンバーで、例えば僕らだと白教徒とうっかり組んでみたりしなよ、命狙われる羽目になるだろ？ そういうのは慎重にしなきゃ拙いでしょ」

確かにその通りだ。

そこまで言うてから、トリトラはとても不思議そうな顔をした。

「ねえねえ、君ってどこの出身なの？ セーセレティーの民やミストレイン王国のエルフなんかは、黒狼族を蔑視しないけど、君も全

然差別感持つてないでしょ？ でも髪の色とかはレステファルテの民に似てるしなあ……」

「どっか遠いとこだよ。東の方。島国の出身」

嘘は言つてない。ここの世界の話ではないだけだ。

ちよつとだけ眉が寄るトリトラ。

「島国なんて、東の方にあつたかな？ まあいいや。訊かれたくないってことは分かった」

「……………」

修太はふいと目を反らし、針を持つ手に視線を据える。

嘘が分かるのといい、どうもやりにくい相手だ。

「初対面の奴の事情を、あんま根掘り葉掘り訊くのはいかなもんかと思うけど」

ぼそつと牽制の言葉を突きつける。どうも人懐こすぎて気付くとうっかり内情を話してしまうが、それは互いにとって良い事ではないだろう。

とはいえ、どこから来たの？ という話題は、会話のきっかけとしては妥当な線だ。出身地の話なら誰だって盛り上げられるから。

そして、ふと幼馴染を思い浮かべる。

（そろそろ二週間になるつてのに、まだ油売つてんのか？）

修太の代わりにこいつらと遊んで欲しい。正直、疲れる。

その後は、お酒が入ってテンションが高くなった二人に、しきりに故郷や師匠の自慢話や、ダンジョンの話をされ、延々と付き合い合わされた。

朝まで話に付き合わせて、元気ピンピンで自室に戻っていった二人を見て、まじで半端ないぜこいつらと、体力の違いをむざむざと突きつけられた。すっかりくたびれ果て、昼まで寝てしまった。生活のリズムが早起き早寝の健康志向な修太にしては、かなり珍しい日になった。

「――酒臭い」

扉を開けるなり、フランジェスカは盛大にしかめ面をした。フランジェスカとグレイは、夕方ではなく昼頃に帰ってきた。寝ぼけ眼で目をこすりつつ、修太はあくびする。

「……俺は飲んでない。シークとトリトラに付き合わされて、朝まで話聞いてただけ。……眠いから寝る」

眠さのあまり、やや拙い話し方になりつつ、修太はふらふらとベツドに戻ろうとする。

「あいつら……。とっ捕まえて、説教せねば」

グレイが低くうなるように言うのに、足を止める。おおっと、鬼が降臨されたぞっと。

「そんな怒らなくていいよ。お陰で、この辺の常識とか聞けたし。……とりあえず寝る」

「待たんか」

白い麻の長袖とズボンという寝巻姿の、後ろ襟をフランジェスカが引っ掴む。ぐえっと声を漏らす。息が詰まる。

「ケイ殿達と再会した。部屋を変えるから、荷物を纏める。それから、いい加減に起きろ。もう日は頭上高いぞ」

「そうなのか？」

寝起きは良い方だが、今日は寝不足なせいで、目が今にも閉じそうになっている。腹は空いたが、食欲より睡眠欲を優先したかった。ちらりと窓を見ると、確かに日射がさんと降り注いでいるし、締め切った部屋はむっとする程暑い。

「こんな部屋で寝ている方が体調を崩す。せめて窓くらい開けないか」

「ふああ」

「聞いているのか、クソガキ」

フランジェスカの怒声が低く響く。

「聞こえてるよ……。着替えて部屋を移動すればいいんだろ？ で

も男女別にしてもこの部屋でいいじゃん」

「わざわざ隣り部屋にしてくれたんだ。まあ、確かに、長い滞在になるから男女別にはなったがな」

「ほっか……」

またあくびをし、修太はふらふらとベッドまで行くと、上掛けの上に適当に置いていた服をその場で着替え出す。ピアスならともかく、フランジエスカの前なのと、眠たさから遠慮がない。

着替えるや、荷物を旅人の指輪に放り込む。すぐに移動の準備は出来た。

「珍しい！ シュウが昼間に眠そうにしてるって。俺、初めて見たかも」

久しぶりに再会した幼馴染は、黙々と昼食を摂る修太の前で、目を瞠みはった。珍しい珍しいと、ぼんやりしている修太の額を指でつつん突いてくるので、流石にイラッときて、手をはたき落とす。

「うざい」

啓介は両手をホールドアップした。

「調子に乗りました。すみません！」

ふん。修太は鼻を鳴らし、また食事を口に運ぶ。食事しながらだんだん目が覚めてきたような気がする。

「 그레이の弟子で、シーク君とトリトラ君だっけ？ いいな、俺も会ってみたい！」

「会えば。 그레이の説教が終わった後にも」

部屋を移した後、弟子二人の所に歩いていったから、怒られているはずだ。別にいいと言ったのだが、しつけの一環だと言われれば、修太もそれ以上は言えなかった。

「眠そうにしてると外見の歳相応に見えるわよ、シューター君」

ピアスが相変わらずの眩しい笑顔で、楽しそうに言った。

「……………」

無言を返すと、面白くなさそうに肩をすくめる。

「ほんとに眠いのね」

「それでも食事だけはしっかり食べておるところが、シューターらしいの」

修太の隣りに座ったダークエルフの少女姿のサーシャリオンは、ふふつと口元を引き上げた。

四人掛けのテーブルばかりなので、隣りのテーブルにフランジェスカが一人で座っている。

そこに、遅れてやって来た 그레이 が向かい側に腰を下ろした。反省しているらしき二人の黒狼族の少年もまた、空いている席に座った。フランジェスカの眉が一瞬ぴくりと動いたが、特に文句は言わない。

「シューター、迷惑ならこいつらを部屋に入れなくて良かったんだ」
그레이 がぼそりと言った。

「ああ、うん。性質の悪い訪問販売^{たち}みたいのに、ドア閉める前に足で止められたりしたし、面倒臭くなっただけ……」

그레이 を振り返りつつ、眠気からぼそぼそと返す。トリトラの顔から血の気が引くが、眠い修太は失言に気付かない。

「ほお。どっちだ？」

「トリトラの方だけど？」

「説教追加だ、トリトラ」

「うわああ、すみませんでした、師匠！ もうしませんから！」

「聞かん。賢く見えてそそっかしいからな、お前は」

ぴしゃりと返す 그레이。トリトラは絶望したようにテーブルに突っ伏す。

おお。性質をきちんと理解しているようだ。

「貴様、面倒だからとそれをいつもするんじゃないぞ」

フランジェスカが小言を言うので、修太はぼーっとフランジェスカの後ろ頭を見て、首をひねる。

「いつもするわけねえだろ。そいつら、うるさくて迷惑だけど、グ

レイの弟子だから悪い奴じゃねえと思ったただけだし」

何を不思議なことを言うんだ、こいつ。というように、さも当然と返す修太。

「……ふん」

何でか 그레이 が小さく鼻を鳴らし、視線を反らした。

「？」

よく分からないが、話が終わったようなので、自分のテーブルを向いて食事を再開する。

「……なに」

視線が気になって顔を上げると、啓介とピアスが微笑ましいものを見る目を修太に向けていた。

ピアスがにまにまして言う。

「いやあ、やっぱり良い人だね。シューター君」

「？ 良い人つてのは、ケイやピアスのことだろ。俺はそういうんじゃないねえ」

おかしなことを笑顔で言う。少し心配になった。

「なに、そんなにアリッジャの方は大変だったわけ？」

おかしなことを言い出すくらい大変だったのかと思って問う。

「うーん。なんか氣にくわないっていうか、失礼っていうか……」

「まあまあピアス、落ち着いて」

急にむくれたしたピアスは、いつものように可愛らしく見えるが、いったいどうしたことだろう。

とりあえず食事したら寝よう。修太はうつうつとしながら、寝ることしか考えていなかった。

8 押しかけ訪問（後書き）

第十二話、終了。

覚えてなくてもいい設定。

黒狼族が美形揃いなのは、ハーフの法則を用いてるだけです。

親が不細工でも、ハーフだと子どもは美形になるとかいう都市伝説的なあれです。

黒狼族は、黒狼族の女性が産んだ子でないと黒狼族にならないという不思議な法則があります。

黒狼族の男と人間の女の間の子は、必ず人間になる、みたいな感じですよ。

何故そうなるのか。ファンタジーだから（オイ

第十三話 真実は白日の下に： 1 旧知との再会

ダンジョンへの入口からほど近い、町の奥まった場所にそこはあった。

四角に切られた白い石が、乾いた大地に幾つも並び、石のところどころに苔やカビが生え、蔦が絡みついている。

共同墓地であるにしては手入れが雑であったが、熱帯雨林が多いこの地方では、手入れをしてもすぐに草が生えてくるから、自然とこんな状況になってしまう。

グレイはそのうちの一つの墓の前に来ると、手にしていた酒瓶のコルク栓を開け、中身を墓に振りかける。琥珀色の酒が白い石を濡らし、暑さですぐに干上がった。草いきれと酒のにおいがむっと立ち昇る。

——偉大なる冒険者の一人、フレイニール・コルビッツ、ここに安らかに眠る。精霊の祝福があらんことを。

苔むした石には、セーセレティー精霊国での弔いの言葉が刻まれているのを、文字に明るくないグレイも知っていた。葬式の際に周囲の人間に教えてもらったのだ。

レステファルテ人であるフレイニールにしてみれば、残念ながらそんな文句であるが、それでいてセーセレティー精霊国の方がうまく合うとよくばやいていたのを思い出すと、これはこれで良いのかもしれないと思う。

黒狼族として育ったグレイには、墓参りをするという考え自体が不思議なものであったが、人間はそうするのだと父親たるフレイニールが言っていたのを思い出して、何となく足が向いたのだった。

黒狼族は、死者は荒野に埋めて、ただそれだけだ。死者は大地にかえり、自然の中にその魂が宿るから常に側にいるのと変わりはない、その為に悲しむ必要はないとされていた。

こんな石ころの下に、父親の死体が埋まっている。ただの墓標だ。死ねば魂は肉から解き放たれて天に逝くのだから、やはり死体が埋まっているその場所を拝むのがよく分からない。

けれど、なんとなくそこに在りし日の彼がいるような気がして、無意識に言葉を紡いでいた。

「――決着^{けり}をつけにきた。十四年も待たせて悪かったな。……親父」
見たくなくて、目を反らしていた。信じていたものを粉々にされて、その粉々にした相手を見たくなかった。

グレイは逃げたのだ。見たくなかった暗闇から。

煙草に火をつけ、青空の下で煙を吐く。

心は異様な程に凜^はいでいた。

いつか戻るつもりだった。それに向き合い、正面から戦う為に。そのいつかが、ついに来たのだ。

もう、あの頃のような右も左も分からぬ子どもではない。

戦う力も身に着^きけた。

「真実を、白日^{はくじつ}の下に^{もと}」

グレイはぼつりと呟いて、来た時と同じように、静かにその場を立ち去った。

煙草から出る煙が、青い空に白い線を引き、やがて揺らいで消えた。

*

「レクシオンさん、書き方、これでいい？」

便箋^{びんせん}を冒険者ギルド職員であるレクシオンに見せると、レクシオンは頷いた。

「うん、その書き方でいいよ。その調子でね。分からなくなったら

また訊いて」

「はい。ありがとう」

修太は礼を言い、前の席に座っている男を見上げる。

「オーケー貰えたから、封をしますね。他に書きたいことや入れた
い物はありませんか？」

「いや、無いよ。それで宜しく」

「はい。あ、こっちに住所を書くんで、先に教えて貰っていいです
か？」

「ああ、送り先は——……」

他のメンバーが迷宮に潜っている間、修太は冒険者ギルドで手紙
代筆のバイトをしていた。宿にいるより人の目がある分、安全だか
らと、特に反対もなく、つつがなくバイトしている。

どうしてバイトしているかって？ 暇だからに決まってる。

一通り仕事を済ませると、代筆希望の男は感心気味に笑った。

「小さいのに賢いね、君」

小さいという言葉に怒るべきか、そんなことないですよと謙遜す
るべきか一瞬悩み、結局修太は「どうも」とぼそりと呟いて会釈し
た。

ともかくとして仕事は終わったので、レクシオンの姿を探して声
をかける。

「こっちの仕事、終わりました」

「ありがとう、助かるよ。今日はもう代筆希望者いないから、帰っ
てもいいよ。仲間を待つてるならそうしててもいいし、また書庫に
行く？」

「いえ。今日はゼフ爺ちゃんと約束あるから、そっちに行きます」

修太が、ギルド職員でもある薬草園の管理人の名を口に出すと、
レクシオンは僅かに目を瞠った。

「え？ ゼフさんと仲良いの？」

「書庫に行く途中で挨拶したら、話しかけられて。そのまま夕方ま
で話してたんだ。面白い人だよ」

「……すごいな。ゼフさん、話長いから苦手なんだよね」
「そう？」

老人の話なら喜んで付き合う修太は、長話について迷惑に思ったことはない。首を傾げる。

「今日は薬草の手入れを手伝うことになってるから。もう行くよ」
「おう。頑張つてな」

レクシオンの応援を背に聞きながら、修太はギルドの本舎を出て庭に出ると、薬草園の方へと駆けていった。白い髪と白い髭をした、優しい青の目をした老人を探しに。

そして、その帰り、本舎に戻る修太をゼフが見送りについてきて一緒に本舎に入ったところで、修太は大剣を背負った中年の男が、受付で興奮気味に話しているのを見つけた。

「グレイが戻ってきたって、本当か！？」

思いがけず、旅の仲間の名前が出て、修太は驚いた。

こげ茶色の髪を後ろで一つに束ねた、無精ひげが目立つ男だ。茶

色い目をしているのを見ると、ノン・カラーのようである。

「坊^{ほん}」

ゼフ爺さんに声をかけられ、ハツと意識を引き戻す。

「ここまででいいな？ 明日も来るか？」

「明日は来ないよ。仲間は、三日潜って一日休むらしいんだ」

「ペース配分が出来ているのは実に賢いな。じゃあ明後日来るか？」

「来るよ。手伝う」

「ありがとよ。年寄りにはしんどい仕事もあるからな。うちの者が、菓子を焼いてくれるらしいから、昼は薬草園に来いよ」

「まじで！ ありがと、ゼフ爺ちゃん！ リファカさんにも宜しく言つていて」

修太にとっては暇つぶしなので少し気が引けないこともないが、菓子と聞いているテンションも上がるというものである。

「ふおお。任せておけ」

ゼフはフードの上から修太の頭をぐしゃぐしゃに掻き回すと、ゆったりした足取りで薬草園の方に戻っていった。かくしゃくとした老人だが、動作はのんびりしている人だ。結構気難しい人らしいので、修太が仲良くしているのをギルドの職員にはよく驚かれる。

やっぱり老人というのはいいいもんだと修太は感動をこめてゼフの後姿を見送る。小さい頃にはすでに祖父母は他界していていなかった。祖父母というものに憧れがあって仕方が無い。

待合室のようなスペースに行き、空いているテーブルを探してきよきよしている、周りで話し合いをしている冒険者の中で、ここ最近で顔見知りになった人と目が合った。

「よつ、少年！ 今日暇そうだね！」

赤い髪に緑のバンドをした十八くらいの少女が、片手を挙げて挨拶した。緑色の目は翡翠みたいに明るい。ヒルダという名で、緑の弓士だ。

その向かい側で、ヒルダのパートナーであり恋人でもあるエア青年が穏やかな笑みを浮かべた。金髪青目の治療師兼剣士^{ヒーラー}だ。一応、治療師の方が本業らしいが、剣士として引つ張り回されているという隠れ苦労人だ。二十代くらいに見える、なかなか格好良い顔をしているのに、何故かいつも分厚いゴーグルをしていた。周りの噂によれば、ヒルダの暴虐的な風の魔法から目を守る為という話があるが、本当かは知らない。

「まあ確かに暇だけどさ……」

口の中でばやきつつ、聞きたいことがあったので、ヒルダの方へ歩いていく。

「なあヒルダさん、あの受付の人って誰？」

「受付？　ありゃレクシオン君じゃないの。受付で一番不人気青年。受付嬢の方が癒されるからって避けられる不幸な青年」

散々な評価をされているらしきことは分かった。どんまい、レクシオンさん。

「いや、そつちじゃなくて、お客さんの方……」

エアがヒルダに代わって答える。

「あの人、ザーダさんだよ。ここじゃ古株の冒険者で、まあ顔役みたいなもんかな？ ギルドと揉め事あると、仲裁に来てくれたりする、顔の広い人だよ」

「へえ……」

ザーダ。確か、前に雑貨屋の店主が話していた名前だ。

「どったの、少年。何か気になることもあった？」

「いや。グレイの名前を出してたから、知り合いなのかと思ってさ」

「ああ、なーる。そっぴやあんだ、賊狩りの旦那に護衛されてる規格外だったわね」

「……規格外？」

初耳だ。フードの下で、目を丸くする。

「そ。だって賊狩りグレイって言ったら、盗賊しか相手にしない冒険者で有名だもんよ。そんな奴がよ、なんでかあんだみたいな子どものこと認めてて、護衛までしてるっていうんだから驚きじゃないの」

「弟子がいるのも驚いたけどねえ。パーティー登録はしてないとはいえ、ソロでいるので有名だから、団体行動してる時点で充分に驚きだよな」

エアがしみじみと頷いた。

修太はふとグレイの言動を思い出す。

「ああ、そっぴや護衛は苦手だって言ってたな……」

「へえ！ 苦手なもんもあるのね！」

「はは。ヒルダだって護衛は苦手だろ？ 雇い主の上から目線がムカつくから無理だって、よく言ってたじゃないか」

「子どもの護衛だって苦手よ。目を放すとちよろちよろするし、我が儘だし、すぐに泣くじゃない。その点、この落ち着いた少年を見なよ。すごく護衛しやすいそうよね」

これは褒められてるんだろうか。それとも子どもらしくなさを言

及されてるんだろうか。よく分からん。

ヒルダから視線を外し、受付の方を見ると、ザードは話を聞き終え、待つ為かこちらのテーブルにやって来て、空いている席に座った。

「教えてあげたんだから、少年も何かお得な広告あったらお姉さんに教えてちょうだい」

キランと目を光らせ、ヒルダが言う。

「私はまた文字を教えて欲しいな。さあさあ、こっちおいで」

エアがにこやかに隣の席を示す。

もしかして、聞いた相手が間違っていたのだろうか。

修太は少しげんなりし、ヒルダの頼み通り広告を見て、得になりそうな情報を教え、エアとは、エアが勉強に使っている絵本の解読を一緒にした。

絵本があつたら教えやすいんだけど言ったら、速攻買ってきたのだから驚いた。暇つぶしで文字を教えてくれるような物好きは滅多といないので、この機に習得するつもりなんだそうだ。

とても飲み込みの早い、良い生徒である。

ヒルダはエア任せだが、自分の名前を書けるようになると、そのことを大いに喜んでいた。

余談だが、医師や薬師は文字を読めないと仕事にならないが、治療師は魔法で傷を癒すので、文字を読めなくても仕事になるんだとか。医療関係にも色々あるらしい。

*

啓介達が帰ってくると、ギルド内が色めきたった。

ギルドの女性職員や女性冒険者の色めいた視線が啓介や青年姿のサーシャリオンに向けられ、若手の男性冒険者などは友好的に挨拶をする。

代わりに、フランジェスカとピアスには、女性からは嫉妬めいた

視線が向けられた。グレイは怖がられているのか誰もガンつけない。

ええ、いつもの人たらしの才能を発揮して、セーセレティーでは不細工扱いのはずなのに格好良いと言われているんですね、うちの幼馴染殿。

ただ挨拶してるだけで女性職員が頬を赤らめ、迷宮内でピンチに陥っていた冒険者を率先して助けていたせいで、女性冒険者に将来有望の眼差しを向けられ、男性冒険者には是非ともパーティーを組みたい相手に昇格したらしい。というのが、この状況にげっそり来て、思わずフレンジエスカに訊いた時の回答だった。

「ワフワフツ」

出入り口から弾丸のように駆けてきたコウが、修太の元にやって来て、足元に纏わりついてきた。ぶんぶん尻尾を振り、何やらくわえていたものを修太の膝に落とす。ピンク色の石——ローズクォーツという天然石に見える。親指大だ。

ギルドにいる間は邪魔なので、コウには啓介達についていくように言っていたのだ。サーシャリオンが側にいるから、闇堕ちさえしていなければ、威圧感で目が冴えるだろうと踏んでのことだ。

「あら、結構大きい媒介石じゃないの」

身を乗り出したヒルダが、目を丸くして言った。

修太の膝に手をかけたコウは、ぶんぶん尻尾を振っている。褒めて褒めてと言ってるみたいだ。

「はいはい。偉い偉い」

仕方ないので、頭をわしわし撫でてやると、ようやく落ち着きを取り戻し、足元に寝そべった。

「はー、ほんとによく懐いてるね、この犬」

「ほんとだよな。何かしたわけでもないのに、これだよ」

土産を持つてくるとか、どんだけ賢いんだよ。

修太は感心を混ぜた呆れの目で、足元のコウを見る。まあ、モンスターなんだけどさ、こいつ。

「グレイ！」

お。ザーダが動いた。

修太は成り行きを見守るべく、視線をグレイに向けた。

ザーダは身長こそ百七十センチ無いくらいの低めではあったが、がたいは良かった。がっしりした肩幅をしていて、丸太みたいな筋肉のついた腕をしてる。見て一目で分かる重量級だ。

そんな巨体をどしどしいわせ、グレイに近づく。

気のせいか、一瞬、グレイの眉が不愉快そうに寄った気がした。ほとんど表情が読めない男が、不愉快そうにしているのが一目で分かるくらいの感情を表わすのは初めて見た。

「生きてたか、良かった！ 十四年ぶりか？ 久しぶりだな！ ますますフレイニールに似てきやがって。はは、表情以外だけだな！」

「……ああ、久しぶりだ」

グレイの薄っぺらい声が、静かに返した。その声を聞いた瞬間、遠く離れて聞いているはずの修太の背筋がゾクツとした。あまりにも感情がこもっていなかったのだ。

しかしザーダという男は違和感には気付かなかったのか、笑顔でまくしたてる。

「お前、あの後、いきなり町を出ていつちまうからさ。心配したんだぜ？ すぐ帰ってくると思って、商店のあちこちについ声をかけてまわってたくらいだ」

「……十四年も続けてたそうだな。普通は諦めないか？」

やはり、どこか不機嫌そうな声だ。

「ダチのガキのことだぜ？ 簡単に諦められっかよ」

がははと歯を見せて笑うザーダは、はたから見るととても面倒見の良い、良い人のように見える。

だが、どうもグレイの機嫌は徐々に低下しているようだ。

威圧感が普段の五倍くらいありそうで、側に行くのも嫌な感じだ。

怖い。

何であのザードという男は気付かないんだろう。

「どうだ？ 久しぶりに会ったんだ。酒でもよ。ヨーエやエルザにも声をかけてくるぜ？」

「——いや、断る。疲れていてな、そんな気分ではない」

ぱつぱつぱり断るグレイ。

ザードは残念そうに肩を下げる。

「そうか。まあ、何かあれば声をかけてくれよ。じゃあ、俺はお暇するわ」

「……ああ」

あまりしつこくしても嫌われるだけだと思ったのか、ザードはあつさり身を引いて、ギルドを出て行った。

（疲れた？ 疲れたって言ったか、今。嘘だろ、嘘。分かりやすっ）未だかつて、グレイが疲れたなどと口にしたのを聞いたことはない。戦慄を覚えていると、ヒルダが上体をかがめ、口元に手を当てて密やかに声をかけてきた。

「ねえ、ちよつと少年」

「なに？」

「あれ、絶対嘘よね？ しかもなんかすごい怒ってたような気がするんだけど……」

「ザードさん、全然気付いてなかったけどね」

エアも声を潜めて言う。

「いや、嘘だろ。それに怒ってるだろ、どう聞いても」

「変なの。フレイニールさんと親しくしてた友人のはずだけどね、ザードさん。父親の友人には、もっと親しくするもんじゃないのかな？」

「俺に聞かれても困るんだけど……」

修太は眉尻を下げ、困ったような声で返す。

三人は困惑いっぱいに顔を見合わせ、即座に深く関わるのはやめておこうと意見が合致した。興味本位で首を突っ込んだら、火傷を

負つどころか細切れにされそうな気がしたので。

第十三話 真実は白日の下に： 1 旧知との再会（後書き）

フレイニールは、亡くなった後でもこの町では有名な人ではない、ハイレベルな冒険者。先輩が若手に必ず話す人だから。っていうのをどこかに書かんといかんと思ってます。はい。

なんだかんだで知り合い増えてく修太。

お荷物で置いてかれてるだけだけど、ある意味、一番、情報収集をしているかもしれない。

2 離脱宣言

「今日で迷宮に潜り始めて一週間になるわけだが、どんな感じだ？」
修太の簡潔な問いに、啓介はフォークに刺した揚げ物を口に運ぶのをやめ、うーんと首を傾げた。

「四十階層まで行ったけど、これ以上は日帰りは厳しそうだな。慣れた道をダッシュで通過しても厳しかった。五層ごとに一層直通的な脱出ポートがあるからいいけどな。はは、ほんと、ダンジョンもののゲームみたいだよ、ここ」

そして、途中で宝石オブジェクトを拾い、七色集めて、途中のレリーフにはめたらレアアイテムが入った宝箱が見つかることだとか、うっかり落とし穴にはまって下の層に進んだりとか、食虫植物と追いかけてこして面白かったとか（追いかけたのは啓介の方らしい。んなアホな）。まあ、出てくる出てくる。変な話のオンパレードだ。「あと、ゴブリンの群れに襲われた時は笑っちゃったなあ。小さいおっさんがぞろぞろ来るんだぜ？ もう、お腹痛くて死にそうだった」

くすくす笑う啓介。

そんなところで笑い死には間抜けすぎるからやめとけよ。

ふうと息をつき、ピアスが思い出した様子で憤然と言う。

「そうよ、もう。小さいおっさん、小さいおっさんうるさいから、私まで笑えてきちゃって」

「緊張感がないって、ピアスに肘鉄食らっちゃった」

へへへ。打撃を受けたはずなのに、どこか嬉しそうに笑う啓介。
うん、あれだな、恋は盲目ってやつだ。分かりやすい。

「我は何が笑えるのか未だに分からんのだがな」

大皿にのった山盛りのステーキを着実に減らしつつ、青年姿のサ

ーシャリオンが、短い黒髪を揺らして不思議そうに言う。モンスター
ーの癖して食事のマナーも習得済みらしく、優雅にすら見える食器
使いだ。でも食べるのは速い。

「フランとグレイは？」

「グレイは笑わなかったけど、フランさんは、倒し終わった後に発
作が出たみたいだったよ？」

「ケイ殿、言わなくていい！」

後ろの席にいたフランジェスカが、すかさず振り向いて抗議した。
「まあ小さいおっさんのことはいいとして、じゃあ泊り込みで行く
のか？」

「そうだね。二百階層に早いところ着かないといけないし。百階層ま
では割りと楽しいんだけど、そこから難易度が増すらしいから、
とりあえずは百階層突破が目標かな」

「ケイ殿は、不意打ちさえなければ大丈夫だろう。ピアス殿は戦闘
力は若干不安だが……、トラップの解除が得意なのでありがたい存
在ともいえる。まあ、サーシャがいるのだから、どうとでもなるだ
ろうな」

フランジェスカが冷静に評価し、ピアスも同意した。

「む。しかし派手に魔法を使えぬからな、ちと厄介だ。本気を出す
と、ダンジョンが消し飛ぶやもしれぬしな」

しれっとサーシャリオンが問題発言をした。

「いっそのこと、全部氷漬けにした方が楽なのだがなあ。別の人間
も巻き込んでしまうし……」

「うん。やめとこうな、サーシャ」

修太は口を出し、サーシャリオンがこれ以上、暴走しないように
止めた。

戦闘力については不安はないのだが、別の意味で不安になってく
るメンツである。

「それにしても、シューター君と黒狼族と仲良いわよね。気が合うのかしら」

夕食後、啓介が照明代わりに光の魔法を使ってくれたので、その光の下で、約束を守ってグレイに文字教習をしていた修太は、きょとんと目を瞬いた。そりゃあ、師匠がするなら自分達もとシークやトリトラまで押しかけてきて、不思議なことになってはいるが……。

「たまたまじゃないか？」

うん、たまたまだと思う。

「えー？　だって、黒狼族って個を尊ぶでしょう？　大勢といえるのって好まないって聞いたことあるんだけど。違うの？」

勇敢にも、ピアスは正々堂々グレイに問うた。

てゆか、ピアス。暇だからって男性陣の部屋にたむろしてんなよ。しかもちやつかり横に椅子持つてきて、一緒に勉強とか……。

風呂上りなのか花の甘い香りがして落ち着かない修太である。出来ることなら出てって欲しいくらいだ。異性として気がなくても、ドキツとするには充分である。何せ極上がつく美少女っぷりなのだから。

「その通りだ。師匠と弟子や、仲の良い者がペアを組んでいることもあるが、それ以外はあまり群れたりはせん。まあ、集落にいる時は別だが」

そうだな。エンラやリンレイも二人で行動していたし、目の前のシークやトリトラもそうだ。まあ、会った黒狼族の絶対数が少ないので、参考にしていいのかは不明だが。

「そっぴゃあ、灰狼族？　とかいうのって、まだ会ったことないけど。そっぴゃあどうなんだ？」

「あれ？　ギルドにいたけど見なかった？　狼が立って歩いているみたいな人達。あの人達は、種族としては結束が固いけど、どっちかというと、一生仕えるに値する相手を探して旅してるから、一人が多いかな？　主人を持つ人なら大勢でいることもあるけど」

ピアスが首を僅かに傾げ、考えながら言った。

狼が二足歩行？ 見た覚えはない。

「見てねえな。ふーん、探してみるよ。あと会ってないのはドワーフかな？」

「ドワーフなら、鍛冶屋に行けばいつでも会えるよ？ 今度ナイフ研ぎに行く時、一緒に連れてってあげよっか？」

「その時は啓介も一緒に頼む。たぶん、はしやぎまくってうるさいけど」

そう答えたところで、ちょうど扉を開けて入ってきた啓介が、面白そうににやりとした。

「ええ？ 何、俺の悪口？」

「ちげーよ、ドワーフの話」

「今度、鍛冶屋に一緒に行こうって話よ」
「すかさずピアスも口を出す。」

「行く行く！ 俺の剣も手入れに出さないといけないし、明日にでも行こう。予備の武器も見ておきたいし。——あれ？ 皆で勉強会？」

テーブルに固まっている光景に、啓介は目を丸くする。

「まあな。文字の教習所だ」

「俺も教えよっか？」

「んじゃそっち座れ。お前、教えるの下手だけど、文字くらいならいけるだろ」

修太が言つと、トリトラが意外そうな顔をした。

「彼、教えるの下手なの？ なんでもさらつとこなしてそうだけど」
「トリトラ、天才っていうのは、凡人がどうして出来ないのかが分からないんだよ。何でも当たり前に出来るから。あれだ。どうやって呼吸してるのか？ って訊くようなもんだ。改めて言われるとよく分からねえだろ？ というわけで、俺はこいつのノートは当てにしていたけど、こいつから教わるのは諦めてた。だってよ、こうなつてこうなるからこうなるんだけど？ とか言われても分からねえだ

る」

「勉強つてのはなんかややこしいんだな？」

シークが不思議そうに言った。

四人掛けのテーブルだが、シークやトリトラが椅子を持ってきたので、まだ一席余っている。啓介は残っている席に座ると、それぞれの手元を覗き込んだ。

「って、そうよ。黒狼族と仲良いよねって話だったのに、だいたい反れちゃったじゃない」

ピアスがぶうと頬を膨らませて、軽くにらんできた。そんな仕草をしても可愛いって何事。

まあ修太は可愛いとか綺麗とか思うだけで、啓介みたいに惚れたりはしていないが。

ピアスの問いには、トリトラがやや興奮気味に答える。

「この子、迷惑そうにしてる割に、話は聞いてくれてるからさ。話やすいんだよね。だってシークの支離滅裂な話も聞いてるんだよ！？」

「……それはすごい」

「ひでえ！ トリトラも師匠もひでえ！」

ぎゃんと吠えるシーク。うん、うるさい。

修太はトリトラの意見に全面的に同意する。

「確かにそいつの話は、飛んだり跳ねたり分かりにくいことこの上なかったな。馬鹿だということだけは分かった」

「お前もなにげにひでえこと言ってるじゃねえよ！」

テーブルを叩き、シークが吠える。

「いやあ、小さいのに賢いよねえ。ねえ、もういつそ僕の弟になればいいよ！」

トリトラがやたら目をキラキラさせて言うのに、にがっという顔で返せば、残念そうに肩を落とした。

「あーあ。振られちゃった。やっぱりシークのせいだと思うんだよね」
「待て。今の会話のどこに俺のせいになるところがあったよ!？」

理不尽な話に、シークが眉をピクつかせている。

「うるせーぞ、お前ら。あと、その文字、間違ってる。そこは丸じゃなくて、こう」

常用語は、アルファベットののような感じの文字で、それを組み合わせる。まず文字の一覧を羊皮紙に書き出して、別紙に身の回りの単語を中心に書いて、教科書代わりにした。

それで、今しているのは、まずは文字一覧の書き取りである。自分で持っていれば、いつでも練習出来るからだ。

「これ終わったら、絵本でも読むか。書店に行くかな……」

元々、簡単な文字は読めるグレイはすぐに飲み込んだし、シークやトリトラは文字はさっぱりだったらしいが、若さのせいか飲み込みが早い。

「お前らも明日、一緒に来いよ。店の看板とか、そういうのを読むと覚えやすいからな」

英単語は、店の看板や道路標識の案内板を見ていると読みやすかった。修太は経験からそう言った。身近な物に書かれている内容が分かれると面白く感じるものだ。

「行く行く！」

「もちろん行くぞ！」

トリトラの方が飲み込みが良い分、負けず嫌いなシークもやる気満々だ。

「なんか……見た目の歳はこっちが上なのに、シューター君の方がお兄さんに見えるのは気のせいかしら。やっぱ近所のお兄さんに見える気がする」

目をこしこしすりつつ、ピアスが疑うように言う。

「大丈夫だよ、ピアス。俺にもそう見えるから」

啓介が笑い交じりに言う。

……おい、横で好き勝手言ってるじゃねえぞ、そこ。

そんなわけで、翌日は買い物をして回ることになった。

羊皮紙とペンを持参し、鍛冶屋に行けば、そのトンカチの絵の下に書かれた鍛冶屋の文字を教え、書店に行けば、やはり看板に描かれた本の絵の下に書かれた文字を教える。絵と一緒に書くように言つと、シークやトリトラは面白がつていた。絵を描くということをしたことがなかったらしい。

不思議な光景に、通行人達は奇異の目を向けてきたが、修太は教えるからには手を抜く気はなかったので、それを一切無視した。

ドワーフに会えたのは感動した。身長が百十センチくらいで大人なんだそうだ。体は小さいのに、力が強いらしく、筋肉がすごかった。まるで丸太みたいだった。欧米とかにいそうなムキムキで、ムキムキ度が高い人ほど顔もこつかった。でも、不思議と女性のドワーフはスマートな顔立ちをしていた。見かけからしても腕に筋肉はなさそうなのに、ハンマーを振り回していたからすごい。

鍛冶屋でエルフや灰狼族を見かけた。エルフはどこか浮世離れした美しさを持ち、目は冷たい印象があつた。たいていは人間嫌いらしいから、仕方ないそうだ。灰狼族は、ニメートルくらいある灰色の狼が二足歩行していた。ちゃんと服も着ているが、靴は履いていなかった。ふかふかしている尻尾に目が釘付けになつてしまい、ものすごく引つ張つてみたい衝動に駆られたが耐えた。そんなことをしたらぶん殴られそうな気がしたので。

灰狼族は、バスタードソードや巨大なモーニングスターや斧を使い、切るといふより叩き切るような戦法が得意らしく、身長にあいまつてでかい武器を持っているから、よく出入り口に引っかかつて戸口を破壊するとかで、店を壊されて怒るドワーフのおっさんと盛大に口喧嘩していたのが印象的だった。

店を巡つた後、昼ご飯は宿ではなく他の飲食所で摂り、その時にもメニューの読み方で単語を教え、実際に料理が運んできて食べることで印象付けさせた。普段は店員に肉料理を適当にとかで頼んでいるらしい。

「黒狼族って、集落で文字教えたりしねえの？」

根本的な疑問を口にする、分らなかったのか、シークやトリトラは首を傾げてグレイを見つめた。淡々とグレイが答える。

「族長一家やそこに近い者は文字を扱えるらしいが、その他の者は生活に使わないから気にしたこともないだろう。俺も、外に出るまで文字がどういうものかは知らなかったからな。父親が簡単に教えてくれるまで、意味が分からなかった」

「やっぱ閉鎖的だとななるのかね？俺らの故郷は、教育を受けさせる義務っていうのがあって、七歳から十五歳までは絶対に学校に通わなくちゃいけないから、たいていの奴は読み書き出来るんだ」
修太がオムライスもどきを食べながら言うと、シークが行儀悪くスプーンの先を修太に向けた。

「だからお前、弱いんだよ！俺らはひたすら武術の稽古だもんな。しかも男は成人したら“外”に出なきゃいけないから、そりやもう必死だったぜ」

「ええ？それじゃあケイが強いのと釣り合わないじゃない」

ピアスが突っ込みを入れる。うぐと押し黙るシーク。修太はしれっと答えを言う。

「啓介の家は金持ちでさ、護身術として剣術を習ってたから強いんだ」

「最初はそうだったんだけど、途中から面白くなっただよ。俺、身体動かすの好きだし。あとは、いつか宇宙人と喧嘩しても勝って親交を深められるようにってね！」

啓介は素晴らしい笑顔で電波なことを言った。

（やっぱこいつ、残念な美形だ……）

可哀想なものを見る目を修太は啓介に向ける。だいたい、喧嘩すれば親交が深まるなど、少年漫画の中だけの話だろうに。普通は陰悪になって終わりだ。

「う、うちゅう？なに？」

トリトラが目を瞬き、聞き返す。

「あー、いいよ。こつちの話。……自重しとけ、アホ」
「うぐぐ」

右隣に座る啓介の左脇に、肘を入れる。腹を押さえて突つ伏す啓介。

「食事中だが、話しておくことがあつてな。いいか？」

ふいに 그레이 が静かな声で話を切り出した。

皆、きよとんと 그레이 を見る。話しかけられて返事することはあつても、 그레이 から話しかけてくることは結構珍しかったのだ。

「一週間だが、もう迷宮に慣れただろう？ 俺は別行動をとるから、次からはお前達だけで潜れ」

「……また急だな」

フォークを皿の上に置き、フランジェスカがちらりと一瞥して言う。

「そうでもない。言わなかっただけで、慣れたら離れるつもりだった。やたらお前達と会うからこの町に戻ることを決めただけで、迷宮に潜る為に来たわけではないからな。四十層まで行けたんだ、もう充分だと判断した」

それがすごいことなのか修太には判別が付かないが、 그레이 から見ると充分に慣れたと判断出来ることなんだろう。

「師匠、まさかもうこの町を離れるんですか？」

恐る恐る問うシーク。

「——いや。しばらくはいる」

呟くように答えるけれど、それ以上は語る気はないようだった。急な離脱宣言に、サーシャリオンを除いた皆は戸惑っていたが、啓介が能天気に戻した。

「うん、いいんじゃないかな。 그레이 の好きにすればいいよ。ここまで付き合ってくれただけ、すごく助かった。ありがとございまして」

ぺこつと頭を下げる啓介。それで、場に和やかな空気が流れる。
「そうね。確かに、とても助かったわ。ありがと」

「ダンジョンには不慣れの身、協力感謝する」

ピアスが笑顔で礼を言えば、フランジェスカも堅苦しく礼を言う。サーシャリオンはマイペースに食事を続けつつ、「まあ、面白かったぞ」と、よく分からないことを言った。

「宿はどうするんだ？」

移動するのかわからない意味で問う。

「他にすることがあるだけだからな、そのままにしていればいいのなら、そうしておこうと思うが」

問うようにじつと見てくるので、修太は周りを見た。

「俺は別に構わねえけど？」

「男部屋のことは男で決めろ」

フランジェスカが簡潔に言った。ピアスも頷いている。

「我はどうでもいい」

サーシャリオンはいつも通り放任主義を貫くようだ。啓介を見る。

「俺も構わないよ。アドバイス求めることあるかもしれないけど、それでも良ければ」

にこつと人好きのする笑みを浮かべる啓介。対する 그레이 は感情の见えない顔で、顎を引いた。

「ああ。俺がアドバイス出来るのは、せいぜい百十階層までだが」

「充分だよ」

話は纏まった。

食事が終わると、宣言通り、 그레이 はふらりと姿を消した。

3 暗躍

「シークに、トリトラか。……待ってたのか？」

その夜、宿のすぐ側まで来た所で、グレイは弟子二人に声をかけた。見た所、人の姿はないが、グレイは気配とにおいを感じとっていた。

それを証拠に、宿と隣家との間の小道から、弟子二人が闇から溶け出るようにして現れた。待ち伏せしていたらしい。

「ええ、まあ」

「何か協力出来ることがあつたらしますよ？ 師匠」

弟子二人を見つめるグレイ。

「何の話だ？」

「とぼけないで下さいよ。師匠つてば、俺らといた四年の間で、この町の名前を出すだけで機嫌が悪くなっていたでしょう？ この町に、何かあるんですね？」

トリトラが青灰色の目に真剣な光をたたえ、グレイを真っ直ぐに射抜く。

「師匠が町なんか執着しないのは知ってますから、たぶん、親父さんのことだと思っんですけどね」

後ろ頭を腕で支えるようにしながら、シークもまた、伺うようにグレイを見ていた。

グレイは通りを素早く見回し、人目がないのを確認すると、弟子二人の方に歩いていく。

「……ついてこい。ここは話するには相応しくない」

「はい！」

場所を入けない倉庫街に変え、壁にもたれかかって話す。

「確かに、お前達の考え通りだ。俺は禍根を断ちに来た。だが、お

前らにそれを協力してもらおう気はない」

暗闇の中、 그레이の琥珀色の双眸は、暗く光った。睨まれた二人は、すくみ上がって背筋を正す。

「だから、余計な世話をやいて嗅ぎ回ったりするなよ？ 約束出来ないなら、しばらく動けないようにする」

그레이は武器は持たず素手であつたが、それでもシークやトリトラが二人がかりでかかっててもボコボコに出来る実力がある。それを二人は知っているので、本気を悟って、ぶるると震えあがつた。

「しません！ 何もしません！」

「探る真似もしません！」

「「約束します！」」

青ざめて声を揃える。

ふ。 그레이の薄い唇から、笑いのような吐息が漏れる。

「——分かった」

しかし、満足げな 그레이に、シークは恐々と問う。

「ええと、でも、師匠。よく分からないですけど、危ない橋を渡るんなら、あのチビ達とは宿は別にした方がいいんじゃないですか？」

「ああ、俺もそれは考えたが……。今、一人になると、狙われる確率が上がりそうだからな。あいつらを利用していろいろで気に入らんが、せつかくだからこの流れを維持することにした」

シークとトリトラは顔を見合わせる。

「おい。今、そんな大物相手なのかと考えたりしただろう？ さっきの約束を思い出せ」

「はぐつ、すいません、師匠！」

「今のは不可抗力だと思います！ でも、すみません！」
素直な二人は即座に頭を下げた。

「お前らにこの件で協力してもらおう気はないが、あいつらに危険が及ばないかだけ気を付けてやっててくれ」

그레이の付け足した言葉に、弟子二人はぱあっと表情を明るくする。師匠を手伝えるのが嬉しいらしい。

「分かりました！ 特に、あのチビと、銀髪の女が危険そうっすね。気を付けときます」

「あの 白 も少し不安ですけどね。女剣士とダークエルフは問題無いですね。あの子のことは特に気を付けますよ。子どもですし、魔法を使えても 黒 では身を守るには不十分でしょう」

「…… よろしく頼む。報酬も出す」

グレイの言葉に、弟子二人はぶんぶんと首を振った。

「いえ！ 金はいらないです！」

「代わりにまた稽古つけて下さい！」

目をキラキラさせるシークとトリトラを一瞥し、グレイは短く息を吐く。

「…… 分かった。暇な時にでも、稽古をつけてやる」

「やった！」

「ありがとうございます！」

どうしてそんなに稽古を付けて欲しいのか、グレイにはいまいち分からない感覚だったが、ひとまず懸念が解消されたので、あとは好きに動けると思った。

話が済んだので、宿に戻るべく歩きだす。

（花ガメの花粉さえ出てこなければどうとでもなるが……。あれに弱いことを話したことがあるからな……）

ちらりと考え、少し憂鬱になった。

本当に、あれだけはどうしても苦手だ。

*

ギルドで攻略情報や注意すべき情報が入っていないか聞いてから、ダンジョンに入る。それが賢いダンジョン攻略の方法なんだそうだな。なんでも、ダンジョン内は、日ごとにモンスターの出現数や道が少しずつ違うらしい。だから、ダンジョンから出た後、ギルドでアイテムを買い取りしてもらった時に、口頭で情報提供を求められる。

話すだけだから楽だ。百層を越えると別室で聞かれるようになるらしい。

ダンジョンに潜る冒険者のほとんどの者は、五十層より上の浅い層でアイテム稼ぎをして生計を立てているそうだが、中には、攻略に命をかけている者もいる為、一定区画より上については情報を秘匿にしているらしい。

その秘匿分の情報は、ギルドが高値で売っているとか。情報提供に関してはダンジョン探索者の義務になるらしく、怠りすぎるとダンジョンへの入場禁止という罰則がある。ギルド運営するだけの金をどこから捻出しているのかと思えば、そういうところかららしい。取得物の買い取り手数料と入場料がいるだけで、取得物に税金はかからないから、それで大金が手に入るならと非協力的な者もほとんどおらず、平和的に解決している。

（ダンジョンってというのは、町の財産であり、国の財産っていうのが面白いよな……）

鉦山みたいな扱いなのが、異世界らしくて面白い。

（ギルド職員さんも冒険者の人達も、みんな親切で過ごしやすくていいな）

旅が終わったら、こういう所で働くのも悪くないかもしれない。

そう考える啓介は、まさかその善意が主に自分だけに集中しているのには気付いていない。

今、情報を教えてくれている受付の女性がにこにこ愛想が良いのも、ギルドに来るなり挨拶してくれる冒険者達がにこやかなのも、そんなものなんだろうと思っていた。

「なあ、君達、グレイとパーティー組んでる冒険者だって聞いたんだが……」

受付で話していると、おずおずと声をかけられた。

ひとまず受付の女性に礼を言い、受付から離れてそちらに向き直る。

「パーティーは組んでませんよ。彼なら、俺らがもう慣れただろう

つていうことで、別行動になりました」

「あ、そうなのか……」

困ったように息を吐く男。三十代くらいの、ひよろりとした男だ。細い目は山吹色をしていて、肌は白い。髪が銀髪なのを見ると、セーレティーの民なのかもしれない。冒険者にしては、町人のようなシャツとズボン姿だ。白金色の不思議な色をした細い腕輪が、質が良いだけに少しだけ浮いている。

「失礼だが、あなたは？」

フランジエスカが慇懃に問う。

「あ、すみません。僕はヨーエ・イリツツ。彼の父親と友人で……。帰ってくるなんて思わなかったから驚いて。とりあえず来てみたんですが、いないんじゃないですか……」

聞けば、話を聞いてすぐに、仕事を奥さんに任せて出てきたのだそう。

「エルザも会ったって言うてただけだなあ……」

「エルザさんって、この治療師の？」

ダンジョンでこしらえた切り傷を治療してもらったことを思い出して、啓介は問う。

「そう、それ。彼女と、ザーダっていう男と、俺の三人で昔は固定パーティーを組んでいたんだ。たまにフレイとも組んでいたんだよ。グレイと顔見知りなのもそういう事情があってなんだが……」

それで会いたかったらしい。

「宿は一緒のままなので、もし良かったら言付けしておきましょうか？」

啓介が善意から問うと、何故かヨーエは慌てた調子で断った。

「あ、いや。いいんだ。見かけたら声をかけることにするよ。今からダンジョンに行くんだろう？ それだと悪いから」

「いえ、待機組がいるんで。ほら、あそこで手紙の代筆してる奴です。伝言があるならあいつに言って下さい」

啓介が指差した先では、修太が冒険者の女性とテーブルを挟んで

座り、手紙を書いていた。その足元にはコウが寝そべっている。満足げに寝そべって、ときどき耳をピクつかせている。一度、修太を残してコウをダンジョンに連れていったが、帰りたがってそわそわしていたので、連れていけないことにしたのだ。幾ら犬姿をとっているモンスターといえど、側にいる者がそうだとこっちも落ち着かないので。

「えーと、どっち？ あの女性？」

「いえ、その隣りのテーブルの、黒フードの方」

「ああ、分かった。じゃあ、もし伝言する時は頼むことにするよ。ありがとう。……では、どたばたして申し訳ないけど、もう帰るよ。急ぎの用事を思い出したから」

「あ、はい……」

慌ただしく帰っていくヨーエの後姿を見送りつつ、啓介は忙しい人だと首を僅かに傾ける。そして、こちらが名乗り忘れていたのを感じ出し、少しバツが悪くなった。自己紹介はコミュニケーションの基本だ。

自分の不作法さに少し落ち込みつつ、用事も済んだのでダンジョンに向かう。

「じゃあ、がんばろっか」

「ああ」

「うん！ いい素材が仕入れられるといいなあ」

「我はお弁当とやらが楽しみだ」

口々に言い合いながら、ギルドを出る。

今回は三泊してくる予定だ。フランジェスカはサーシャリオンが側にいれば、とりあえず闇堕ちの危険はないようだからと踏んでのことだ。修太を残していくのは不安だが、コウもいるし、どうになるだろう。

どこまで潜れるか楽しみである。

4 修太の暇潰し

「よっ、暇してんのな」

「シーク……」

ガタンと音がして、本から顔を上げて見つけた顔に、修太は反射的に顔をしかめた。

「お前、その反応、めちやくちや失礼」

「……お前、うるさいから」

理由を簡潔に述べ、また視線を本に落とす。ここの歴史はなかなか面白い。

文面に視線を固定しつつ、ぼそりと問う。

「なんかボロボロじゃね？ ダンジョン、そんなにきつかったのか？」

シークの白い髪や黒い服のあちこちに砂埃がついている上に、額は腫^はれ、手にも包帯を巻いている。

「ちげーよ。昼間に師匠に稽古つけて貰って、それでな」

「相変わらず容赦や加減の文字がないよね、師匠……」

またガタンという音がして、シークの隣りにトリトラが座った。

「投げ飛ばされて、近くの水路に突っ込むわ、畑に穴あけるわ。分かってたけど、あちこち打ち身だらけだ」

「うん。分かってたけどね、こうなるの。師匠も、稽古付けてって頼んだら不思議そうにしてたし」

「二年経ったんだから、少しくらいまともにやりあえるかと思ったんだけどなあ」

「間合いに入ったら、気付いた時には吹っ飛ばされてるもんねえ。動作が見えないってどういうこと」

溜息混じりに言い合う二人。グレイの戦闘センスは流石らしい。

まあ、それくらいなくては、砂漠の悪魔なんて大蛇を一人で相手したりしないだろう。砂漠での旅を思い出し、修太は、勝負を挑む勇気がある少年二人の無謀さを思った。

しばらくぼやいていたが、トリトラがどこからか羊皮紙と羽ペンとインク壺を取り出した。前も酒瓶を取り出していたのを不思議に思っ問うと、腰に引っかけているポーチの中に、紐で繋がっている小さな保存袋を百ばかり折りたたんで入れていると教えてくれた。ポーチ内に手をつ込んで、紐を丸ごと掴んで、取り出したい物を想像すれば出てくるようだ。

見せて貰うと、小指くらいの小さな袋に、赤い糸で魔法陣が刺繍されていて、それが麻紐で幾つも縛られていた。前にピアスが言っていた、冒険者は持っているのが基本という道具だ。値は張るが便利が良いので、トリトラやシークは金が貯まる度に買っていたらしい。サーセレイ精霊国の冒険者ギルドなら、どこでも売っているとのことだ。

「ねえねえ、暇なら文字教えてよ。文字。ほら、絵本もあるよ」

今日は仲間は誰も帰って来ないから、読書して夕飯時にでも帰ろうかと思っていたのに、これだ。基本的に待合室のテーブルは、冒険者や修太みたいに帰りを待つ人が使う物らしいが、修太がバイトを始めたので、隅っこなら自由に使っていると大人達は言っていた。急に代筆のバイトが入った時に呼べるから便利らしい。たぶん、こっちの意見の方を優先してるんだと思う。

「おい、見てみるよ。ほら、これだけ書けるようになったんだぞ！」シークも羊皮紙を取り出して、目の前でさらさらと覚えた文字を書きだした。本、インク、紙、ギルド、朝、夜、おはよう、お姫様、王子様。統一性の無い単語が並ぶ。最後の単語は、たぶん、絵本から覚えたんだろう。

とはいえ、まだまだである。

「私も混ぜて欲しいな」

気付けば、エアが遠慮なく隣りの席に座ってきた。

「あたし、横で軽く食べてるわね。頑張って学びなさいよ、エア」
ヒルダが偉そうに言い、エアの隣りに座って骨付き肉をかじりだした。美味そうだ。

見ていたら、お腹がぐうと音を立てた。

「う……」

つい顔を赤くしてうつむくと、それを見たヒルダがきやらきやら笑いだす。

「正直ね、少年！」

「ふふ。私の分だけどあげるよ、シューター君」

「食べ物で釣るなんて卑怯だよっ！ 分かった、じゃあ僕はお茶を買ってきてあげる」

対抗心を燃やしたらしきトリトラが、ギルドを出て行き、すぐに木の実のカップを手にして戻って来た。ギルド前にある飲食店からテイクアウトしてきたらしい。

この辺りは、中身は食べられないけれど柔らかく、皮が固い赤い実がなるアーシェルクというカツコイ名前の木が多く生えている。荒野でも育つらしく、テイクアウト用のコップやスープ皿代わりによく使われているのだ。実の中身自体は、ケテケテ鳥の餌になるんだそうだ。ケテケテ鳥は、ケテケテと鳴く真つ黒い羽毛の鳥だ。七面鳥くらいの大きさがあ、この辺で出る鳥肉料理は主にケテケテ鳥だ。レステファルで隊商の馬車を曳いていたクルクルといい、なんともネーミングセンスが安直である。……分かりやすくいいけど。

そして、ヒルダが持っている骨付き肉もまた、ケテケテ鳥のハーブ焼きである。

「……いただきます」

お腹が空いていたので、遠慮なく貰うことにした。

両手を合わせて呟き、紙袋入りの肉を食べる。茶はポポ茶だ。

「それって何？ お祈り？」

エアが不思議そうに問うのに、口の中の物を飲み込んでから答え

る。

「俺の故郷の、食事の時の礼儀みたいなもん。食べる前に、食べ物とそれを作ってくれた人に感謝をこめて言うんだ。で、食べ終わると、ごちそうさまって言う。宗教ではないけど、これしないと何か気持ち悪いから」

「へえ、良い風習だね。ここいらじゃ、食前の祈りで、地の精霊と水の精霊に感謝するんだけど、私やヒルダは精霊信仰はしてないからね、特に何もしないかな」

「人それぞれ、好きにすればいいと思う。宗教だってそうだ。信じたいものを信じればいいと思う。ただ、信仰を押し付けるのは良くないから、それさえ気を付けておけばいいかな」

修太が淡々と返すと、ヒルダがシニカルに口元をひん曲げて笑った。

「へえ、信仰の押し付けか……。はは、今の言葉、白教徒の連中に是非聞かせてやりたいね」

「俺の故郷は、八百万の神様がいるって考えをしててさ。何にでも宿ってるんだ。だから、漠然とした宗教感はあるんだけど、違う土地の宗教を良いところだけ混ぜこぜにしたりしてて、なんか信仰心に薄いんだよね。無信仰ってわけではないと思うんだけどさ。だから俺、一つの神様を盲目的に信仰するっていうのがよく分からないんだよな」

その感覚だけは、未だによく分からない。

でも、なんとなく漠然と、神様みたいな大きな存在はいるんだろうなという気がしている程度。

エレイスガイアの創造主であるオルファールンには直に会ったので、いないとは言わないが。

「ちっさいのに小難しいこと考えてんのねえ。そんなんだと、若ハゲになるわよ？ 少年」

「げほっ」

ちよっ、食べてる最中に背中を叩くな！

「……失礼なこと言わないで下さいよ、ヒルダさん」
咳き込みつつ、茶を飲んで、焼き鳥を食べ終わると両手を合わせ
て「ごちそうさま」と呟いた。屑を捨てるついでに井戸で手を洗い、
戻ってきたら、ここ最近でお定まりになってきた文字教習を始める。
年上相手でもやりづらいところもあるが、元々遠慮なく物を言うこ
ろがあるので、気にしない三人は助かる。

一通り文字を教え、夕飯時になったのでヒルダやエア、ギルド職
員に挨拶して宿に帰る。シークやトリトラに挨拶しなかったのは、
宿が同じだから一緒に帰ると言うからだ。

道を歩く修太の横に、パタパタと尻尾を振りながら、コウが歩い
ている。

（こいつ、疲れないのか……？）

いつ見ても、ぶんぶん尻尾を振ってテンションが高い。

「お前さ、いつもフード被ってて疲れねえの？　つか、もう暗い
しいいんじゃないか？」

確かに、シークの言う通り、周囲は薄闇に包まれている。後ろ頭
を腕で支えるようにしながら、飄々と歩いているシークを、修太は
見上げる。

「パスリル王国の辺境じゃ被ってないと危なかったし、レステファ
ルテじゃ、被ってたけどちょっとした拍子にばれて海賊に誘拐され
ちまった。その後、官船で魔物避けしたら、第三王子に目えつけ
られて、危うくあの王子の魔物避けにされちまうとこだったし。こ
れだけで面倒事を避けられるんならそうする」

修太の返事に、シークは絶句したように固まった。

「おまつ、もしかして、パスリル王国から逃げてきたのか？」

「正確には、クラ森からこっちに来たんだ」

「クラ森？」

今度はトリトラが訊いてきた。

「青空永久地帯の真下にある森」
エターナル・ブル

まあ別に嘘ついても困る内容じゃないしな。修太はあっさり答える。

「東の島国が故郷って言うてなかった？」

「うん。気付いたら啓介とそこにいた。で、フランに殺されかけたけど仲間になつて、その後、サーシャに会って、で、レステファルテでピアスとグレイとコウに会ったんだ」

「ちよつ、待て待て待て！ 今、さらって言ったけど、なにげに中身がすごくねえか！？ 特にあの女剣士の名前当たり！」

「馬鹿だな、シークつてば。気付いたら魔の森なんかにいた方がおかしいでしょ！」

「うん。でも、いたんだから仕方ねえじゃん。ま、色々あつて、不思議現象を探して旅してるんだ。フランとは和解してるから平気。今は護衛についてくれてる。俺とは仲悪いけど、ケイとは仲良いから問題ない」

腹が立つただけで問題は無い。腹が立つただけだ。…………。

「小さいのに……やけに大人びてると思ったら……」

トリトラの声が不憫そうな響きを持つ。

「帰らねえの？ 人間って家族に固執こしゅうすんだろ。遠い所から来てんなら、親が心配するんじゃない？」

シークがある意味最もな質問をした。

「それは大丈夫だ。俺の親はどっちも死んでる。一年前に事故でな」
直後、ドコツという音がした。

振り返ると、路面にシークが顔面から潰れていた。

「ああ、ごめんね。うちの馬鹿が」

トリトラが爽やかな笑みを浮かべ、地面に沈めたシークの背をぐりぐりと踏みつける。

とりあえず修太は見なかったことにした。笑顔が怖い。

「でも啓介の家は健在だからな。もう帰れないし、悪いよな……。
当の本人が、不思議現象に喜んでるからまだいいけどさ」

「帰らないんじゃない？」「

「なんか、扉が開くのが三百年後らしくってさ。俺は人間だから無理だな」

「？　なんか複雑な条件があるわけ？」

「まあな」

嘘は言っていないので、トリトラは不思議そうに首をひねりつつも頷いた。

「二人は帰らないのか？　マエサマナに」

「え？　帰らないよ？」

更に不思議そうに言われた。何で帰るのか分からないといった風情で。

「一回くらい、顔見せに帰ってやれば？」

「何でそんなめんどくさいことしなきゃいけないんだよ。どうせ追いつ返されるんだから、帰る必要ないと思うけど」

なるほど。帰る場所がなくても気にしない、グレイタイプらしい。

「ねえ、シーク？」

「ああ、そうだな。この野郎っ」

「げふっ」

シークは肯定しつつ、回し蹴りをトリトラに放つ。トリトラは油断していたのか、もろに腹に一撃をくらい、路地裏まで吹っ飛ばされた。バキャン！　という、何かが割れる音が響いた。

「ふうふう、ざまあみろ！」

鼻息荒く、シークが言い放つ。

「お前ら、俺の後ろで派手に喧嘩するのやめてくれない？」

つい言ってしまった修太は悪くないと思うんだが、どうだろうか。

4 修太の暇潰し（後書き）

見ていると痛いですが、二人の喧嘩はじゃれあいレベルだったりします。

それから、二人とも特に何か考えてるわけではなく、疑問に思ったことをただ口に出してるだけです。答えたくなければ相手が断るからいいだろう程度にしか考えてません。

5 厄介事の予感

三日ぶりに会って気付いたのだが、何だかあの黒狼族の少年二人——特にトリトラの方が異様に修太に懐いている気がする。

珍しいこともあるものだ。

いつも無愛想で、思ったことをはっきり言うタイプだからか、友達がいても少人数で、あとは敬遠しがちだ。だが少し親しくなれば修太の良いところが分かるのか、随分友好的になる。

なんとなく友達をとられた気がして、少しだけもわつとしてしまいが、啓介はまじまじと三人を観察してみた。

（うーん、シユウはあんま友達いなかったし、いいことなんだろうなあ）

どちらも性格は悪くなさそうだし、悪意には敏感な修太が迷惑そうにしつつも追い払う真似はしていないので、大丈夫そうである。

だが……

「なんだろう。友達じゃなくて、保父と幼稚園児に見えるなあ……」

思わず口からぼろりと感想が漏れる。

もちろん、保父が修太で、幼稚園児がシークとトリトラだ。見た目の年齢はシークやトリトラの方が上なのに、落ち着いていて世を遠巻きに見ているような修太は同年代に比べてずつと老成して見えて——それでも実年齢は十七歳なのだが——修太の方がお兄さんに見える。

たぶん、シークやトリトラが子どもっぽいんだろう。二人は何かあるとすぐに喧嘩しては、喧嘩なのかと疑問に思うような激しいバトルを繰り広げ、またけろっと仲直りしている。暴れるとすつきりするタイプらしい。それでいて周りを巻き込まないように、場所を選んでいる辺りがすごい。外であれを見た啓介は驚いたものだ。し

かし、啓介達が不在の三日でそれに慣れたらしく、呆れた様子でそれを眺めているのだから修太もすごい。

二人は迷宮探索で日々の糧^{かて}を得ているようだが、グレイと再会してから日は帰りでしか潜っていないみたいだ。それでも、一度潜れば一週間くらい余裕で暮らせる金は手に入る。それでも、武器の調整代で額が半分くらいに減ってしまうが。

「……そんな気がしてくるから言うな」

聞こえていたらしく、修太はにがっという風に顔をしかめた。自室で読んでいた本をパソコンと閉じる。

「ホフとヨウチエンジって何だ？」

言葉から褒め言葉ではないと思ったらしきシークが、じと目で問うてくる。

「なんでもねーよ。……おかえり、啓介、サーシャ。フラン、どうだった？」

満月以外で側を離れたことがないせい、修太はフランジェスカのことを気にしていたようで、挨拶してから真っ先にそれを訊いてきた。部屋は別だが、ポイズンキャットでいる間、フランジェスカは修太の側にいることが多い。寝る時も、満月の日以外は修太のベッドの足元に丸まって寝ていて、朝日が出て人間の姿に戻ると、むくつと起き上がって女部屋の方に帰っていく。白である啓介が、一度、ポイズンキャット時に毒素^{クイース}を浄化して部屋を分けてみたが、毒素が漂っているといい食べてしまうらしく、落ち着かないようですぐにこっちに帰って来たのだ。一瞬、意識が闇に吞まれてしまうのだとか。よく分からない感覚だが、フランジェスカには大事ならしい。

かと言って、サーシャリオンを女部屋に行かせればいいのかというと、男女どっちにも化けられるとはいえ、なんだか微妙だ。主にピアスと同じ部屋にさせていいのかという面において、フランジェスカは警戒しつつも気にしない気がする。まあ、本人も、啓介や修太がいる部屋の方がいいと希望するから、男部屋にいてもらってい

る。

「我の側にいる分は平気なようだったぞ。ダンジョンは人死に出るから、毒素も多い方だな。我はおいしく食べてきた。腹はいっぱいだが、人間の料理は美味いから夕飯は食べるぞ」

「そっぴや、お前もモンスターだったな……。食べてたのか」

サーシャリオンの返答に、修太がうるんな顔をした。

「うむ。呼吸するのと同時に喰らうから、傍目にはそうは見えんだろつな。毒素溜まりはケイに浄化させているし、環境もマシになるのではないか？」

そうなのだ。何かというと浄化してみると練習させられていた。

啓介は薄らと微笑を浮かべる。

「モンスター？」

「え？ そいつのにおいがモンスターみたいなのって、モンスター退治する冒険者ならよくあることだと思ってたけど、違かったのか？」

うつかりしていた。

そういえば、この二人は知らないのだった。

「ああ、我は神竜サーシャリオン「クロイツェフ。暇潰しにこやつらの旅に付き合っている。ちなみに、そこなる犬もモンスターだぞ？」
アイアンウルフ

「本性は鉄狼だ」

「「はあ！？」」

二人は声を上げ、手にしていた羽ペンを放り出し、修太の足元で満足げに寝そべって尻尾をときどきパタツと動かしているコウを見た。

「いや、こいつも冒険者の側にいるからモンスターのにおいがするんじゃないの！？ つか何、あんた、竜って……。えええ」

シークが盛大に混乱している。

「白教徒にとつ捕まった時に、モンスターの餌にされかけたつつ

たろ？ こいつがその時のモンスターな。闇堕ちしてるのを助けたら懐かれた。本当はでかいんだが、でかいから連れていけないって言ったら、なんか小さくなっただんだよな。意味わかんねえだろ」

修太がさらつと横から言った。

「僕らも意味わかんないよ。 黒 だからってモンスター従えてんの、初めて見たよ？」

トリトラは目を白黒させている。

「俺、 黒 には一人会った程度だから、他は知らねえ」

修太がそう答えた時、シークとトリトラが唐突に椅子を鳴らして立ち上がった。びつくりする啓介の前で、扉がノックされる。「入るぞ」というグレイの声に、なるほどと思いながらどうぞと答える。

「師匠！ お帰り！」

「お帰りなさい、師匠！」

扉越しでもグレイと分かるとは、やはりにおいで分かるのだろうか。啓介は感動すら覚え、グレイを見る。グレイは無言で二人を見て、ぼそりと低めでかすれ気味の、しかし良い声で言う。

「…… お前らの部屋は、ここじゃなかったはずだな」

大人で強くて格好良くて、しかも声も良いなんて羨ましい限りだ。修太が聞いたなら「お前にだけは言われたくねーよ、その台詞」と言いそうなことを、啓介は頭の中で呟く。

「すいません！ 退散します！」

「わざとじゃないです、たまたまです！」

言外に、迷惑をかけるんじゃないとつと部屋に帰れと言われた弟子二人は、急いで荷物を纏めると、慌ただしく部屋を出て行った。

「あの二人って、友達っていうより兄弟みたいだなあ」

啓介の言葉に、グレイは自分のベッドの方に向かいながら答える。「幼馴染らしいし、家も隣だったそうだからな。そんなものだろう」

へえ、俺達みたいなものかと、つい修太を見たが、修太はすでに本を開き直して視線を文面に据えていた。

「グレイ、そなた、煙草と酒と香水のにおいが物凄いぞ」

すれ違い様においがしたが、鼻の良いサーシャリオンには拷問のようなものだったらしい。しかめ面で苦言を口にする。

「酒場に行っていたからな。俺にもきついから、風呂に行ってくる」
ベッド脇のトランクを開けて着替えを引っ張り出すと、グレイは即座に扉に向かう。

「あ、待って、グレイ。ヨーエって人がギルドまで訪ねてきてたよ？ シュウは何か伝言聞いた？」

「いや」

「そ。まあそういうことだから、一応、言っておくな」

啓介の言葉に、グレイは口を閉じて、思案するように足元を見た。

「……あいつもか。ふん」

何か気に食わなさそうに鼻を鳴らし、啓介に短く礼を告げてから、部屋を出て行った。

静かに閉まる扉を見つめ、啓介は目を瞬く。

「あれ？　なんで怒ったんだろ。俺、何か悪いこと言った？」

修太やサーシャリオンを振り返ると、サーシャリオンは窓際の紐に引っかけて干していたタオルを手に取りながら言う。

「なにやら、父親の友人が気に食わないようだな。何があったか知らんが、ふふ、厄介事の香りがするな」

にやにやと楽しそうに笑みを浮かべていて、それに修太が嫌そうに突っ込む。

「サーシャが言い出すと、本気で嫌な予感がしてくるからやめろ」

まあ、修太がそう言いたいのも分からなくもない。サーシャリオンは厄介事と聞いても面白そうな顔をするだけで、困ったりしないから。

「俺も賛成。そんなこと言ったら、本当にそうなりそうだもんな——さて、と。じゃあサーシャ、グレイが帰ってきたら風呂に行くか」

風呂場は三人入れるくらいの狭い個室型だ。冒険者によっては湯が黒くなるので、ひどい時は湯を入れ替えるらしい。ただ、啓介は

水さえ入っていれば、白の魔法を使って電磁波で湯に変えられるので、燃料代がかからない。しかもサーシャリオンがいれば、魔法で水を張ってくれて大助かりというわけだ。

こんなみみっちい使い方をしたことがないと、サーシャリオンには不平を言われるが、電磁波の考え方は知らなかったようで、赤でもないのに水を湯に変えられることが面白かったようだ。これは、電子レンジの仕組みを応用したただけだ。

ある意味、知識の大安売りだと思う。

サーシャリオンが男なのか女なのか性別が無いのか分からないが、男でいる時は男扱いすることにした啓介は、最初こそ気にしていたもののサーシャリオンとも風呂に入るようになった。実を言うと、サーシャリオンは風呂を使ったことがなかったらしい。良いにおいがするからおいしそうと言って石鹸を食べそうになったのを見た瞬間、これは放っておけないと、啓介の世話焼きな性格が表に出てしまっただけである。

「俺も行く。お前らと行くと、湯が綺麗だから」

修太もいそいそと風呂の準備を始めた。

「三人で行くか。なんか修学旅行みたいで楽しいな！」

浮かれ気分で言ったら、修太がじと目で返す。

「修学旅行みたいだから肝試しに行こうなんて意見は却下だぞ」

何で分かったんだ、集団墓地に人魂と火の玉を探しに行こうって言おうとしたのを。

啓介は心から驚いて、白銀色の目を丸くした。

異世界にも火の玉が出るのかを検証してみたかった啓介は、幼馴染の先手スキルにおののきつつ、しかしどうやって巻き込もうかと思案する。一人で見ても面白くないし、人が多い方が楽しいと思うのだ。

本気で悩みだす啓介を、修太が頬を引きつらせて見ていたなど、『お化けツアー、イン異世界』の企画で頭をいっぱいにしていた啓介は気付かなかった。

5 厄介事の予感（後書き）

どうでもいい後書き

ちらりと小耳に挟んだ話では、火の玉は土葬の墓なら出るらしいです。死体から出るリンとなんとかに、火がついたものかどうか。

最初は赤外線で湯を温めると書くと思ったんですが、実際に水が温まるのか分からなかったので、電磁波にしておきました。電子レンジは、電磁波で水分子を振動させてあつためるのですね。詳しく知りたい方はご自分で調べて下さいませね。

しかし光の魔法を想像だけで使いこなすと便利ですよ。遠赤外線でマッサージも楽々！　って感じで。……しよばいですが、そうですね。

でも紫外線とかで敵を攻撃とかも出来そう。X線とか……。いや、なんか怖いしファンタジーって感じじゃないからやめとこ。

あと、石鹸が良いにおいしそうとは、小さい頃に思ったんだ。特にしゃぼん玉作る洗剤。美味しそうでなめてみて、にがさに悶絶してたわー。懐かしい。

予約投稿で、少しずつ更新してます。そのうち止まるかも……。個人的には一ページの量が少ない気がするけど。ワードで4Pはあるから、まあまあかな。断片の使徒は1Pはワード4Pからでも更新してるんで。

6 看病

結局、テンションがマックスにまで膨れ上がった啓介により、集団墓地に連れていかれるはめになった。

肝試しだから夜ということで、ポイズンキャット姿になったフランジェスかを肩に乗せ、ピアスに子どもねえという呆れた目で送りだされ、ダンジョン近くの墓地まで行った。面白がったサーシャリオンが保護者代わりだ。

——ハハハ。何でほんとに火の玉が浮いてんだよ！ 泣くぞ！！

恐怖でフリーズした修太は、墓地の入口の鉄柵にしがみつき、ぶるぶるがたがた震えて目の前の光景を見ていた。白い石造りの、カマボコ型の墓石の間に、火の玉がゆらりと浮き上がっている。

修太のびびり具合を見て、フランジェスカが馬鹿にしたように鳴いたが、修太は頭が真っ白で完全にスルーした。

「へえ、この辺は土葬なんだな。本当に火の玉って出るもんなんだな、すげえ！」

啓介は目を輝かせて拳を握っている。カメラがあつたら絶対に撮るのにと騒いでいた。

「こんなものを見て楽しいのか？ これなら我のダンジョンのヒノコの方が可愛いぞ」

サーシャリオンはがっかりしたようだ。

——俺は、楽しく、ね、え、よ！！

心の中で、一言一言を強調して怒鳴る。声にならないのは恐怖故

だ。

これならまだモンスターの方がマシだ。
びびる修太に啓介は楽しそうに笑いかけ、土葬だと火の玉が出る
ことがある科学的根拠を話した。

曰く、死体に含まれるリンが、酸化に伴い自然発火することがあ
る、とか。

実地検証が出来て嬉しそうな啓介に修太は頭痛を覚えた。

そして、満足したようだったので、啓介を引っ張るようにして帰
路についた。

（この野郎、サーシャがいるから俺はいらねえだろ！）

何が、サーシャリオンは長生きだから見たことあるかもしれない
けど、修太は見たことないだろうから、初めての遭遇の喜びを分か
ち合おう、だ。知るか！ このオカルトオタク！

*

「ちっさな賢者君。なーに、朝っぱらから不景気な気配ばらまいち
やってえ」

翌朝、ギルドを訪ねると、これからダンジョン入りする予定だと
いうヒルダとエアに会った。ヒルダがつんつんと、修太の肩をつつ
いてくる。疲れて肩を落としているからだろう。

「昨日、啓介に肝試しに付き合わされて……」

げっそりと返すと、ヒルダはきやらきやらと笑った。

「あたしも子どもの頃はよくそういうことしてたわ！ 度胸試しで
墓地に行ったり、親父の浮気調査で尾行したり！」

後半はどうだろう。

「こっちは穴掘って、そこに直に埋葬だもんね。そういうとこの方
が火の玉が出やすいって聞くし、ほんとにそうなのねー。あたしの
故郷は棺桶派だったからあんまり聞かなかったわよ」

「へえ……」

そんな派閥、結構どうでもいい。

「あと、この町の墓は、ダンジョンで死体の回収が出来なくて、墓石だけのものもあるかな。ま、あんまりバチ当たりなことするなよ、少年！」

ヒルダは修太の肩をペチンと叩き、さつくりと注意してから、受付で情報を聞いているエアの元に歩いていった。

（そっか。ダンジョンで亡くなった人の為のお墓でもあるのか……）
ふと、 그레이の顔が浮かんだ。

フレイニールの墓参りに来ないことを雑貨屋の店主が口にしていたのといい、あの墓地に 그레이の父親の墓があつたのかもしれない。そう考えると、知人の親の墓の前で失礼なことをしたなと良心が痛み、ついで、故郷の両親の墓を思い浮かべる。

（一周忌だったのに、墓参りも出来ないなんてな……。ごめんな、母さん、父さん）

心の内でそつと謝って、胸がじくじくと訴える痛みから目を反らした。気を付けないと、喪失感からくる落ち込みに際限なくとりこまれそうになる。

（とにかく、今日もバイト頑張ろう）

だから、思考を切り替え、目の前のことに没頭することにした。

*

三日後。

その日も修太はギルドでバイトをしていた。暇なのだ。

啓介達は、三日の休暇をとり、今日からまたダンジョンに潜りに行った。今回は五日潜ってくるらしい。もうすぐ百層まで到達する勢いなんだそうで、気合に溢れていた。

そういえば、この三日の休みの間、ピアスは部屋にこもっていた。出てきたらやけに満足した顔をしていて、聞けばアイテムクリエイトに没頭していたとのことだった。ダンジョンでアイテムクリエイト

トの素材がたくさん手に入る上、他のメンバーが不必要だからほとんどを分配されるのが嬉しくてたまらないようだった。しかも残りのアイテムを売った代金などで、全員分の旅費を賄っているから個人的な小遣いさえ気にしておけば、他は金を使わないわけである。そう考えてみると、ピアスのようなアイテムクリエイターにはおいしいパーティーだろう。

（啓介はピアスにめっちゃくちゃ甘いしな……）

無意識に甘やかしているところがある。

だが、ピアスはさばさばしているので、必要ない部分はすっぱり断っているから、助長することもない。ピアスは守銭奴だが、分は弁えているのだ。というより、不必要に借りを作らないようにしているようである。商人の間での鉄則らしい。

そして、作ったアイテムはダンジョン攻略の際にも使っているようだ。

それから啓介は単純にゲームみたいで楽しんでいて、フランジェス力は剣の腕がなまらなくて済むからと喜び、サーシャリオンはダンジョン内の方が涼しいと言って嬉しそうにしていた。

とにかく、四人とも楽しそうなので言うことなしだ。

ダンジョンの中は、一層ごとに下りていく形とはいえ、迷宮という名が付くように迷路になっているらしい。

百層まではほぼ変化しないらしいが、それ以降は日ごとでの変動が激しいんだとか。

慣れた道をダッシュで通過する荒技は、百層までしか使えないということだ。もちろん、モンスターが出るし、トラップもある。ただ、トラップが全て危険とは一概には言えないようだ。下の層への近道となる落とし穴トラップもあるそうだから、楽に進もうと思えばわざわざトラップにはまってもいいわけだ。

ダンジョンの話は、啓介からも聞いているが、ヒルダやギルド職員から雑談で聞かされているせいで、修太は潜っていないのに詳しくなってしまうた。

今日も夕飯時に帰ろうと考えながら仕事をしていると、昼頃、いつもとは違ったことが起きた。

昼食を摂ろうかと考え始めた時に、ギルド内が騒がしくなったのだ。

出入り口の方を見ると、シークに背負われたトリトラが、駆け付けたギルド所属の医療班に奥の部屋に案内されているところだった。ぐったりしているのを見送って、眉を寄せる。

（怪我したのか……？）

気になったが、今行っても邪魔にしかないから、我慢して待合室で本を読んでいた。

二十分程して、二人が奥から出てきた。トリトラは背負われてはいなかったが、シークに肩を借りてゆつくりと歩いていた。遠目からも顔色が悪く見えた。

今度こそ近付いてシークに事情を聞くと、モンスター毒にやられたらしい。怪我は治ったし、解毒剤を飲んだから命に別状は無いが、それでも完全に解毒が終わるまでは安静にしなければいけないらしい。宿に帰るという二人を見送ると、修太はギルドの職員に今日はもう帰ることを告げ、宿周辺の薬師や治療師、医者がいる辺りを教えて貰い、紙にメモした。

（看病するのがシークって、不安しか覚えないな……）

あのシークがまともに看病なんか出来るのか？ それならまだ修太がした方がマシな気がする。

一応、そこそこ親しい気はする二人だ。困っているなら手を貸したい。

途中でいくつか果物を適当に選んで買ってから、宿に向かう。そして二人の部屋を訪ねて、やはりなと思った。毒のせいでそのうち熱が出るだろうという話にも関わらず、トリトラは掛け布も被らずにベッドに横たわっていた。一応、寝巻らしきものは着ているが、それだけだ。

ざっと見て、飲み水の用意も無ければ、汗を拭く為のタオルもな

く、頭を冷やす布やタライの用意も無いのを見て、溜息を吐く。

「風邪引いた時の看病と一緒にだろ。何やってんだよ」

そう言つと、シークは弱り果てたように後ろ頭をかいた。

「いや、俺らつて頑丈だから、風邪や病気になる奴は滅多といねえんだよ。だから、こんなん初めてで……。正直、どうすりゃいいか分からん」

「…………マジかよ」

修太はひくりと頬を引きつらせる。

どれだけ規格外なんだ、黒狼族。

「えーと、つまり、お前ら二人とも、今まで風邪を引いたり寝こんだりしたことはないってことか？」

「そう言ってるだろ」

信じられなくて聞き直すが、肯定が返る。

愕然としつつ、それはまずいなと眉を寄せる。滅多と風邪を引かない奴の方が、いざ体調を崩すと重症になりがちだ。

「仕方ねえな。じゃあ俺が看病の仕方を教えるよ。とりあえず、シークはその洗面器に水を汲んでこい。それから、汗をかいた時用に着替えがあるなら出せ。ないなら、ちよつと行つて買つてこい」

「分かった！ 先に水を汲んでくる！」

シークは大声で返事をして、バタバタと部屋を駆けだしていった。どうやら、病人の前では静かにしろというところから始めなくてはいけないらしい。

「ほら、トリトラ。暑いのは分かるけど、掛け布は被ってる」

「ええー……」

嫌そうにするトリトラに、問答無用で掛け布をかける。

それから、修太は壁際に一つだけある窓に向かう。そして、半分だけ閉じて、カーテンを閉める。遮光性ではないから眩しいだろうが、薄暗い方が眠りやすいだろう。

そうしているうちにシークが戻ってきたので、手頃なタオルを借りて水に浸し、固く絞ったものをトリトラの額に乗せる。

「どかすなよ。そのまま寝てろ。食事の時間には起こすから」

「分かった……」

亜熱帯地域なので寝苦しいだろうが、布が気持ち良かったのか、それとも毒のせいですでに体力が限界だったのか、トリトラはあっさり眠りに落ちた。

修太は着替えを漁るシークに、処方されている解毒剤の服用方法について確かめると、一旦、階下に下りておかみさんに事情を話し、夕食に消化に良いものを用意して貰えるように頼み、その足で飲料水を貰った。

シーク達の部屋に戻ると、テーブルを借りて、旅人の指輪から岩塩とおろし金を取り出す。そして、岩塩をおろし金で削り、出来た細かい塩を少量と、ナイフで半分に切ったレモンに風味が似ている果物を絞った果汁をそれぞれ水差しに入れる。スプーンで軽く混ぜて、簡単スポーツ飲料もどきの出来上がりだ。

「何してんの？」

怪訝な顔をするシークに、水ばかり飲んでいると脱水症状がひどくなるから、こうした方がいいのだと説明する。

「着替えはあったか？」

「一着だけ。足りないだろ？」

「ああ。なら、俺が見てるから、買ってこいよ。二着はいるな。ついでにタオルも数枚よろしく」

「分かった。助かるよ、トリトラを頼んだ」

シークは手短に言いつつ、部屋の鍵をかけるようにとだけ言いつつ、出かけて行った。

6 看病（後書き）

蛇足の後書き

火の玉うんぬんは、軽く調べてみてそう書いてありました。前の
回の後書きの補足みたいな感じ。

でも、興味ある時は自分で御調べ下さいね。

7 音の正体

（ひやつこい……。何これ）

トリトラはゆるゆると目蓋を持ち上げながら、ひたひたする額の上のものを手で摘まんて持ち上げた。濡らした布だ。

内心、意外に思う。

あの脳筋シークが、こんな気のきいたことをするなんて。

そうしていると、横から伸びた手が布を取り上げ、トリトラの額に布を乗せなおした。

「湿って気持ち悪いかもしれないけど、乗せとけ。熱、結構出てる」
声がシークではないことに驚いて、トリトラが右を見ると、わざわざ運んできたのか、枕元に置いた椅子に小さな少年が座っている。
（なんだ、シューターか……）

どうやら毒のせいで鼻が馬鹿になっているらしい。においがさっぱり分らない。

植物系魔物の棘付き蔦を素手で防ぐなど、我ながら馬鹿な真似をしてしまった。湿地帯フィールドで、足を滑らした直後で、しかも剣を手放してしまったせいだ。戦闘中に得物えものを手放すなど、自殺行為も甚だしい。

たいていはソロでダンジョンに潜るから、たまたまとはいえシークとペアを組んでいて良かった。一人だったら生還出来たか危ういし、出来ても宿まで戻るのは無理だったに違いない。

そんなことを考えていたトリトラは、眠る直前は意識が朦朧としていたので、修太がいたことを覚えていなかった。

ひとしきり自己嫌悪をしたトリトラは、喉の渴きを覚えて視線を彷徨わせる。

すると、さもそれが当然であるかのように、水入りのグラスが差

し出された。

何で分かったんだろうと目をパチクリしていると、零すなよ、と言われた。

「水に、塩と果汁を少し混ぜてる。変な水じゃないから」

「ありがと……」

声がかすれてほとんど音にならなかったが、修太には伝わったように頷きが返った。

半身を無理矢理起こし、水を飲む。

味のついた水はさっぱりしておいしかった。

一杯だけでは物足りなく感じていると、またもや修太がグラスを取り上げ、無言でお代わりを注いで渡してくれた。

「遠慮すんな。たくさん水分とって、汗かくなりして出した方がいいから」

そんなもののなか？

まあ、毒を体外に出そうとするなら、それが良いのかもしれない。生まれてこのかた寝込んだ経験がないトリトラは、それが一般的な風邪への対処法とは知らずに感心した。

一気に三杯分の水を飲むと満足して、再び寝転がる。

部屋を見回し、幼馴染の姿が無いことに気付いて問う。

「シークは？」

「着替えを買いに行った。汗かいて気持ち悪かったら言えよ」

「まだ平気」

「ならいい」

修太は手短に答え、さっきトリトラが起きた拍子に落とした布を洗面器に浸してしぼり、再びトリトラの頭に乘せた。

頭がガンガンして、吐き気もするし、熱でぼうつとする。こんな目に遭うのは初めての経験なので、トリトラにはなんだか世界の終末が押しかけてきたみたいに思えた。視界がぐるぐる回るだなんて、寝ていて起こることはない。

こういう弱っている時、誰かが側にいるのがこんなに居心地の良

いものとは知らなかった。人間が家族に固執するのが、少しだけ分かった気がする。

「……ギルドの仕事、良かったのかい？」

「ああ。あれ、暇潰しだからな。シークじゃ不安だったから様子見に来たら、そのまま寝かせてるだけだったから、案の定だ。ま、気にしないで寝とけ。どうせ暇潰しの一貫だ」

口ではそう言っているが、それが気負わせないようにする為の気遣いであるのは、トリトラにもすぐに分かった。

(……うん。シークじゃこうはいかないよな……)

ものすごく納得した。

そのまま目を閉じ、眠りに身を任せようと体の力を抜く。

眠っている時は無防備にならざるをえないから、知らない者がいる所での眠りは自然に浅くなりがちだ。とはいえ、黒狼族はとにかく頑丈なので、一週間くらいなら寝なくても元気に過ごせるけれど。

だが、この子どもは初めて会った時から害になる者のおいが全くないし、目の前で寝ても平気だ。寝首をかけられる心配もないだろう。まあ、そんなことになる前に返り討ちに出来るだけの力量差があるというのもあるが。過酷な環境で生きてきたトリトラからすれば、目の前の子どもはあまりにもひ弱な生き物だ。人間という部分を差し引いても弱い。とはいえ、子どもはトリトラに害をなすどころか、見守るような穏やかな気配をしていて、トリトラはなんだか安心してぐっすり眠れそうな気すらした。

だからほとんど警戒することもなく寝ようとしたわけだが、ふいに遠くでカシャーンと何かが割れる音がした。

何の音だろう。さっき閉じた目を開ける。すると、修太が扉の方を見ているのが視界に映った。

「俺らの部屋の方からしたっばいな。窓、開けっぱなしにしてたのかも。ちよつと見てくるよ」

椅子を下りて戸口に向かおうとする修太の左手を、トリトラはほぼ無意識に掴んで止めた。

「……シークが帰ってきてからにしなよ」

何となく、嫌な予感がした。

少しばかり驚いたらしき修太がトリトラを振り返り、黒輝石クローレみたいな双眸できょとんとトリトラを見、そして、ふっと口元に笑みを浮かべた。

「分かった。シークが戻るまでここにいろよ」

どこかおかしそうに、笑みを含んだ声が言う。

「……うん」

なんだろう。その、仕方ないなあという感じ。

小さい頃、トリトラの我儘に、母がそんな感じで返していたのを思い出し、トリトラは反論したい衝動に駆られたが、どうしてそんな感じに返されたのか分からなかったので、結局、口を閉じた。

*

（やっぱ、病気になる人と人恋しくなるのかね……）

すっかり勘違いした修太は、黒狼族も人間と変わらないのだと思つて、一人笑いをこらえていた。

そのうちトリトラは眠つてしまい、修太は椅子に座つてシークの帰りを待つていた。やがてシークが帰ってきたが、階段をバタバタと駆け上がり、扉をうるさく開け、「買ってきたぞ!!」と大声で叫ぶというあまりの騒々しさに、修太はシークを廊下に引っ張りだし、とりあえず説教した。

病人への遠慮というのを覚えやがれ、この馬鹿。

トリトラは起きてしまふし、シークは馬鹿でうるさいし。修太は溜息を吐きつつ、シークを部屋に残して、自分の部屋の方に歩いていく。

扉を開けてみて、目を丸くする。

「石……?」

拳大こぶしの石が一つ、窓際に落ちていた。閉められていた窓は割れ、

ガラス片が窓際のベッドの上や床に散乱している。

（悪戯か？）

ついてきたコウが、クンクンと石やガラス片が落ちている辺りの床のにおいを嗅ぐので、修太は手で払う仕草をする。

「コウ、危ないからあっち行け」

「クウン」

一つ返事をして、コウが後ろに下がる。そして、床にちょこんとお座りした。

「誰だよ、こんな真似する奴。はあ、このベッド、グレイのなんだよな……。掃除しとかないと。えーと、おかみさんに言つて、弁償するのか？」

どうしたらいいか分からず、とりあえずおかみさんに相談することにする。

「ん？」

よく見ると、落ちている石はつるつとした石で、表面に文字が書かれている。実は間違ったやり方の手紙だったりするんだろうか。

可能性としてはないこともない気がしたので、とりあえず拾おうと手を伸ばす。

「なー、変な音がしたってトリトラが言ってたけど、ほんとか？」

——って、おい！ そいつに触るな！

「え？」

シークがいきなり戸口から怒鳴り、その声に驚いてびくりとした拍子に指先が石に触れた。

一瞬、石が青く光る。

「？」

何だ？ 修太は石をまじまじと見たが、光は一瞬で消えて、それだけだった。

シークを振り返り、修太は眉を寄せる。何故か知らないが、シークが顔を両腕で覆って、何かに耐えるような仕草をしていたのだ。

「何してんの、お前」

「え？ …… あれ？ 何で爆発しないんだ？」

「バクハツ？」

不穏な単語に、目を丸くする。

シークはさも当然だと言わんばかりに、石を指差す。

「簡易設置型地雷魔具だろ、それ」

「は？」

「いや、だから、固定後に触ると爆発するやつ。誰でも使えるから、ダンジョンでモンスター向けの罠として使ったりする……」

そう言いながら、大股に部屋を横切ってきたシークは、修太の足元にある石を見て頷く。

「うん、間違いねえ。何で発動しなかったのかは分からねえけど、お前、ついてたな。とりあえず、爆発したらこの部屋くらいは吹き飛ばす程度の威力のやつだぜ？」

「……………」

修太の背にだらだらと冷や汗が浮かびだす。

「い、悪戯にしてはやりすぎじゃないか？」

何とか声を絞り出すと、シークがおかしな冗談を聞いたというように鼻で笑った。

「悪戯だあ？ どう考えても、殺す気できてんだろ、これ。投げ込み型爆晶石^{タムス}よりはマシだけどな。爆発直後に顔が割れないで済むって点じゃ、暗殺向きかな？」

いや、今日は良い天気だけど明日は雨かな、みたいな口調で言われても困る。

「あれ？」

じろじろとこっちを見ていたシークが、ふいに眉を跳ね上げ、修太の顔を覗きこんできた。

「チビスケ、お前の目、黒じゃなかったっけ？ 青く光ってんぞ。あ、消えた」

指摘にびっくりして目を大きく瞬いたら、シークが消えたと言った。鏡を見る時間が無かったが、何故か魔法が発動していたらしい。

ふと、それが引つかかる。

「魔具……？」

顎に手を当てる。

「それって、魔法ってことか？」

「魔法を誰でも使えるような道具にしたものが魔具って聞くから、そうなのかな？ 俺、そういうのはよく分からねえから、知らね」

修太も分からないので、曖昧でも構わない。でも、今度、ピアスに詳しく聞いてみよう。

「魔法だったら、俺が使える魔法で無効化出来るから、それで爆発しなかったのかもな」

いや、爆発はしたけれど、その魔法自体が無効化されたのかもしれない。分からないが。

「そっか、なるほどな！」

ポンと手を叩くシーク。

「で、これ、どうしょ」

修太は石を拾って、シークに見せる。

「んー？ 不発なのをどうするかって考えたこともねえな。師匠に相談して、オーケー出たら、ダンジョンにでも捨ててきてやるよ。モンスターにでもぶつけときゃいいだろ」

わはははと笑うシーク。

能天気過ぎて、馬鹿にしか見えない。ときどき頭が良さそうに見える瞬間があるが、やっぱり馬鹿なんだな、こいつ。修太は内心で失礼なことを再認識する。……しかし。

「俺、爆弾を投げ込まれるようなことしたっけ？ うーん……」

腕を組んで首をひねる。

シークはきよとんと青い目を瞬く。

「何でお前宛てだと思っわけ？」

「いや、だってさあ、啓介達がない留守中、この部屋にいるのは俺くらいだろ？」

「ま、そうだな」

「啓介のファンに目えつけられる真似をした覚えはないんだけどな。でも、爆弾は流石にねえよな……」

校舎裏に呼びだされるのは日常茶飯事だったし、上から水が降ってきたり、目を放した隙に運動靴に画鋲が入っていたりという経験ならあるが……。

「ファンだあ？」

シークが訳の分からないことを聞いたというように、大仰にのけぞった。修太は重々しく頷く。

「啓介は故郷じゃ人気者だったんだ。ここでもそうみたいだけだよ。そんな奴と幼馴染してるから、やつかみがこつちに来てな。たまーに嫌がらせをされたりしてな。……今回はどいつだろうな。面倒だけど潰しに行くか」

よし、決めた。しばらく探るとしよう。

（今回はフランやピアスに矛先が向くと思ったんだけどな、こつちに来るとは）

常に側にいる連中の方にこそ、嫉妬は向かいやすいものだ。

「潰すって……」

頬を引きつらせるシーク。

「弱味見つけて、ちらつかせるだけだって。啓介に嫌われなくなければ、自然と手を引く」

「お前……意外に黒いのな……」

「失礼な。自己防衛だ」

修太だって、こんなやり方、昔は知らなかった。啓介の妹・雪奈がそうしているのを見るまでは。

真似してみたら思いの他よく効いたので、やりすぎ感のある奴にだけこうしてきただけだ。

（あんな小学生、まじ怖いんですけど）

ほんと、有能で天才っていうのは恐ろしい。

8 訪問者

何やら勘違いしているらしき修太には気付いていたが、シークはあえて訂正しなかった。

どう考えても、これは師であるグレイがらみだろう。それにしても、

（こいつ、いったいどんな日常を送ってたんだ……）

あのホワイトグレーの髪をした、人懐こい綺麗な少年を思い浮かべる。確かに人の良さといい好ましく感じる少年ではあったが、フアンというと首を傾げてしまう。むしろ、誰かれ構わず笑みを向けているところはなよなく感じて、自分とはあまり合わないかなと思った。

でも、人間には大人気らしい。

そういえば、トリトラも人間には愛想が良いと評判だった。いつも優しい笑みを浮かべているのが近寄りやすくさせているらしい。反対に、がさつで言いたいことを平気で口にするシークは、やや距離を置かれている。笑顔で毒を吐くトリトラの方が怖いと思うのだが、人間というのはよく分からない生き物だ。

強い者が尊敬される黒狼族であるが、啓介と修太を並べた場合、強さでは啓介を称賛しても、男らしさだったら修太の方が上だと答えるだろう。女が感情豊かなのは長所と見られるが、男はいつそ愛想が無いくらいの方が男らしく見られているところがあった。そういう点から見ると、師匠であるグレイはとても男らしく、しかも強いので言うことなしの存在だ。……人間受けは悪いようだが。

何やら犯人を探す気らしき修太は、シークに爆弾の件を口止めし、簡易設置型地雷魔具だった石をポケットに放り込んでから部屋を出て行った。そして戻ってくると、箒と塵取りを手に行っていた。

修太はガラス片が飛んでいるベッドの掛け布とシーツを外し、両手でぶんぶん振ってガラス片を落とし始める。背が低いせいで苦労していたので、シークも手を貸した。

側にいるのだから、手伝えと一言言えばいいのに。こちらは文字を教わっているのだから、それくらい頼みなら聞くのだが。

ガラス片を落とすのを終えるや、やはり修太は一人で掃除を始めたので、どうやら他人に頼らない性分なようだと思った。

おおかた片付け終わった頃に、宿の店主夫妻の息子ロディがやって来て、ガラスの割れた窓に簡単に布をはり、木杵にピンを刺してとめた。近いうちに修理するが三日は待つように言い、弁償代もよろしくとだけ言って去っていった。替えのシーツや掛け布はおかみさんが持ってきた。

「師匠が戻るまで、俺らの部屋に来いよ。落ち着かねえだろ？」

一応、シークの方が年上であるし、 그레이に頼まれていた手前、シークはそう言うてみた。

少し考えていたような修太だったが、結局、了承した。

曰く、トリトラの看病をするのがシークだけでは心許ないし、とのことだった。

——やっぱ生意気だ、このチビ。

夕方、シークは宿の裏庭で剣の素振りをしていた。

静かにしているというのが苦手で苦痛で仕方なかったので、トリトラのことは修太に任せて庭に出てきたのだ。

寝ている者を起こさないようにじっとしているなんて無理だ。あのチビはすごい。椅子で本を読みながら、ときどき額の布をかえ、汗がひどければタオルで軽く拭いてやるとか、無理だ。シークには無理。

そうしていて、思い出したのは 그레이の言葉だ。強さにも色々あり、“認める”判断基準は人それぞれだ。聞いた時は理解出来なか

つたが、今はなんとなく理解出来そうな気がして、素振りをやめて考える。

修太は十二かそこらの人間の子どもで、シークの目から見ると、子ウサギ並みに弱っちい。でも黒で、魔法は使える。さっきの魔具を不動にしたし、側にいる狼はモンスターが懷いたものだという。変だ。それは確か。それから、魔力欠乏症という体質的欠陥を抱えていて、寝込みやすいらしい。やっぱり弱い。

（うーん？ 弱くて、変な奴ってとこまではいいか）

でも、子どもにしては異様な程に頭が良い。文字の読み書きは勿論、本を読んでいる。看病の時のことといい物知りだ。

（あれくらいの歳の人間のガキってのは、もつと子どもっぽいし、我儘だし、考え無しなこととして大人を困らせてるのが普通だけどそれもないよな……）

子どもらしくないけれど、大人でもない変な子ども。

それから、それから……。

一人の人間についてここまで考えたことはないというくらい、シークは考える。師匠が何故認めたのか、その点を探す為に。

物静かで、シークやトリトラが話しかけると迷惑そうにするし文句も言うけれど、それでも話はきっちり聞いているから、迷惑がられてもつい話しかけてしまう。

それから、両親は死んでいて、故郷にはよく分からない理由で帰れなくて、変な仲間達と旅をしていて、それで……。

シークは少し眉を寄せた。

あのチビは、ときどき物思いにふけて窓の外を見つめていて、それが痛みでも耐えるみたいな顔になっている時があったのだ。あれはきつと寂しいという感情だろう。そういうのを表に出せば、きつと幾らか子どもらしく見えるような気がするが、そうしないのだ。でも両親のこと以外は同じ境遇のはずの啓介の方は、そんな様子はなかった。ということは、やっぱり修太は弱いということになるのだろうか。

弱くて変だが、でも、“良い奴”というのは分かる。

平気で嘘を吐く奴、騙そうとしてくる奴、見下して優位に立った気になる奴、色んな人間を見てきたが、こういう奴は珍しい。ほとんど嘘をつかず、黒狼族だからと恐れもしなければ取り入るうともせず、迷惑そうにしてもこちらが頼れば返し、見返りすら求めないそれでいて弱っていれば無条件に手を貸そうとし、でも自分は手を貸せとは言わない。

結局、なんなんだろう。

シークは馬鹿だから、分からなくなった。

でも、トリトラが気に入っているのだから、害は無いのだ。あの優しい笑みの裏で、冷静に敵と味方を判別している奴が、全く珍しすぎることに初対面から弟にしたいとまで言っていたのだから。

何も解決はしなかったが、なんとなくすっきりしたシークは、宿の表玄関へと向かう。そこでグレイと鉢合わせた。

「あ、師匠！ お帰りなさい！」

「……ただいま」

何で一步下がるんだろう。

「師匠、ちよつと話があるんですけどいいですか？」

あの簡易設置型地雷魔具のことを話しておかなくてはいけない。

シークの真剣な空気に、何かあったと思ったのか、グレイは了承した。

そしてシークは再び裏庭に戻り、人気がないのを確認してから事情を話した。

「魔具を無効化か……。流石だな」

グレイはぽつりと感想を漏らした。

「師匠、何を調べてるのか知りませんが、色々すつ飛ばして爆弾を放り込むなんてろくでもない奴、とつとと始末したらどうですか」
攻撃は最大の防御。殺られる前に殺れ、が基本な一族なので、シ

ークはそう訴えた。

「そうしてもいいが、今回は社会的に滅殺する気で動いているからな」

淡々と返された中身に、シークは少しだけびびった。

（それ、殺すより性質悪いんじゃない……）

「だいぶ証拠も揃ったし、そろそろ片を付けるつもりだ。今、動くのはまずい。相手を刺激しかなない」

「えーと、それってつまり、師匠が宿を変えたら逃走準備をしていると思われて、逆にあいつらに火の粉が飛ぶってことですか？」

シークが思い当たったことを問うと、グレイは息を飲んだ。心底驚いたように言う。

「お前……どうした。まともに返すとは。明日は砂嵐でもくるのか？」

本気で疑わしそくに空を見るグレイ。

「ひでえっ!!」

ぎゃんと叫び、うなだれるシーク。

「まあ、お前の予想通りだ。すぐ片付くから安心していろ」

「いいっすけど……。今日、トリトラがドジ踏んでモンスターの毒にやられて寝込んでるんすよ。チビスケが看病してくれてるんで、それならそのまま俺らの部屋にいさせます」

「そうか……。後で見舞いに行く」

グレイはそう答えながら、そろそろいい加減、弟子達が修太に迷惑をかけすぎだと思った。変なところで度量が広いのか、修太が二人を追い払わなかったのがそもそもその誤算だった。

そういえば、人間も黒狼族もモンスターも、皆平等に接するような子もだった。啓介の方も似たような反応だった。ふと、サマルの船で水竜と親しげに話していたのを思い出す。どちらかというと、修太は人間よりもモンスターと親しくしている気がする。啓介の方は、面白いと思えばどれにでも突撃していく。本当に、カラスとしての色といい、対照的な性格をした二人だ。あれでいて親友だと

いうのだから不思議である。

「お前達、あまり迷惑をかけるなよ」

実年齢十七歳といえど、姿は子どもだし、他人なのだ。自重しろとグレイは付け足して、宿に戻る。

シークもまた、グレイを追って宿に戻った。

*

毒のせいでトリトラが寝込んで三日目。

（まだ熱が高いな……）

修太は寝ているトリトラの額に手を当てて、眉を寄せた。

始めの危惧通り、初めて寝込んだせいか、トリトラの熱は一向に下がる様子を見せない。一度だけだが、嘔吐もあった。

二日目の方が熱が高く、三日目である今日は、二日目よりはマシだがそれでも高い。体温計はないので、手で計った印象でこの違いだ。

修太は一つ息を吐き、後ろを振り返る。

「シーク、うるさい」

トリトラの苦しみ具合におろおろしているシークが、部屋をうろつる歩き回ったり跳んだりはねたりするので、そのことへの苦情だ。

「だ、だってよ——……」

シークは口応えしかけて、へによりと眉尻と肩を下げた。ついでに黒い尾も元気なく毛が寝ている。

「そろそろ、近くの医者に診てもらうべきかもな」

「え？ でも、薬飲んで寝てりや治るってギルドで言われたぜ？」

「薬に合う合わないがあるし、症状で中身を変えたりもする。熱が引かないからもう一度診てくれって頼むのは悪いことじゃない」

「そうなのか……？」

修太はサイドテーブルに置いておいた、ギルドであらかじめ聞いておいた医者 of 居場所のメモを手取る。

「一番近い医者は、ニブロック先の所だ。シーク、事情を話して来てもらえ。本当は連れていくべきなんだろうけど、これじゃ動かすのは危ない」

「分かった！」

することが出来たシークは勢いよく部屋を飛び出していった。

診療に来てくれたオルストイ医師は、白くて長い髭が仙人みたいな老人だった。禿頭で、眉毛も白くて長い。目は開いているのか閉じているのか分からないくらいに細く、青色の法衣のようなものを着ていた。

「トリトラ、一度も寝込んだことがないらしいんだ」

修太がオルストイに状況を説明すると、オルストイは顎髭を撫でて「ふむ」と呟く。一通り診察し、薬も確認してから、再び「ふむ」とうなった。

「ううむ。これは、薬が強すぎたのかもしれないな。これで吐いたとなると、副作用かもしれない。少し効力を弱くして、別の薬を調合してやろうの」

「ありがとうございます」

修太はきつちり頭を下げる。

よく分からない顔をしているシークに、副作用について説明すると、そんなものがあるのかとショックを受けたようだった。

「坊主はしっかりしているな。見たところ、看病はお前さんがしておるのじゃろ？ 黒狼の坊主に出来るとは思えんからな」

「はい、その通りです」

「友達か知らんが、良い知り合いを見つけて良かったな、黒狼族のお前さん達ときたら、やたら頑丈なものだから、病気になる対処を間違つて、それで悪化して死んでしまう者も多いからの。こういうことはよくよく学んでおきなさい」

ぼんぼんとシークの背を叩き、オルストイは言った。

「……うん」

シークは神妙に頷き、一度戻って薬を調合すると言うオルストイを送っていった。

「丈夫すぎるのも少し考えものだね……」

疲れたように息を吐くトリトラに、水入りのグラスを渡してやりながら、修太も頷く。

「ま、薬を貰う時は弱めにしてもらおうように今後は気を付けりゃあいい」

「うん……」

水を飲むと、トリトラはまたもぞもぞと掛け布におさまった。ふうと息を吐き、熱でぼんやりした目がこちらを見る。

「……ずっとついてなくていいよ。大変でしょ」

「気にすんな。弱った時はこうするのが人間流だ」

そう返すと、トリトラはブルーグレーの目を細めて微笑んだ。

「そう聞くと……人間ってのが羨ましくなるな……。……ありがとう、シューター」

濡れた布をトリトラの額にさせる手を、修太はぴくりと止めた。

いつも修太を呼ぶ時は“君”だったのに、名を呼ぶとは思わなかったのだ。

（こんな程度のことです“認められる”のか？）

当たり前のことを当たり前にしているだけのつもりだったから少し戸惑ったが、悪いことではないと、とりあえず頷く。

「……うん」

でも、どういたしましてと返すのも変な気がして、そう答えた。しばらく何とも言えない沈黙が場を支配していた。何だか照れるなあと修太は気まずい気分で椅子の上で身じろぎする。すぐに眠りに落ちたトリトラの小さな呼吸が聞こえる以外は、外から聞こえる遠くの喧騒くらいしか聞こえない。

——コンコン

修太はびくつと肩を跳ねさせた。

どうもレステファルテ国で海賊にさらわれて以来、ノックの音にびびってしまう。シークはノックなんかしないから、宿のおかみさんか従業員だろうか。この部屋にいることは告げてあるから、もしかしたら修太の部屋の窓の修理についての話かもしれない。三日後まで待つように言われていたからだ。

「はいはい」と

そうして出たら、予想と違う人が立っていた。四十代くらいのがつしりした体躯の男と、町人のような格好のひよろりとした男。一人はどこかで見たことがある気がする。

「えーと、どちらさまでしょうか？ あいにくと部屋の主は体調が思わしくなく……」

シークやトリトラの知り合いか？ 人が来るなんて聞いてないけどな。

「大丈夫だ。それは知ってる」

「……？」

知っているなら来るなよ。いや、見舞いか？

「トリトラ、知り合いか？」

首をひねり、とりあえず知人が確認しようと室内を振り返る。

その瞬間、頭にガツンと衝撃がきた。真っ暗になった視界の向こうで、重いものが床に落ちたような音がした気がした。

9 倉庫街にて

そして次に気付いたら、埃^{ほこじ}っぽい床に転がっていた。

「へくしゅー！」

鼻がむずつとしてくしゃみをする、横から声をかけられた。

「あ、よかった。起きた……？」

「え？ トリトラ？」

そちらを見ようとして、体が動かないのに気付く。後ろ手に縛られ、足も縛られているせいだ。ろくに身動きが出来ないものの、イモムシみたいに身をひねり、声の方をなんとか向く。

修太と同じような格好をしたトリトラが、壁に背を預けて座っている。熱のせいだろう、顔は赤いし、呼吸も荒いし、何より目が虚ろだ。

「これ、どういう状況……？」

具合が心配だが、それより聞くことがあった。

「師匠が動いている件に巻き込まれたっぽいよ。弟子と仲間が一人いれば充分だろうとか何とか言ってた」

「……………」

「おかしいよねー。弟子だからって、足手まといは切り捨てられるのが普通なのに。あ、怖くなった？ ごめんね」

にこつと優しく笑うトリトラ。修太が背筋を凍らせたのに気付いたららしいが、その笑みの方が怖く見える。

「なんか……それって哀しいな」

正直な感想だ。

トリトラは僅かに首を傾げる。

「そう？ 弱肉強食が普通だから、何とも思わないけど」

不思議そうに言うのがむしろ不思議である。殺伐としすぎだろう、

黒狼族。

「だからどうにかしてここから出ないとね……」

トリトラの言葉を横目に聞きながら、修太は改めて周りを見回した。首筋をつりそうになったりして苦労したが、何とか見えた。

二人はどこかの広い倉庫にいるらしい。屋根の明かりとりから日射しが降り注ぎ、薄暗い倉庫内に光を落としている。使われなくなつて相当経つのか、白煉瓦の床のあちこちに埃が沈殿し、壁や木箱には蜘蛛の巣が這っている。

白い埃の積もった床には、二人分の足跡がある。訪問者が二人だったのを考えると、修太やトリトラは担いで運ばれたのだろうか。

「人さらい三回目なんだけど。これ、何の呪いだよ」

思わずうめいてしまった。

それでいて、縄で縛られるのは初めてだ。手首が痛いし、肩も強張っている。

三回目だし、もう無いかもしれないと希望を抱く。いったい何に巻き込まれているのか知らないが、これだけ具合の悪い者まで連れてくるなんて、あいつらはなんていう鬼畜なんだ。具合が悪化したらどうする気なのかと、自分のことはさておいて、静かな怒りが腹の辺りをゆらりと漂う。

「君も災難だね」

「全くだ」

力いっぱい同意する。色んな怒りもこめていた。

深呼吸して自身を落ち着けると、ふといつも側にいる存在がいなのに気付く。

「そっぴや、コウは？」

「さあ。部屋をつろつろして、どこかに行っちゃって、それっきりだよ」

「ふーん……」

逃げたのか？ うなったり噛みついたりするかと思ったけど、意味が分かん。

「あと、どれくらい寝てた？」

「僕もさつき起きたとこだからね。うーん、日の傾き具合からして、四の鐘くらいかな……？」

四の鐘……。だいたい正午過ぎくらいか？ 一時間近く経ってるのか。

「ウオオ——ンッ！」

前触れもなく、狼の遠吠えが響いて、修太はびくりとした。

——ボグドガメキグシャツ

ものすごい音がして、木板を鉄で補強した倉庫の扉がひしゃげて吹っ飛んだ。地面から岩が生え出している。

その隙間から倉庫へ入り、二メートルくらいの鉄狼姿に戻ったコウが、たったか駆けてくる。

「ウォンウォンヲフッ」

尻尾をぶんぶか振り、真っ直ぐに駆けてくるコウに、修太は少なからず恐怖を覚える。でかい狼なんだ、当然だろ！

「コウだな？ コウで合ってるよな？」

確認する為に必死で問う。

「オンッ！」

よし、間違いないようだ。

修太はほっと体の力を抜く。

近くまで来たコウは、急に「クウウン」と弱った声で鳴いた。修太の後ろ頭をしきりになめてくる。ピリッとした痛みが走って顔をしかめたものの、意味が分からない。

「おい、何。ちよっ」

何なの！？ 何がしたいわけ、お前！

「シューター、君、頭を怪我してるから、それを心配してるんじゃない

ない？」

「え？ そうなのか？」

自分の後ろ頭を自分で見るなんて真似は出来ないし、手は縛られているから怪我にも触れない。

目を白黒させていると、コウが修太の縄にがぶりと噛みついた。がしがじ噛んでかじり始め、時間はかかったものの、上半身を縛っていた縄が切れる。ついで、手首の縄をかじり切ってくれた。

「おお！ サンキュー、コウ」

「ウオフツ！」

コウは嬉しそうに目を細め、一声吠えた。

修太はコウの頭を撫でてやってから、足を縛っている縄を解く。結び目が固くて指先が痛くなったが、なんとか解いた。そして、トリトラの縄も解く。

「さっすが忠犬。こんなに早く脱出準備が整うとは思わなかったよ」
手首をさすりながら、トリトラは感心気味に呟く。そして壁に手を当てて立ち上がり、準備運動でもするように、とんとんと裸足の足で床を蹴る。

「寝間着姿で裸足じゃなかったら、仕込み武器あったんだけどな。今度から寝巻きにも仕込もうかな……」

なるほど。こういう経験を経て、この人達はどんどん戦闘に強くなるわけだな。誘拐されて、そこから学ぶってすごいな。修太も学んだ方がいいのだろうか。でも武器を仕込んででも使い方が分からないんだよな……。

しばらく体を解していたトリトラは、ふと思いついたようにコウを見下ろした。

「君、一回逃げたのって、その姿になって、あの二人がいなくてこるを狙ってきたの？」

「オン！」

肯定らしき返事が返る。

（へえ。賢い奴だとは思ってたけど、本気で賢いな）

修太は称賛を込めてコウを見る。それに気付いたのか、コウは黄
橙色の目をキラキラさせた。

「なっ何だこれはっ！」

和んでいたら、倉庫の入り口の方から大きな声がした。

「くっ。と、とにかく！ こっちには人質がっ」

「うるせー！」

「ぶげふっ！」

戸口を見た瞬間、あの誘拐犯の一人が真横に吹っ飛んでいくのが
見えた。

シークが跳び蹴りをお見舞いしたらしい。

「……ついでに助っ人も呼んできた？」

トリトラがぽかんとコウを見る。

「ウォン！」

コウは元気良く吠えた。

つくづく頭の良い奴だ。

*

「トリトラ！ チビスケ！ 大丈夫か！」

倉庫内に駆けこんできたシークは、真っ直ぐにこちらに駆けてく
ると、トリトラの顔色を見てのけぞった。

「おわっ！ お前、顔真っ赤なのに青いつてすげえな！ ぐふっ」

「……うるさい。黙って」

耳元で叫ばれたトリトラは容赦なくシークの脇腹に肘鉄を打ちこ
んだ。

怒りたくなる気持ちはよく分かるがひどい。シーク、心配してる
のにひどい。修太は床で悶絶しているシークに哀れみの目を向ける。
床にしゃがみこんでいたシークであるが、トリトラがふらふらと

歩いて出口に向かうのを見て文句を言うのはやめ、肩を貸してやった。

出入り口を塞ぐ岩が邪魔なのでコウに消して貰い、連れだって倉庫を出ると、すぐ右手の地面にがっしりした体躯の男が仰向けに倒れていた。白目をむいている。さっきシークが跳び蹴りをした男だ。左目の周りに出来たくつきりした青アザが、パンダみたいになっているので微妙だが、よくよく顔を見ると、やはりどこかで見た顔なような気がする。

「……こいつ、確かザードとかいう奴じゃなかったっけ？」

顔がこうであるし、ギルド内で数回見かけた程度であるから自信がなくて、修太はシークを見上げる。

「言われてみると、においが同じかもな！」

シークも分からなかったようだ。

「こいつ、どうすんの？」

「あ、平気。師匠ー！」

「おう」

グレイが倉庫群の向こうで手を上げ、こちらに歩いてくる。

「何すか、そいつ」

「俺の狙いその二だ。これで言い逃れは出来まい」

片手でひよろりとした町人風の男の後ろ襟を掴み、引きずりながらやって来たグレイは、シークの問いにあっさり答える。どこか満足げに見えるような気がするが、修太の気のせいかもしれない。

「いったいどういうこと？」

修太は目を白黒させて思わず問うたが、すぐに否定する。

「いや、今はいいや。トリトラを連れて帰らないと、悪化しちまう。後から聞かせてくれよ」

話は後からでも聞けるが、トリトラの具合は今すぐどうにかしないといけない問題だ。

「分かった。巻き込んで悪かったな、二人とも。真昼間に動くとは思わなかったからな……。トリトラ、ゆっくり治せ。シューターも

手当てしておけ」

グレイは短く言うと、もう一人の男の後ろ襟も引っ掴み、ずりずり引きずりながら去っていった。

何か、とてつもなく怖い光景だ。黒服を着た無表情の殺し屋が、これからターゲットを海に沈めに行くと言われても通じそうなのに。もっと言うと、スプラッタ映画の犯人みたいな。間違ってもグレイの方が正義には見えない光景だ。

（こわっ）

想像したりますます怖くなり、修太はぶるりと背筋を震わせるのだった。

9 倉庫街にて（後書き）

あつさり救出。コウもたまには役に立ちます。

10 いつかの約束

その日のうちに、フレイニールの友人と名高き三人の冒険者の悪事が明らかになった。

何でもこの三人、ソロで迷宮に潜る探索者狙いの強盗だったらしい。

ダンジョン内で弱ったり死にかけている冒険者を殺してその金品を奪う、という姑息な真似を繰り返していたのだそう。あまりに用意周到で今まで誰一人勘付く者はいなかった。

グレイの父であるフレイニールを最後に辞めたそうであるが、真実は分からない。

ただ、フレイニールに関しては、本当に親しくしていて共に潜ったのだそうだが、ある宝箱に入っていたSレアのオリハルコン製の腕輪が三つしかなく、分配割れを恐れて、勢い余って手にかけてらしい。

つまり、グレイが迷宮都市ビルクモールに寄りつこうとしなかったのも、父の友人たる三人の名を聞いて不機嫌になったのも、全てこの過去が由来するようだ。

（ああ、そりゃ賊嫌いにもなるわ……）

修太はひどく納得してしまった。

賊というものをこの世から根絶やしにしようと言わんばかりの、グレイの賊への憎悪の意味を、正しく理解した。信じていただろう父の友人に、強盗目的で父を殺されれば、確かに憎みたくもなる。

グレイが言うには、たまたま脱出ポートで瀕死の父親の死に際を看取り、その時に事情を聞いたらしい。そして、父親には、葬式後にすぐに町から逃げるように忠告されていたのだそう。嘘がおいで分かるグレイは危険視されるはずだし、当時のグレイでは三人

には敵わなかったからだ。

父の言う事を聞いて町を出たグレイは、いつか三人の罪を明らかにするつもりで、隣国で研鑽を積んでいた。そして修太達に会って、時期が来たと悟ったそうだった。

ザーダとヨーエはグレイを追い出そうと人質をとった反面、エルザは何もしていないように見えたが、実はしていた。トリトラが毒によりギルドの医務室に運びこまれた際、薬師に、今までにも寝込んだことのある黒狼族だから人間並みの薬でいいと嘘をついて、わざと強めの薬を出させたようだ。弟子が弱っていれば、幾ら冷徹と言われる黒狼族だろうと、師匠ならば流石に気にして隙が出来ると思っただけである。

トリトラが酷く寝込むことになった要因が意外なところであり、更には人の業の深さみたいなものに、修太は薄ら寒い気分になった。話を聞いたトリトラが、吐きそうな顔で「あの女狐……」と呟いていたその顔も怖かったが、心の内にとどめておく。

「人間ってつくづく信用出来ないけど、シューターは信用出来るよ。こんなに親身になってくれるしね」

「看病くらいで大袈裟だな」

「いまいち“認める”に値する価値があるのか分からない修太は、困惑しつつも、ナイフで小さく切った林檎もどきを塩水に浮かべたものを、器ごとトリトラ渡す。

寝込んだ時はこれだ。修太の家ではこれが出るのだ。

スープで柔らかくしたパンや、スープ単品の食事は口にしにくいらしいトリトラだが、これは食べられるようだ。

（これ、何て名前なんだろうな……）

露店で適当に果物を買って、食べてみてそれっぽいものを選び出しただけなので、名前を知らない。

見た目は楕円系をした紫色の皮をした実だが、中身は白くて林檎みたいな見た目になり、味も林檎なのだ。

「困った時はお互い様っていうし、当たり前のことをしてるだけだ

けど」

むしろ余計な御世話のレベルじゃないかとも思っただが、トリトラはそうはとらなかったようだ。

「そっとうのを当たり前に出来る人間って、そう多くないってことだよ」

枕に背を預けて座り、膝の上に置いた器を支え、フォークで林檎もどきを刺して、シャクシャクと頬張りながらトリトラは言う。声はかすれ気味で小さいが、修太には聞こえる範囲だ。

薬を変えてからは、随分調子が戻ってきた。

とはいえまだ熱はあるので、寝ておくに越したことはないが。

「で、その三人はどうなったんだよ、シーク」

トリトラが食べているのを見て、自分も食べたいと言い出したシークは、修太に塩水に浮かべた林檎もどきを作らせて、部屋の手ブルでむしゃむしゃと食べながら、首をひねる。ほんと遠慮がないよな、こいつ。だが、ガキを相手にしている気分になるせいで願いを叶えてしまう修太もいけないのかもしれない。なんか、うん、この程度の我儘で渋い顔をするのも大人げない気がするのだ、こいつら見てると。

「結構罪状があるらしくってさ、まだ裁判中だけど、ギルドの法に照らしても、資格剥奪後、良くて国外追放か五十年の禁固令、悪くて死刑じゃないかってさ。勿論、財産も没収な」

七十年生きたらかなり長生きな方で、平均寿命が六十歳前後というこの世界だ。五十年の牢屋入りというのは、実質終身刑みたいなものである。

とはいえ、そんなことを呑気な口調で言うなよとも思う。

「ここがレステファルテなら奴隷化されてるよね。僕としては、禁固令がいいな。ほら、国境際で、他国と盗賊とモンスターの襲撃におびえながらの、国境守備兵用の畑を耕す重労働なんかいいんじゃない？ 下手な鉱山より精神的にきそうじゃない」

トリトラが笑顔で言う。

修太はげっそりした。

「えげっねえ」

「お前、ほんと笑顔で毒吐くのやめろよな」

シークもピクピクと頬を引きつらせている。

「で、当のグレイは？ 裁判所？」

修太の問いに、シークはちらつと窓の方を見る。外はすっかり藍色に染まり、夜の帳が落ちていく。

「いや、ちよつと出かけてくるってさ」

「ふーん」

修太も何となく窓から外を見る。

色々思ふこともあるのだろう。

これで、あの無表情な男の気が少しでも晴れるといいと思った。

* * *

「親父、片を付けてきた」

青い闇に沈む、世界の果てのようなら寂しい共同墓地で、グレイは紫煙をくゆらせながら、酒瓶の中身を墓にふりかけた。

墓の前に座って胡坐をかき、ふうと深い息とともに煙を吐きだす。何とも感慨深い夜だ。

自身もグラスを傾けながら、独り言のように語りかける。

「思ってたより悪い奴らだった。あんた、人を見る目、なかったな」
父だった男は、陽気で人を信じやすい男だった。でもだからこそ味方も多かったのに、命を預けられると信じた者にこそ命を狙われた。それは不運と呼べるだろう。

でも、グレイはそんな父親でも、いや、だからこそ敬愛していた。たいてい、黒狼族の女との間に子をもうけた人間は、十三年ぶりに子どもと会っても迷惑そうな顔をする人が多い。でもフレイニールは珍しく違う者で、イエリ宅で会った時は、グレイに会えたことを喜んで号泣していた。

普通は一年間父親に師事したら、その父親から卒業扱いされて放り出されるものだが、フレイニールの場合はせっかく息子に会えたのに何で一年で手放さにやなんのだと言って、死ぬまでの五年間、ずっとグレイを側に置いていた。強い人だったから、グレイとしても師事出来るなら少しの間位いいかと共にいた。師匠がそんなだったせいか、グレイもシークやトリトラのような弟子を四年も置いていたわけだが。その前の二人も似たような期間面倒を見ていた。

ともかく、フレイニールは、生まれた赤子に会いに集落までわざわざやって来て、顔を見て帰るような人だったのだ。姉は覚えていないようだが、姉が三歳の時に子どもの顔を見せてくれとやって来たらしい。それでグレイが生まれることになったわけだが。母親のことを心底愛していたらしく、他に誰とも関係を持たず、姿絵片手ににやにやしていたのをよく覚えている。当然だがそんな相手は珍しいので、集落で兄弟がいる者は滅多としない。たいていが一人っ子だ。

黒狼族の女は強い相手と子どもさえ出来ればいいから、浮気でも再婚でも何でもすればいいけれど、息子の場合は一年だけ面倒を見てくれと言って男の元を去っていく。だから男の方もすでに違う相手がいる場合が多いというわけだ。

恐らく、そういうところがレステファルテ人に黒狼族が蔑まれる由縁だろう。一つ断っておくが、黒狼族の女は相手が男なら誰でもいいわけではなく、きちんと相手を見定めている。口さがない者は娼婦呼ばわりする者もいるが、家族の在り方が他の種族と違うというだけだ。

ちなみに、そんなことを言った輩は、同胞の手によりボコボコにされるので注意が必要だ。

そんな父親の最後を見ていたから、グレイは誰ともパーティーを組まない。一生、ソロでやっていくつもりだった。

だというのに、あのへんてこな旅人達にだけは、何となく手を貸してしまった。

「あいつらは、信用出来そうな気がする。良い傾向なのか、悪い傾向なのか知らないが……な」

まだ認めてはいないが、信用は出来そうだ。恐ろしくおかしい連中であるが、筋が通っているのが小気味良い。

ただ、あの 黒 の子どもだけは、信じるに値すると確信している。

海賊船で会った時、グレイを見て完全に怯えていたのに、それでも連れの命を優先し、次には第三王子の魔法から、具合が悪いにも関わらず無意識にグレイまでも庇ったのを見て、そう感じたのだ。とつさの時にこそ、人柄は出るものだ。つまり、あの子どもは、そういうものなのだ。

用は片付いたし、自分は根無し草であるから、この連中についていくのも一興かもしれない。

とにかくとても落ち着いた気分だ。

あの日、船でセイレーンの呪い歌のろいかを聞いて、幸先が良いと思ったのはやはり間違いではなかった。

「近くまで来たら、また来るよ。……親父」

酒を足したグラスを墓前に供え、グレイは一言挨拶してから立ち上がる。

すると、その眼前で、フレイニールの墓から火の玉が一つゆらりと燃え上がった。

流星のグレイも驚いて目を瞪る。

しかし、火の玉はすぐに風に揺られ、夜闇に消えていった。

まるで、いつでも来いよと告げているかのような。

「やっぱりそこにいたのか。あんたもつくづく過保護だな」

グレイはそれとは分からない程度の微笑をその薄い唇に浮かべ、空気を揺らす程度に小さく笑う。

そして、晴れ晴れとした気持ちで墓地を後にした。

人の去った墓地は、墓石がぼつぼつと白く闇に浮かび上がる。それはまるで夜の底に取り残された星のようでもあり、寂しくも温か

く誰かを待つ光のようでもあった。

* * *

——男は一人、血反吐を吐きながらも出口を目指した。

友人に裏切られたことへの失望感よりも、もっと強い感情が、男を前へと突き動かしていた。

やがてダンジョンの一角にある脱出ポートに辿り着き、一階のポート先まで転移はしたが、そこで力尽きて壁に背を預けて座った。腹の傷からはとめどなく血が流れ、命が徐々に枯渇していくのを他人事のように見ていた。

そこへ、偶々とはいえ、別にダンジョンに潜っていた息子が、帰還の為に転移で現れたのは、男の日頃の行いが良かったのかもしれない。

「……親父？」

無表情な息子の顔にも、流石に驚きが浮かんでいた。

男は息子に途切れがちに事情を話し、一言、強く付け足した。

「いいか、よく聞け。俺の葬式が終わったら、お前はとつと町から逃げろ」

つまらない宝一つで命を奪われることよりも、それが原因で息子の命までもが狙われるのは、男にはずっと腹立たしいことだった。

「何故だ。明るみにしないでいいのか」

こちらが死に際だというのに、息子ときたらいつも通り落ち着いている。相変わらず面白みに欠けるが、それでいい。お前はそれでいいんだ。

「お前には嘘が分かる……。そして……。今のお前では……。あいつらには勝てない……。だから……。今は逃げる……。だが……。いつか……。そう……。お前が力をつけたら——」

男は息子の腕を痛いくらいの力で掴む。手に感覚がなくて、目がぼやけた。

ああ、やっと会えたと思ったのに。 たった五年ぼっちで別れる羽目になるなんて。

「いつか、真実を、白日の下に……」

男はがふりと血を吐いて、痙攣しながらも腕を必死で掴んでいた。まだ言いたいことがあった。

「なあ、元気で生きろよ。い……ろんなもの……見て……でかい男になれ……」

声はかすれて、言葉になったか分からない。

視界が真っ暗だ。何も見えない。

「ああ。——親父みたいにな」

でも、息子がそう言ったのは最後に聞き取れて、男は不遇の死にしては満たされた気分で目を閉じた。

そして、男の残り火のようだった命は消え、その意識は温かな闇へと呑みこまれ、ゆっくりと落ちていった。その先にある、柔らかな光へと……。

10 いつかの約束（後書き）

第十三話、完結。

グレイの過去編ともいいます。

父の独白を入れるか悩みましたが、入れました。こういう書き方してみるのもありかなと。

第三者視点から書いてるから、こんなものでしょうか……。

私、推理もの向いてないみたいです。あっさりしてしまった……。

もつと謎が謎呼ぶみたいなのがいい気がしますけども。

私の腕ではこれが限界のようです。

でも書くのは楽しかったです。

ここまでの御拝読ありがとうございました（＾＾）

まだセーセレティー編、続きます。次はコメディーっぽくなるかもしれません。とか言いながらシリアス入ってたらすみません。あと、修太を虐めすぎてすみません； 我ながら、こんなに主人公を虐めまくってる作品は断片の使徒くらいじゃないかと思いが、ええ、主人公が立場的に弱くて、周りが助けてくれるようなのが好きなので、完全に趣味ですね。

たぶん、修太の受難はまだまだ続きます（笑

では。またのんびりお付き合い頂ければ幸いです。失礼します。

第十四話 迷子のエルフさん : 1 啓介、行き倒れを拾う

ダンジョンに潜って四日目。

啓介達はどうとう九十層までやって来た。あと少しで半分だ。

フレンジエスカとサーシャリオンが先頭を交代しながら進み、啓介が剣と雷撃の光魔法で攻撃や援護を、ピアスもまた、トラップ解除やアイテムでの攻撃による援護をして、バランスのとれた連携をしていた。

百層まではギルドで地図が販売されていることもあり、楽なものである。日ごとで所々道が変わっていたり、トラップがあったりすることを気を付けてさえいれば、迷うことも無い。そして、モンスター相手ならば剣聖の名を冠す女剣士と、人の姿をとった神竜の前に敵は無い。

調子良く一番後ろを歩いていた啓介は、ふと右手にある小道を見て、銀の目を瞬いた。

「ん？ んん……？」

つい、目をこする。

幻覚だろうか。人が倒れているように見える。

長い金髪に、とがった耳の、白い肌をした——……。

「って、エルフじゃないか！」

やおら叫びだした啓介を、先を歩いていた三人が振り返る。しかし、その時には啓介は小道に走り出していた。

「大丈夫ですか！」

エルフはうつぶせに倒れており、腰まである長い一束の三つ編みをしている。そのせいで、パツと見、女性かと思ったが、体格からどうやら男性であるようだと思付いた。法衣に似た薄水色のゆつたりした袖の上衣と、灰色のズボンを着ていて、薄水色の布製のブー

ツを履いていた。だから、背中にボーガンを背負い、腰にエストックやスローイングナイフの詰まったナイフベルト、矢筒を装備しているにも関わらず、神官のように見えた。

生きているかを確認すべく、男の肩を引いて引っくり返すと、上衣の表側の刺繍が目にとまった。銀糸で、十字にも似た花の絵が刺繍されている。繊細な図柄なので不思議と派手に見えない。防具はない布の衣服だ。エルフは非力なので重さのある防具を身に着けられないのである。肩に巻いた白のストールが首に巻き付いて苦しうだったので、緩めてやりつつ、息を確認してほっと肩を落とす。

しかし、怪我でもしているのかと思ったのに、どこにも怪我はないようだ。血の染みが見当たらないので、倒れていた原因は何だろうと考えながら、男の顔を何となく見下ろす。

（エルフって綺麗な人が多いけど、この人もまた綺麗ななあ）

悩ましげに寄せられた柳眉といい、気絶しているのに、劇中の王子みたいでどこか現実味に欠ける。

「なんだ、行き倒れか？」

ダークエルフの青年姿をしているサーシャリオンが、面白そうに唇を歪める。

その声につられたのか、エルフの男が目を覚ました。

「み……水……」

かすれた声が言葉を紡ぐ。

正しく行き倒れのようなのである。

「水や食料が尽きたのか？　しかし、そうなる前に脱出すればいいだろうに。間抜けな奴だな」

更に後方から、ゆったりと構えたフランジエスカがぼそりと判定を下す。

確かに間抜けだ。

怪我を負ったの行き倒れならたまに見かけるが、飢餓による行き倒れとなると、ダンジョンでは滅多に起きない。そうなる前に、二層につき一つある脱出ポートの転移魔法陣で、一階へと転移すれば

いいからだ。

その間拔けなエルフは、水や食料を分けられ、ひとしきり空腹を埋めると、深々と頭を下げた。遠くから響く鐘の音のような、柔らかで耳触りの良い声が言葉を紡ぐ。

「見目麗しき 白 の少年よ、助けて頂き感謝いたします。私、アーヴィン・テッダリタと申します。どうぞよろしく」

「あ、どうも。俺は春宮啓介……、ええと、ケイって呼んで下さい」大仰な話し方をする人だと思いつつ、啓介も丁寧に戻す。

「それで、どうして食料もなくて行き倒れていたんです？」
とりあえず事情を聞いてみる。

「……………」

アーヴィンはしばらく沈黙し、話すか悩む素振りを見せた。それがありにも真剣だったので、もしかや一步踏み込んだことを聞いたのかと啓介が不安になった時、ようやく口を開いた。

「道が分からなくなったのです」

啓介達は、ちらりとアーヴィンの左手に握られている地図を見た。どう見てもこの階の地図に見える。

「はい……………」

何かの冗談かと思ったが、アーヴィンはやはり深刻そうな口ぶりと言う。

「ですから、道が分からなくなったのです。化け物どもの策にまんまと落ちてしまいました」

「……………えーと」

反応に困る。

それはつまり、モンスターに追われているうちに迷ったということか？

だが、それでも少し歩けば地図通りの道が分かるはずだ。

啓介が返事に大変窮ききしていると、場の空気を全く読まないサーシヤリオンがのんびりと言葉を紡ぐ。

「なんだ。つまりはそなた、迷子か」

そう言ったサーシャリオンを、アーヴィンはキツと睨みつけた。

「化け物の陰謀です！ 迷子ではありません！」

——うわあ、面倒くさい。

四人は思わず閉口し、視線を交わした。

* * *

五日ぶりに帰ってきた啓介達は、 그레이の巻き起こした騒動の一端を聞いて、驚愕の声を漏らした。

「またさらわれたの、シユウ。うわあ。お伽噺のヒロインみたい」
「うるせえ。殴るぞ、てめえ」

修太は青筋だてて啓介を睨んだ。あんまりにも酷い言い草だ。

啓介は同情たっぷりに修太を見て、ぽんと修太の右肩に手を置く。
「大丈夫だよ。三回目だから、きつともうない」

「……そうだよな。三回もあつたんだから、もうねえよな」

修太も自身を励ますように言う。

そんな修太の前のベッドでは、トリトラが枕に背を預けて昼食を摂っている。

寝込んで五日目でやっと熱も引いて、すっかり回復したが、用心の為に明日いっぱいまでは寝ておくように厳命しているのだ。治りかけに無理をするとまた具合を悪くしかねない。毒のせいで寝込んだとはいえ、その後が薬の副作用によるから、注意している。

それでもすっかり楽になったトリトラは、ベッドでじっとしているのが退屈そうである。

そうそう。 그레이は裁判所に証人として出向いているので、ほとんど宿にはいない。夕飯時に帰ってきて、朝早くに出かけていく。一日中、法廷にいるようだ。

トリトラや修太も証人になるべきなのだろうが、トリトラは具合が悪かったので免除され、修太はまだ子どもだからと免除されたから、グレイ一人が出向いているわけである。だが、訪ねてきた冒険者ギルドの職員に、軽く事情聴取は受けた。

「何だ、その三回というのは」

フランジェスカが怪訝そうに眉を寄せる。

ここはシークやトリトラの部屋だが、一階でおかみさんから修太がこつちにいると聞いて、全員で顔を出したようだ。何か仕出かしたと勘違いしたらしく、ただの看病と見て、拍子抜けした顔をしていた。揃いも揃って失礼な連中だ。

「俺達の故郷のことわざに、『二度あることは三度ある』っていうのがあるんだよ」

啓介がにこやかにフランジェスカの問いに答える。

「ほう。的を射た言葉だな」

フランジェスカは語感が気に入ったのか、口の中で何度かことわざを繰り返す。

修太は二人から視線を外し、扉脇に立っている人物を見る。

「それで、その、さつきからサーシャを睨んでる、そのエルフのお兄さんはどちらさんで？」

当たり前前みたいな顔で一緒に部屋にいるものだから、聞くに聞けなかったのだが、やっと聞けた。

「彼、ダンジョン内で空腹で行き倒れてたのをケイが拾ったの。お礼をするって言うてきかなくて……」

ピアスが微苦笑気味にそっと教えてくれた。

その言葉で、優男を絵にしたようなエルフの男は、胸に手を当てて、道化じみた仕草で礼をした。

「初めまして、小さな仲間君に、黒狼族の少年達。私はアーヴィン・テッダリタ。どうぞお見知りおきを」

白い歯を見せてふわりと笑うアーヴィン。宗教画みたいに綺麗な顔をしている男だ。そんな男の俳優みたいな笑みを目にした修太は、

なんだかイラツとした。美貌を自覚している者の笑みにしか見えな
い。自信満々で鼻につく。

気のせいかな、そこで食事の手を止めてアーヴィンを見たトリトラ
の顔もまた、不味いものを飲みこんだような顔になった。

「空腹で行き倒れ……？　つまり迷子か！」

隣のベッドで柔軟体操をしていたシークが、倒していた上体を
上げ、笑いを浮かべて言う。

アーヴィンにはこやかに否定する。

「違います。モンスターの陰謀です」

「……」

うわ、こいつ面倒くさい。

修太とトリトラとシークは、はからずも心の内で声を揃えた。一
昨日、啓介達が思ったこととまるつきり同じである。

そんな三人の空気には一切気付かず、アーヴィンは軽やかに笑う。
「しかし、ケイのご友人方は皆さん見目麗しくていらっしやいます
ね。それもタイプが全然違うとは。私は美しいものが大好きなので、
心が躍ります」

そう言ってから、ちらりと意味ありげに、フードを外した状態の
修太を見る。

「まあ、こちらの少年は、目の色以外はそうでもありませんが」

「……………」

あんだと、この迷子野郎！　正面から喧嘩を売るとはいい度胸じ
やねえか！

修太は無言で拳を握ってぶるぶる震える。もちろん怒りだ。

「まあまあ、シューター。落ち着いて」

「そうだぞ。本当のことだろうが」

「……シーク、ちよつとどこかに消えてきなよ」

「なに怒ってんの、お前！？」

取り成そうとしたのを即座に粉碎されたトリトラは、シークに冷たく笑いかけた。正面から視線を受け止めたシークはというと、蛇に睨まれた蛙みたいにピシッと凍りつく。

そうしていると、次に、アーヴィンのハシバミ色の目がトリトラに向いた。

アーヴィンはまじまじとトリトラの顔を見て、どこかつとりと言う。

「何と美しいお嬢様……、いえ、失敬、少年ですね。女性のごとき美しい顔立ちといい、絵にして飾りたいものですね！」

瞬く間にトリトラの目が据わる。

「……ひとの気にしてることをずけずけと。僕のどこが女みたいだつて!？」

「ちよつ、落ち着けてトリトラ！ 気持ちは分かるけどっ!！」

拳を固め、即座にベッドを下りていこうとするトリトラを、修太は決死の思いで止める。ここで止めないと血の惨劇が起こりそうだ。ぶち切れているトリトラを、シークは後ろ頭を両腕で支えながら、呑気に見やる。

「なーに今更なことだ怒ってんだよ、おめえ。母親似なんだから諦めろって言ってるのに」

「うるっさいよ、シーク！ 表に出ろ！」

「ああん？ 上等だ、てめえこそ表に出ろ！」

「ああもう！ このアホども！ 喧嘩すんな!! トリトラ、明日いっぱいまで寝とけつつってんだろ!! シークも退屈だからって喧嘩を売るなっ!！」

二人の間に割って入り、修太も青筋立てて怒鳴る。

「ワンツ！」

「うわっ！」

空気を讀んだコウがシークに飛びかかり、その勢いで引っくり返ったシークが、ベッドの向こうに転がり落ちて、事態が収束する。

その横で、ピアスがそつと涙を拭う仕草をする。

「シューター君たら、ますます近所のお兄さんらしくなっちゃって

……」

「意外に面倒見良いから苦勞するよね……」

啓介も不憫そうに呟いた。

「お前らも！ 病人の邪魔だから出てけ！！」

呟きを拾った修太は、半ば八つ当たりで四人とおまけを部屋から追い出した。

第十四話 迷子のエルフさん : 1 啓介、行き倒れを拾う（後書き）

短編もどき。コメディーになつたので良かった。

アーヴィンさんのことを覚えていた人がいたらすごいと思う。目

次1の第二話7を読めば、あの人かと分かります。

やっと出せた！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1032y/>

断片の使徒 -2-

2011年11月30日00時57分発行